ロード・エルメロイⅡ世の冒険
The adventures of Lord El-Melloi II
1
「神を喰らった男」
三田誠
イラスト 坂本みねぢ

ロード・エルメロイII世の冒険
1
「神を喰らった男」
三田 誠
イラスト 坂本みねぢ

Characters
The adventures of Lord El-Melloi II
遠坂凛
エルゴ
タンゲレ
ラティオ・クルドリス・ハイラム
グレイ
ロード・エルメロイII世

空中で、破片がとどまっていた。
半透明の幻手が、危険な破片をすべて阻んでいたのだ。脂汗を流しながら、
砂にまみれた若者が、Ⅱ世をかばっていたのだった。
「エルゴ……！」
———第二章より

# ロード・エルメロイII世の冒険

The adventures of Lord El-Melloi II

## 1

「神を喰らった男」

TYPE-MOON BOOKS
サA−11

# ロード・エルメロイII世の冒険
The adventures of Lord El-Melloi II

1

「神を喰らった男」

## 目次
Contents

# ロード・エルメロイII世の冒険

## １「神を喰らった男」

---

角川文庫

目次　Contents

# ✦序章✦

ぎらぎらと、海面が陽光を照り返していた。

　いわゆるリゾート地のような、透明な海には程遠い。

　昼時にも青黒く、巨大な蛇がうねくっているような海であった。何百何千という船が毎日渡っているのだから、それも当然だろう。高度な処理システムを急ピッチで構築しているとはいえ、いまだ近隣の古い工場からはこっそりと廃液が垂れ流されている。

（……でも）

　と、僕は思う。

　代わりに、生きているという印象が強かった。観光地ではなく、多くの人々がしのぎを削り合う商業地として、海はこの瞬間も動き続けている。

　強い潮の香りは、栄養をたっぷりと喰らって、海藻類が繁はん茂もしているからだ。

　危なげなバランスを取りながら、揺れている天秤を思い浮かべた。この場合、天秤とは星の別名かもしれない。バランスが崩れたところで天秤そのものはびくともすまいが、皿に載ったひよわな生物は簡単に絶滅するだろう。

　もっとも、こちらはそんな未来どころか、明日をもしれぬ海賊なわけだが。

「おい、坊主！」

　荒っぽく声をかけられた。

　背後の浅瀬には、ドラム缶が散乱している。どれも汚れた油がこびりつき、横面に印刷されていた文字は丁寧に剝ぎ取られていた。

　よく日焼けした青年が、そのドラム缶に腰掛けている。

　マラッカ海峡近辺にはよくあることだが、いまいち人種の定かでない顔つきだった。さまざまな国が交流し合った結果である。その歴史には悲劇的なことも多かったが、行き交う人々の表情には言語化しきれぬたくましさを感じていた。

この青年も、痩せてはいるものの、引き締まった肉体をしていた。

　元は白かったと思しい化繊のシャツは、垢と油にまみれたベージュの色に鞍替えしており、かすかに鼻の奥をつく汗臭さを発している。腰のベルトにくくりつけたのは拳銃と、酒か何かが入っているらしき革袋だった。

　短く切った黒髪をぐいとかき上げ、青年の目が厳しくこちらを睨みつけた。

「どうかしましたか」

「どうかしましたじゃねえ。お前も、そろそろ乗る準備をしておけ」

　ちら、と視線を横にやると、浅瀬でマングローブが揺れていた。

　このあたりに特有の植物群は、塩水をものともせず、青々とした葉を空に向かって伸ばしている。対して、その根はまるで触手のように張り巡らされており、複雑に絡み合った形状に隠れて、中型のモーターボートが三艘、もやいでつながれていたのである。

　すでに、十数人ほどがそのボートのすぐ近くで、腰を下ろしていた。

　先に僕の淹れていたコーヒーを、歪んだ金属のマグカップへ、めいめいに注いでいる。いずれもガラの悪そうな顔つきで、取り回しの良いアサルトライフルやサブマシンガンを肩から下げていた。

　海賊といえば、雄々しく帆をはためかせた大航海時代のイメージが強いが、現代のマラッカ海峡では、少人数と機動性の高いモーターボートによる強襲が基本であった。

　歩み寄った青年が、唾を砂浜に吐き捨てる。

　ぐい、とこちらの肩口を摑んだ。

　日よけの帽子が落ちそうになって、あわててかぶりなおすと、青年はあらためて尋ねてきた。

「名前は、ヤルグだったな」

「……あ、はい」

　うなずくと、目を細めた青年が、思い出したように付け加えた。

「『喫茶店』以来だな」

　この場合、喫茶店というのは文字通りの意味ではない。

　近くのバダム島にある、闇カジノの隠語だった。ほんの一、二年前までバダム島での賭博は合法だったらしいのだが、治安などの問題から取り締まりの対象となったのだ。結果として、警察から逃げ延びた関係者は闇カジノを開き、『喫茶店』などと隠語で呼ばれるようになった。

　今回の面子は、そこで集められたものだ。

　もちろんメンバーを固定している海賊もいるのだが、組織によっては足りない人員をこうして即興で集めてくるあたり、いかにも現代らしい。もうちょっとしたら、インターネットなどを使って募集し始めるのかもしれない。それとも、自分が知らないだけで、すでにそうなっていたりするんだろうか。

　値踏みするように、日焼けした青年海賊がこちらのつま先から頭までを見つめる。

　おおよそ、彼から見ると、子供にしか思えなかったんじゃないだろうか。瞳に映っている僕の姿は百六十センチにも満たない小柄さで、シャツの上に薄汚れたボロ布を纏っている。もっとも、このあたりの海賊は早ければ十代前半でデビューするらしいから、年齢についてはさほど気にされまい。

　ごくり、と僕が唾を飲み込むと、青年はこう耳打ちした。

「てめえ、魔術使いだろ。『強化』ぐらいはできるのか」

「……やっぱり、それが買われたんですか」

　ぼそぼそと返すと、青年は酒くさい息でさらに迫る。

「答えろ」

「できるのは、それぐらいです。家伝の魔術もありますが、期待し

ないでください」

「ふん。最低限できればいいさ。……さしずめ、後継者に選ばれなかった次男坊か三男坊といったところか」

「…………」

「ダンマリか。まあいい。別に履歴を聞きたいわけじゃない」

「ほかのメンバーも、魔術師なんですか」

「馬鹿。そんなにほいほい魔術師が見つかるか。俺とお前だけだ。それでも、ひとり見つかったなら幸運な方だろ」

　呆れたように言って、青年が肩をすくめた。

　魔術師。

　いかにもおとぎ話じみた概念が、本当に存在することを、僕らは知っている。

　そして、蛇の道は蛇。裏の世界は裏につながっている。非合法組織である海賊と、非現実のヴェールに隠れた魔術師は案外近しいところに存在しているのだった。もちろん、ほとんどの関係者は魔術師なんて存在を知らないが、今青年が話したように、詳しい人間が幸運に恵まれればひとりぐらいは見つけられる……程度の距離だ。

「……誰かを拉致したい。ただし、生死を問わずデッドオアアライブ、ということでしたが」

「ははは。仲間に引き込む前に、相手の名前を言うわけにいかねえからな」

「魔術使いまで引き込んで、誰を？」

「ふむ」

　今度は一拍おいてから、芝居がかった感じで、青年は口にした。

「コンサルタント、だ」

「なんですかそれは」

「本名はわからん。一年ほど前に現れて、このあたりの小規模だった海賊をまとめあげたやつでな。今じゃ中堅どころ以上の存在感を持ってやがる。……ただ、その方法に明らかに魔術を使っていてな」

　苛立たしげに、青年が歯を剥く。

「おそらく、魔術で沈没船の位置を割り出してるんだ。これまで隅の方で縮こまってた漁師やガキどもを利用して、ひたすら沈没船からサルベージしやがって。あげく見つけたブツを、政府含めたあちこちの勢力にうまいこと売り捌くもんだから、まともに顔も出さないくせにマラッカ海峡の名士気取りだ。おかげで、こちらがどれだけやりにくくなったか」

　なるほど、コンサルタントという人物はやり手らしかった。

　海賊の跋扈する領域では、当然沈没船も大量に出てくる。これらからサルベージして金品を売り捌くのならば、さしたる武力は必要ではない。重要なのは沈没船の位置を探る調査力と、手に入れた金品を売り捌く交渉力というわけだ。

　コンサルタントというネーミングも、そうした実情に即したものだったろうか。

　単純な犯罪行為ではなく、住人たちの間に組み込まれたビジネスモデル、という印象を僕はその説明から受けていた。

　忌々しそうな男の顔が、不意に唇を歪める。

「だが、この数日、ようやくつけこめそうな動きが出てきた。……悪辣で有名な時計塔の魔術師が、シンガポールに渡ってきてな」

「時計塔の、というとイギリスのですか？」

「ああ、糞ブリテン野郎の魔術協会さ」

　吐き捨てるように、男が言う。

　マレーシア周辺の地域やシンガポールは、かつてのイギリスの植民地である。独立を果たして久しく、経済的にも目覚ましい伸長を達成しているのだが、個々人の心情的にはいまだ影響が大きいらしい。

それは、裏の世界でも、ということだ。

　時計塔とは、イギリスはロンドンに本拠地をおく、魔術協会の代表だった。

「イギリスの時計塔って、確か世界の魔術組織で一番大きいんでしたっけ」

「規模だと……そうだろうな。もっとも、構成員の数でいうなら『館』の方が多いかもしれないが」

「『館』、ですか？」

「東洋──いわゆる思想魔術の組織だ。基礎的な部分と魔術回路を使うところ以外では、両者の魔術はほとんど別物だからな」

　魔術にも、複数種類があるというのは聞いたことがあった。

　アジア圏の人口を考えると、東洋の魔術組織が西洋に伍するのも当然だろう。中東のあたりでは呪術と呼ばれる技法が盛んらしい。それぞれの地域の歴史や文化が、魔術にも当然の影響を与えているのだった。

「このへんだと、思想魔術でも呪術でも西洋魔術でも、全部可能性はあるさ。でもな、コンサルタントはまず西洋圏の魔術師だ。そして、西洋圏であるなら、時計塔の第一命題は今も昔も変わらない。……神秘は秘匿すべき、だよ」

「…………」

　僕は、沈黙する。

　それは、自分もよく知る時計塔の理屈だったからだ。

「つまり、コンサルタントは派手にやりすぎたんだろうよ。あの時計塔も無視できないぐらいに」

　くく、と青年が笑う。

「焦ったせいか、情報の管理が雑になってな。いままで見当のつかなかった居場所も割り出せた。ああ、これまでの儲けはたんまり溜め込んだままだろうし、場合によってはコンサルタントの身柄を時

計塔に売り渡して、二重に儲けてもいい。どうだ、やりたい放題だろう？」

　いかにも愉快そうに、青年は下卑た表情を向けた。

　海賊向き、とは言えたかもしれない。

「それで、襲撃ですか」

　ちらと視線をやると、コーヒーも飲み終わって退屈したのか、浅瀬の海賊たちが眠そうにあくびしていた。少しでも休んでおこうと、近くの岩に身をもたせかけている者もいる。全員、十分以上に場慣れしているということだろう。

「今なら、あいつらが溜め込んでやがるのは間違いない。魔術師といったって、よほどの腕利きでなければ、不意を打てばどうとでもなる。念の為、魔術に対応できるヤツも抱き込んでおけばなおさらな」

「……なるほど」

　と、納得する。

　僕が声をかけられたのも、コンサルタントとつながりのない外部の人間だから、ということだろう。万が一関係者を引き当ててしまったら、計画の実行前に破綻しかねない。目の前の青年もそこそこに用心深いようだった。

「ところで、もうひとつ。時計塔の悪辣な魔術師というのは、どういう方なんですか」

「…………」

　今度は、青年が黙りこくる番だった。

「やめておけ。そいつは本当に悪質なんだ。だいたい、今回の襲撃には関係ないし、余計な情報を入れるのはお前のためにならねえぞ」

　それも、嘘ではない。

　界隈におけるだいたいの話は、うっかり共有すると、むしろ災い

に巻き込まれる。『喫茶店』などを使って、適宜新しい面子を募集するのも、余計な利害関係を増やしすぎないためである。一期一会、行きずりの関係ならば面倒くさいこともない。自分の身が可愛ければ、この先立ち入るべからずというわけだ。

「でも、気になります。仕事に関わる話でしょう。なんだったら、ここで立ち去ってもいいんですよ」

「……てめえ」

　一瞬、殺意のこもった眼光を放ってから、ため息とともに口を開いた。

「略奪公、とか呼ばれる魔術師だ」

「略奪って、海賊みたいな？」

「一緒にするな。俺らが奪うのは金や宝石、最悪でもせいぜい命だろうが。あいつは魔術師にとって魂よりも大事なものを奪っていくんだ」

　その口振りは、心底恐怖する怪物を表現するかのようだった。

　魔術師にとって、魂よりも大切なもの。ああ、そんなものは決まっている。魔術使いでもない限り、魔術師とは自分の何もかもをひとつに注ぎ込んでしまう生物なんだから。

「……あいつは、他人の魔術を解体して、奪っていくんだ」

　そう、告げたときだった。

　不意に、盛大な破壊の音が鼓膜をつんざいたのだ。

　三隻あったモーターボートのうち、二隻がオレンジ色の炎をあげていた。

　いや、本当に奇怪な現象はそんなことではない。これほどの爆発にもかかわらず、すぐ近くの海賊たちはうなだれたまま動かなかったのである。

「な……っ！」

唖然とした青年は、それでも最速で行動に移った。

　指先が、腰につけていた革袋を彷徨い、小さく何度かうなずいてから、

「そこか！」

　と、青年が拳銃を抜き放った。

　浅瀬の岩場が、小さく火花を散らす。

　すると、マングローブの陰から……どう考えても、それだけの面積が隠れられるとは思えない長身の影が、静かに立ち現れたのだ。

「どんな魔術を使いやがった！」

「……残念ながら、大したものじゃない」

　と、影は口を開いた。

　長い髪の男だった。

　顔立ちからすると、ヨーロッパの出身に思える。

　年齢は三十をいくらか過ぎたぐらいで、眉間に深く刻まれた皺と、不愉快そうに引き結ばれた唇が印象的だった。シャツの上に麻リネンのジャケットを羽織っただけのラフな姿だったが、上質の革靴がカジュアルになりすぎないようバランスを保っている。

「昔も似たことをやったんだが、エンジンに簡単な発火の魔術をいれただけだ。それでも魔力不足で、遅延術式の構築に失敗した。爆発はもっと後のはずだったのに。ああ、ほかの連中に至っては、ただの眠り薬だ。無論魔術で強化はしたが、結局私がうまくやれる分野はこういう類だけか」

　オレンジ色の炎を受けて、男は苦りきった顔をしていた。

　よほど直面したくない事実に、また出くわしてしまった、というようでもあった。

「……お、前……略奪公……」

　茫然と、見上げた青年が唇を震わせた。

時計塔の魔術師は、視線をゆっくりと下げる。

「なるほど。それで、コンサルタントの居場所を突き止めたわけか」

　指さしたのは、青年が腰のあたりにぶらさげた革袋だった。

「ぺなんがる、だな」

「お前、なんで──！」

　青年がとっさに半身になり、魔術師は冷厳に指摘したのだ。

「肌身離さないんだから、触媒や魔術礼装なのは察しがつく。私の居場所を探ったのも同じ魔術だろう？　おそらく土着の魔術なのは間違いない。加えて、さきほど何かに尋ねるような素振りをしていたが、タンキーやドゥクンなんかの憑依型なら、そういう手順は必要ない。だとすれば、革袋の中身は……」

「黙れ！」

　叫んだ青年が、手にしていた革袋を突き出した。

「嚙み呪えCurse and bite！」

　それは詠唱。魔術回路を賦ふ活かつし、神秘を現実に現出せしめる申請文。

　途端、その内側から何かが飛び出したのだ。

「っ……！」

　僕は、息を吞んだ。

　飛び出した中身のためだった。

　おおよそ拳ほどの大きさに圧縮され、しかし怖気立つほどの怨念と殺意に彩られた女の首であったのだ。

「生首……！」

「……正解は干し首だ。頭蓋骨を抜けば、人間の頭部は思いの外小さくなるものでね」

　後で詳しく聞いたことだが、ペナンガルとはマレー半島に伝わる魔物の名前であり、あるいはその魔物を操る者の呼び名であるとのことだった。

　この場合、魔物とは━空を飛び回る女の首なのだと。

　魔術師の肩口に、その干し首が喰いついていた。

　かろうじて動脈は避けたようだが、シャツに血が滲んでいた。

　しかし、時計塔の魔術師の顔は、かすかな苦痛を浮かべただけで、そのままゆっくりと話し続けたのだ。

「お前の魔術はこうした干し首を核にした、ある種の死霊魔術ネクロマンシーだ。思想魔術というよりも、むしろ西洋魔術寄りに思えるのは、文化の混交しているこのあたりならではか？」

　連なっていく言葉で、海賊の青年の顔が青くなっていく。

「伝承だと、この首に胃袋などの内臓もぶらさげてるそうだが、干し首にしてるあたりも含めて、術式をコンパクトに改造したわけか。だが、その方法論だと、器が小さくなった分、過剰な怨念も無駄になっているはずだ。英語の詠唱からすれば、おそらく植民地時代の三代前から四代前に方向転換したんだろうが、過去の伝統を掘り起こして、死者への感謝や罪の清算を取り入れた方がいい。今の状態は単なる残虐趣味で、効率を下げている」

　淡々とした言葉が、どれほど正せい鵠こくを射るものだったか、僕には分からない。

　しかし、青くなった海賊の顔は、今度はみるみる赤黒く染まっていった。

　屈辱によるものだろう。

　つまり、自分自身どころか先祖の営みまでもが、ただ一瞥で解体され、あげく単なる残虐趣味で効率を下げているとまで、レッテル

を貼り付けられたのだ。何がおぞましいかと言えば、その指摘を、術者である青年がどうしても否定しきれなかったことだ。

「それが……典位や色位を何人もつくりだした……時計塔の君主ロードの手際だってのか……」

「大げさな話だ」

　逆光ではっきりと見えなかったが、その魔術師は渋面をつくったようだった。

「半分以上は、典位の家に養子としていれただけだ。色位に至ってはただひとり。もともとの家系だったんだから、認められるべくして認められたにすぎん」

「ふざけるな、それが、だけなんて言うような業績か……！」

　くぐもった叫びもむべなるかな。

　実際、それは驚異的な実績なのだ。

　色位とは、時計塔における実質上の最高位であり、典位もまたそれに続く階梯である。通常なら、気が遠くなるほどの代々の積み重ねと、その堆積に応じられるほどの才能が巡り合って、初めて辿り着ける領域である。

　略奪公と呼ばれる魔術師は、その上位階梯の一角を掌握する勢いで、若年層を教導せしめたのだ。

　海賊の怒りとともに、近くのドラム缶に立て掛けていたライフルの銃口が持ち上がった。

「聞いてるぞ。生徒どもはともかく、略奪公本人の魔術は大したことないってな。ああだこうだ言っても、俺の干し首は齧りついたままじゃねえか」

「……あいにく、私の腕については返す言葉をもたんな」

「お前もやれ、ヤルグ！」

　叫びとともに射出されたのは、単なる弾丸ではなかった。

時計塔の魔術師が喝破したように、海賊の青年は死霊を扱う魔術師だった。ならば、弾丸に塗り込められたのは死霊の怨念。仮に時計塔の魔術師が銃弾程度は弾く防御魔術を敷いていたとしても、無視して食い入るはずであった。

　僕が、手を横に伸ばさなければ。

「な……っ！」

　最初、海賊の青年は何を見たか、分からなかったかもしれない。

「なんだ、そりゃあ……！」

　茫然として、青年は目を見開いた。

　突き出された鳥籠が、すべての弾丸を防ぎ、しかも内側の目鼻がついた『匣』がけたたましく喋ったからだ。

「イッヒヒヒヒ！　ずいぶん我慢したなあ、お前！」

　鳥籠に入った匣は、楽しげに金属の目鼻を動かした。

「ヤルグ！　てめえ、裏切ったのか！」

「裏切ってなんか、いません」

　僕が答えるのと同時、青年はもう一度袋を持ち上げた。

　その奥に隠されていたもうひとつの干し首は、目が紐によって閉ざされていた。

「噛み呪えCurse and bite！」

　呪句とともに、その紐が千切れ飛んだのだ。

　かっ、と剝き出された内側は空洞うつろ。

　しかし、その空洞から膨大な量の死霊が噴き出した。ある種の魔術では目や口を塞ぐことによって、内側の魔力が逃げないように蓋をするのだという。用心深い海賊にふさわしく、青年は最後まで切り札を取っておいていたのだ。

　押し寄せる死霊たちを前に、僕は恐怖を噛み殺す。

(……怖い……)

　じんわりとした恐怖が、胃の底からこみあげる。どれだけの回数遭遇しても、克服しきれない感情。それでも、歯を食いしばれば、顔をあげられる。

　首にかけたボロ布の下で、ペンダントが光った。

　魔術礼装としての機能を停止したのだ。もちろん、師匠の手によるものではない。エルメロイ教室の生徒であるフラット・エスカルドスが、つくりあげてくれた変装用の礼装であった。

「フードの、女……?!」

　僕の姿に戸惑う、青年の声。

　同時に僕の手元でも、もうひとつの変化が生じていた。

「第一段階限定解除」

　鳥籠を取り込み、匣はそのままカタチを変えた。

　陽光の下に、その有り様はふさわしくなかったかもしれない。僕の腕よりも長い刃は、三日月のように湾曲し、その刃からも柄からも異形の瞳を露出させていた。

　死神の鎌グリム・リーパー。

　いまだ燃え上がるオレンジの炎を背景に、刃と死霊が激突し、あっさりと断ち切ったのだ。いやそれにとどまらず、最初の死霊を断ち切った波紋はたちまち空中に広がり、後続の死霊すべてを消滅せしめたのである。

　彼らの未練の糸を、断ち切ったかのように。

「なん、だ、それは」

　たたらを踏んだ青年に、僕はゆっくりと歩み寄る。

　いや、もうくだらない隠いん蔽ぺいはやめよう。

「……裏切ってなんていません。拙せつは、最初から、師匠の内弟子ですから」

ライフルが立て続けに吼えた。

　十分『強化』された肉体は、弾丸の速度に匹敵する。二十八発のライフル弾のうち、自分と師匠に向かった七発だけを処理。足の裏で爆発させた魔力を推進力に変える。

　鎌を振るった。

　銃身を断ち切られたライフルとともに、青年は後ろ向きに倒れていった。

　それを確認してから、改めてフードをかぶりなおす。変装用の魔術礼装は、このフードを日差しよけの帽子として偽装してくれていたが、もしも手に取られたら不自然さに気づかれただろう。かなり危ないところではあったのだ。

「莫大な魔力をあてて、強引に魔術回路を逆流させて気絶させたのか。迷走神経反射を利用した、極東の遠当てと同じ論理だな」

　倒れた青年を見やって、時計塔の魔術師──師匠が感心したように言った。

「あまり、無鉄砲はやめてください、師匠」

「一応、死霊の嫌う香料をシャツに焚き染めてはいたんだが」

　だから全力で嚙みつかれずにすんだ、ということらしい。

　魔術師同士の戦いは、始まる前に終わっているのが常識とよく言われるが、自分はいまだに納得がいってない。今回の場合など、いくら師匠が準備していても、最初の一手で死んでしまう可能性も十分にあったはずだ。

　なのに、青年の初手を見逃さずにいられなかったのは、師匠の悪癖にほかならない。……つまり、他人の魔術を解体せずにいられない、というやつだ。

「だから、略奪公なんて言われるんですよ」

「くだらん異名で呼ばれるのも、迷惑な話だ。恐れられるのは使いようだがね」

「……師匠、また悪い顔をしてます」

「む」

　唸りをあげて、師匠がぴしゃりと頬を叩く。

「だが、君も偽名の手を抜きすぎだろう。Ｇｒａｙを逆から読んだだけとは」

「……すみません」

　気まずくなって、うつむく。

　彼は、ロード・エルメロイII世。

　そして、ヤルグならざる自分の名は、グレイ。

　黒にも白にもなれないどっちつかずグレイで、この数年ほどは、名目上だけとはいえエルメロイII世の内弟子であった。

　もちろん、さきほど魔術で変装していた姿や『喫茶店』での話も、海賊として彼らに接近するためのものだ。姿は変えられても、会話で不自然さを覚えられては仕方ないので、自分の思考を切り替えるのに苦労した。コーヒーに師匠謹製の眠り薬を入れる際も、いつ見破られるかと、緊張したものだ。

　なぜ、そんな行為に出たのかといえば──

「──さて」

　と、師匠は小さな薬瓶を取り出し、向き直った。

　ごおごおとガソリンの燃える炎は次第に落ち着いていき、また潮の香りがきつくなってきた。ぎらぎらと降り落ちる陽光を、白い波が弾き返す。たかが魔術師の争いなど関知するほどのことでもないと言うように、海はいつもの様子を取り戻していく。

　あるいは、これからの運命に比べれば、と嘲笑うように。

　何度も、潮騒が繰り返した。

　遠く、近く。

近く、遠く。

　そして。

　気付けの薬を嗅がされ、朦朧とした様子の青年を見下ろして、師匠が口を開いたのだ。

「コンサルタントの居場所を、教えてもらおうか」

＊

　──冒険の始まりは、

これより数日前にさかのぼる。

# ✦ 第一章 ✦

1

　風が、熱かった。

　親しんだロンドンのそれとはまったく異なる、異国の空気。

　太陽は高く、今にも爆発しそうなぐらい。フードをかぶっていても、道路からの反射だけで目が眩みそうになる。行き交う人々は、そんな光と熱に慣れているのか、いずれも軽装で笑いさざめきあっていた。

　遠景にはとてつもなく近代的な高層ビルが立ち並び、壮麗なモスクと世界最大級の観覧車、あたかも巨大な芋虫のごとき前衛的な建物が入り交じっている。

　それでいて道の脇には、これでもかと屋台を集めたフードセンターがあちこちにつくられ、じゅわあとソースや肉の焼ける、香ばしい匂いを放っている。

　なんでも、これらのフードセンターはホーカーセンターと呼ぶらしく、以前は自由に営業していたのだが、不衛生ということで一ヶ所に集めて、国で指導して管理をしているらしい。いずれにせよ、自分の乏しい食欲でさえ掻き立てられたのは間違いなかった。

　道路の看板には英語、中国語、マレー語、タミール語が併記されており、周囲から聞こえる言葉も同じだけの多様性を保持していた。

　ときには喧嘩寸前といった感じの雰囲気を孕みつつも、とにかく陽気で強烈なエネルギーに溢れた、南国の通り。

　シンガポール。

　赤道直下に位置する、美しい都市国家。

　自分とは、まるで逆だと思った。

こんな賑やかな場所に自分が立っているだけで、陰鬱な灰色が滲み出してしまうのではないか、とついそんなことを考えてしまったのだ。

「どうかしたかな、レディ」

　と、声がかかった。

　すぐ後ろで、サングラスをした男が歩調を合わせていたのだ。

　英国系の顔立ちであった。夜の暗さを思わせて、長い黒髪が腰のあたりまで垂れている。纏っているのは上質の麻のジャケットに、枯れ草色のトラウザー。外羽根の革靴を履いて、手には緑のダレスバッグを下げていた。

「いえ、師匠がそんな薄着なのは珍しいものですから」

「真夏のシンガポールで、ハリスツイードというわけにもいくまい。かといって、さすがにシャツ一枚ではハッタリがきかない」

　サングラスを外して、師匠がぐいと額を拭う。

　これだけ軽装にしても、暑さはさほど変わらないらしい。今にも倒れそうに顔色は青白く、最近寝不足だったものか、目の下にくまもできている。

　すると、

「イッヒヒヒ！　案外似合ってんぜ、へっぽこ魔術師！」

　自分の右肩あたりで、そんな声が生まれたのだ。

「アッド」

　名前だけ呼んで注意したが、呪いの言葉はしっかり師匠の心臓に食い入ったはずだ。

「へっぽこは余計だ。よく分かってる」

　恨めしげに、己から言い出してしまうあたり、長くひきずった劣等感の悲しさである。

　いや、あまりに恨めしげなので、申し訳ないのだけどおかしく

なってしまった。こういうところは、何年経っても変わらない。眉間の皺が以前より深くなっても、多くの魔術師からさまざまな異名で恐れられるようになっても。

　実際、不快そうに汗を拭ったあたりでも、師匠の腕前は明白である。まともな魔術師なら、ちょっとした生理現象の操作程度はどうとでもなる……らしい。魔術師ならざる自分には、それなりの授業を経た今でも、実感がわかないことなのだが。

「拙のフードは、もう少し深くかぶっていたほうがいいですか」

「ああ、そうしてもらえると嬉しい。なるべく、私にその顔が見えないように」

　無愛想な返事に、唇がほころんでしまうのを隠しながら従う。

　少なくとも、師匠のいるこの場だけは、いつもと変わらないように思えたから。

　気候を考えて、インド綿のフードをかぶりなおす。今回の服装についてはライネスの見立てに頼り切りになったのだけど、日差しよけにもなって、見かけより意外と涼しかった。ゆったりとしているから、風も入り込む。

　熱くて、爽やかな風。

　この国の風が、自分の内側の灰色も押し流してくれればいいのに。

「ところで」

　と、師匠が口を開いた。

　妙にかしこまった雰囲気で、こちらも居住まいを正してしまうと、師匠はこほんと小さく咳払いをした。軽く握った、日焼けしていない拳が印象的だった。

「ちょうど昼時だし、ご飯にしないかね」

　その白い指が、さきほどのホーカーセンターを指さしたのであった。

＊

　ホーカーセンターの内側は、たくさんの人々でごったがえしていた。

　さながら地元民の台所という趣がある。

　自分と師匠は、それぞれのお盆に、屋台で購入した料理を載せて向かい合っていた。プラスチックの椅子はシンプルなわりに十分機能的で、こちらの体を危なげなく支えてくれている。構内に流れているのは、どうやらインド系ミュージックらしいのだが、このあたりは細かいところが分からない。

　きゅう、とお腹が鳴ってしまいそうになるのを堪えつつ、師匠へと尋ねる。

「講義はどうでしたか」

「有意義ではあった。私も詳しく知らない魔術がこのあたりは多いからな」

　熱々のマレー風焼きそばミー・ゴレンを、プラスチックのフォークで頬張りながら、師匠が言う。センター前の看板にも載っていた、シンガポールの名物である。

　対面の自分は、肉骨茶バクテー。

　名前通りにごろっと骨付き豚肉の入ったスープは、見た目だけでインパクトがあるが、それ以上の滋味と刺激に満たされている。鼻孔を刺激する胡椒と丁子の香りに、かつての交易路を思い浮かべてしまった。黄金にも比せられた香辛料とは、このように人々を魅了したのだろう。

　普段少食気味な自分だが、ついついこのマーケットでは目移りしてしまって、もう一品頼みたい欲望を制御するのに苦労してしまった。

「師匠でも、知らない魔術が？」

「それはもちろん、いくらだってあるとも」

　苦笑して、師匠はこめかみのあたりを何度かつついた。

　それから、こんな風に、切り出したのだ。

「シンガポール……というより、シンガポールを含めた、マレーシア近辺は歴史上さまざまな文化がぶつかりあい、交流に至った土地でね」

　フォークで、手元の麵とソースを掻き混ぜていく。

「たとえば今食べているのも、私のミー・ゴレンはマレーの料理、君の肉骨茶バクテーは中国の福建人が故郷を偲んでつくった料理だ。港の苦力クーリーだった彼らでも、捨てられた骨にこびりついていた肉は手に入れることができたから……なんて言われている」

　陽気なミュージックの中、話す師匠の表情は相変わらずの無愛想さだ。

　ただ、人にものを教えているときの師匠が、少しだけ楽しそうに見えるのは、自分の目の錯覚だろうか。

「魔術も、これも同じだ。その魔術がいかなる源流を持つにせよ、現代に至るまでの歴史を経ていくとなれば、それぞれの文化と無関係ではいられない。私たちが魔術を発動できるほどの強い確信を得るには、長い時間と文化に裏打ちされた概念が、どうしても必要だからね」

　くるくると、円を描くミー・ゴレン。

　ホーカーセンターの人々が笑いさざめく声もまた、音楽のリズムに乗っているみたいだ。これもある種の魔術と言えるのだろうか。数多くの人々が、自然と同調してしまうほど、慣れ親しんだ律動。その時間。その感情。

「結果として、このシンガポールの神秘もまた、料理と同様の影響を受ける。時計塔に代表される西洋の魔術と、アジア圏に代表される思想魔術、また中東周辺の呪術といったさまざまな要素が入り混じっているわけだ。組織の力関係も微妙なバランスになってくるので、君主ロードの私がやってくるだけでも、あれこれ騒ぎになったぐらいだ」

「拙も……師匠についての噂は、時々聞きました」

「ふん。仮かり初そめとはいえ君主ロードである以上、私の動きは常に邪推や牽制をされるものだからな」

　魔術界の異端児。

　師匠を評するならば、このような形容になるだろう。

　おおよそ魔術の腕は平凡そのもの。出身も特筆することのない新世代ニューエイジ。それでいて、ありえないほどの偶然が重なったことから、時計塔に十二人しかいない君主ロードの代行となりおおせたばかりか、講師としては絶大なる才能を発揮して、目を剝くほどに優秀な生徒たちを続々と育て上げてしまった。はるばるシンガポールの支部まで来て、講義をするはめになったのも、この能力を買われてのことである。

　周囲からすれば、正体不明の嵐のようなものだ。

　本人はどう見ても平々凡々。君主ロードの称号をいただく魔術師としては嵐の目よりもか弱いのに、不可思議な引力を生み出し、障害を薙ぎ倒していく。……ことによったら、本人すら手ひどく傷つけるほどに。

「……それで、今回は、拙を先に派遣したんですね」

「何かのとき足手纏いになる私と一緒に行くより、内弟子の君に先に行ってもらって、周囲の動揺を落ち着かせてもらう方が安全だからな」

　少し恥ずかしそうに、師匠が言う。

　実際、普通なら、危地にひとりだけ弟子を派遣するなど恥を知れ、ということになるのではあるまいか。ただ、自分にはそれが我が身可愛さというのではないのが分かってしまう。この人が、誰にとってもベストな結果を出すため誠意を尽くした結果であろうと、理解はできなくても飲み込めてしまった。

　そういう生き方を、選んでしまう人だった。

　無様でも、みっともなくても、一番マシな在り方を摑み取ろうとする人。

（……それに）

　自分にとっては、嬉しい事柄でもあった。

　今回はひとりでシンガポールに到着して、現地での師匠のスケジュールや交流する面々を確認したりしていた。そんな秘書的な仕事が増えたのは、ある程度信用されたからではないか、とちっぽけな誇りを抱いていたのだった。

「これで、一応終わったんですよね」

「帰るまでは安心できないが。とかく、この国は魅力的なのと同様に、さまざまな問題を抱えているからな」

「問題、ですか？」

　なんとなく思い浮かべたのは、奇怪な形をしたオブジェだった。

　ふたつの皿しか持たない天秤ではなく、もっと複雑な形のオブジェがさまざまな重りをつりさげて、それでもギリギリのバランスを取っている様子。

　だけど、具体的な例は思い浮かばず、沈黙していると、察した師匠が助け舟を出した。

「たとえば……海賊なんかもそうだろうな」

「海賊が？」

「現代だと、不思議な気がする単語かな。だが国際問題として、かなり上位に位置している。なにしろ、マラッカ海峡を含めて、このあたりの海では世界の海上輸送物の二割、石油貿易量の三割ほどを輸送しているんだ。対して、海峡は狭く、つながっている河川は数百にものぼる。つまり襲いやすく逃げやすいわけで、海賊にとっては絶好の狩場と言えるだろう。実際、遡れば、十二世紀にはそうした記録が残っているぐらいでね」

　ぐる、とパスタみたいに、師匠のフォークが焼きそばをねじりとる。

「それだけの歴史があれば、当然魔術師も絡んでくる」

「…………っ！」

　一瞬、息が止まった。

　現実的な話をぐるりと裏返し、神秘の血肉を晒すかのような師匠の話法。

「海賊の信仰は、またさまざまだ。海運によって栄えた都市なのだからそれも当然。厳しい自然に立ち向かうため、海に住まう者たちは独自の掟に従うものだからな。いずれにせよ、その中に本物の魔術師が紛れ込んでいることは、けして不思議ではあるまい。神秘を扱う人間にとって都合がいいのは、おおよそ権力の裏か、まつろわぬ者たちだ」

　まつろわぬ者。

　その言葉が、自分の喉をきゅっと引きつらせるように感じた。体制に弓を引いてきた、権力に従順ならざる者たち。

「ゆえに、海賊の信仰と魔術は複雑に混じり合うこととなった。海賊が魔術師だったのか、魔術師が海賊だったのか、長い歴史の中では曖昧となっていく」

　また、ぐるりとフォークでねじられた師匠の焼きそばに、自分は渦を見た。

　安っぽいプラスチックの皿に広がるソースは、蒼い海だ。そこに巨大な渦が生まれて、波が荒ぶって、無限とも思える衝突の果てに、至極ちっぽけな何かが形成されていく。

「あらゆるものは、海から生じた。大地母神といい、それが間違えているわけではないが、ただ順序だけを問うのならば、すべての母は海だろう。もしくは父は」

　かすかに、師匠が目を細める。

　呪文のような響きを覚えたのは、自分の思い込みだろうか。

　聞こえるはずもない潮騒が聞こえた気がした。遠く、近く、距離をはっきりとさせない水の音。月と地球の引き合った、その均衡点。

「我々は海からやってきた。ならば、信仰もまた。神もまた」

　そう言って、口元にミー・ゴレンを運んだところで、幻覚は消えた。

　耳には、陽気なインド系ミュージックが戻ってきて、自分たちがいるのは現代のホーカーセンターだった。

　深々と、ついため息をついてしまった。

「なんだね？」

「いえ、師匠の講義を聞くのがなんだかひさしぶりな気がして」

「せいぜい一週間ぐらいだろう」

　そう言いつつ、師匠の口ぶりからもかすかな安堵が窺え、少しくすぐったかった。

　ガラスで仕切られた向こう側の道路を、トライショーが走っていく。

　隣に客用の台車が設けられた、タクシー代わりの自転車である。実用としてはほとんど使われなくなった時代ものだが、いまだ観光客向けに結構な台数がシンガポールのあちこちを走っているらしい。

「……遅いな」

　と、師匠がセンターにかかっている時計を見やった。

「どうしたんですか？」

「いや、今朝方、知り合いからメールがあってね。それで、食事はこのホーカーセンターにすることに決めていたんだが」

　怪訝そうに、眉をひそめたときだった。

　突然、音楽が変わったのだ。

　陽気なインド風の音楽を破って、不思議な鐘の音が鳴り響いた。

　続けて、リズムよく掻き鳴らされる弦楽器。優雅でテンポの速い

中華風の音楽に面食らっていると、立ち並んだ屋台の間から、ひとりの人影が飛び出したのだ。

　目鼻に、くっきりとした黒白の化粧を施した、若い役者。頭部の派手な被り物に、金糸銀糸で織られた衣装がホーカーセンターの中空を翻ると、スパイスの匂いで満ちた空気が、遥か彼方の戦場へと塗り替わったように感じた。

　だだん、だだん、と役者の足が、鐘に合わせて床を踏み鳴らす。顔と同じく白粉を塗られた手は模造の矛を持っており、月の輝くような弧を描いた。

「これ、って」

「ワヤンだ」

　と、師匠が口にした。

「シンガポールの、伝統的なチャイニーズオペラだ。同じワヤンだと、近くのジャワ島の影芝居、ワヤン・クリと混同されることもあるがね」

　師匠の言葉の間も、役者から目を離せなかった。

　鮮やかな宙返り。

　二度、三度と続いた着地地点は数センチの誤差もない。よほど鍛え上げられた体操選手でもこうはいかないだろう。しかも、ただ見事なだけではなく、役者が躍り上がる度に、戦場が変化していくのが垣間見えた。

　役者はたったひとりなのに、その周囲に戦っている兵士たちが見えたのだ。一度は追い込まれるものの、役者演じる武将はすんでで体勢を立て直し、近づいてくる兵士たちを薙ぎ払い、傷つきながらも戦場の中心へ近づいていく。

　しなやかな体は、まるで都市国家の文化を象徴するようだった。歴史の精せい髄ずいを、人々が思い描いてきた美をいっぱいに詰め込んで、役者の体は千変万化に躍動する。

「──、あ」

声が出るのを、飲み込んだ。

役者の顔に、いつのまにか仮面がついていたのだ。

猿えん形ぎょうの仮面であった。

「孫そん行ぎょう者じゃ……孫悟空か。シンガポールでもとりわけ人気のある題材だな」

さすがに、自分も名前ぐらいは知っている。

西遊記にも名高い石猿。七十二の変化を用い、如にょ意い金きん箍こ棒ぼうと筋きん斗と雲うんを携えた斉せい天てん大たい聖せい。

「なら、さっきまでの武将はな吒た太たい子しというわけか。一人二役とは」

猿形の仮面で、役者が何事かを叫んだ。

中国語だろう内容は分からないが、仇敵の前へ辿り着いたことは理解できた。

いや、その仇敵がさきほどまでの役者であることも、自分には伝わった。

孫悟空と、その仇敵である吒太子。

猛々しい弦楽器の旋律とともに、両者の交わした刃は七合。これ

までよりも激しく矛が打ち振られ、ついに仇敵の体を深々と貫いた。驚くべきことに、ほとばしる血の飛沫さえ、自分の眼に映ったのだ。

　勝ったのは、どちらであったろう。

　人差し指と中指を立てた剣印とともに、役者が見得を切る。

　数秒遅れて、ホーカーセンターに、拍手の嵐が巻き起こった。

　仮面を外して恭しく頭を下げた役者が、後ろに控えていた楽師たちとともに、一輪ずつ牡丹の花を置いていった。

　こちらの手前にも、一輪。

「あ、ありがとう」

「不客气プーケイチー」

　ウィンクひとつして、役者が去っていく。

　その背中が再び屋台の間に吸い込まれても、しばらく空気は元に戻らなかった。観客たちはおろか、屋台の料理人たちもかなり長い間ぼうっとしたままで、何人かはあっちちとキッチンで火傷しかけたことで我に返るほどだった。

「大したものだったな」

　と、師匠が息をつく。

「本当に……」

　自分も、半ば茫然としたままうなずいた。

　どうかすると記憶を反芻してしまいそうになるので、肉骨茶をもう一口、なるべくゆっくりと飲んでから言う。

「それに、今の師匠と一緒に見られて良かったです」

「どういう意味だね？」

　首を傾げた師匠に、自分は残った肉骨茶を一口飲んでから、正直なところを告白した。

「ここ数ヶ月ほど、なんだか悩まれているような様子でしたから」

　対する師匠の反応は、奇妙なものだった。

　瞬きして、こめかみに指をやる。手元のほとんど食べ終わったミー・ゴレンを見ながら、何度か咳払いした。

「気づかれていたか」

　と、バツが悪そうに呟く。

「師匠は、意外と分かりやすいですよ」

「君にそう言われると、返す言葉がなくて困る」

　口元をほころばせてから、師匠は瞼を閉じた。

　不思議な表情だと思った。深く刻まれた劣等感や、望まなかった環境ゆえに、さまざまな形で苦悶する師匠をすぐ近くで見ていたけれど、こんな顔は見たことがない。

「……実はだね、レディ」

　やがて、思い切ったように、彼はこう告げたのだ。

「講師から身を引こうかと考えている」

　数秒、何を言われたのか、分からなかった。

　さきほどの感動による衝撃とはまったく異なる、それは痛みなく、自分の根底までも穿つほどの一撃だった。

「ああ、もちろん君主ロードはそのままだ。ロード・エルメロイII世であることは、ライネスとの約束だからね。だが、現代魔術科にせよ、エルメロイ教室にせよ、十分講師陣は育っている。私が教壇に立つ意味は薄れてきたといっていいだろう。もとより、自ら教壇に立つ君主ロードの方がよほど少数派なのだからね」

　淡く、師匠が笑う。

　しかし、そんな慰めは耳をすり抜けていくばかりだった。ようやく受け止めた最初の言葉が、自分の中でなおも高らかに鳴り響いていた。

「師匠……」

　やっと、声が出た。

　ひどく掠れた、みっともない声でも、何か言わねばと思った。

「師匠、それは……」

「まだ、考えているだけだよ」

　優しく、師匠が言う。

「だが、以前から考えていたことではある。エルメロイ教室を維持可能なところまで持って行ったなら、今度こそ自分の魔術師としての道を、最優先すべきでないか、と」

「……拙、は……」

　言いかけたが、うまく続きが喉から出て行ってくれない。

　自然と、沈黙が落ちた。自分のそういう反応を分かっていたのか、師匠もすぐに言葉を連ねようとはしなかった。

　おそるおそる口に運んだ肉骨茶からは、味が失せていた。

　さまざまな料理の匂いで間断なく上書きされるホーカーセンターの喧騒にあって、自分は優しく柔らかなひとりぼっちを味わっていた。

　不意に、師匠が立ち上がったのだ。

「さっきの役者は?!」

「師匠……？」

　左右を見回した師匠が、成果を得られなかった証拠に、歯噛みしてそのまま腰を下ろしたのである。

「牡丹の花の茎に、こんなメモが結んであった」

「なんですか？」

　眉間にきつく皺を寄せた師匠の手元を、自分も覗き込む。

ロンドンではあまり見られない感じの上質紙に、細かく英語が綴られていた。

『君の知り合いからのメールはフェイクだ。ひとつ忠告をさせていただきたい』

「っ──！」

　唾を飲み込んだのは、続く内容によるものだった。

『エルメロイII世、君の生徒がマラッカ海峡の海賊に誘拐されている。コンサルタントという名を調べるがいい』

　メモを握った師匠の指が、細かく震えていた。

　動揺を抑えるべく唇を嚙み、間をおいて、自問するようにこう吐き出したのだった。

「……私の生徒が、海賊に捕らわれた、だと？」

## 2

──そして、時間は現在へと戻る。

深夜であった。

分厚い雲が、空を覆っている。

風が強く、黒い波が何度となく岩に打ち付けていた。

その岩にしっかとマングローブが根を伸ばし、鬱蒼と緑の葉を茂らせている。水路は複雑に曲がりくねり、その奥に小さな砂浜を隠していたのだった。

シンガポールからは西南、地図にも載ったり載ってなかったりする小さな島だ。

海流が複雑で、ともすれば岩場に捕まってしまうことから、貿易船はもとより地元の漁師たちもほとんど近寄らない海域であった。

そんな水路に、一艘のボートが漂っている。

古びた船であった。

かろうじてエンジンはついているが、完全に赤く錆びきっており、軋む船体がいまにも折れてしまいそうに見えた。放棄された船などこのあたりではよくあることで、何人かの見張りが確認しにきたが、その無残な状態を見るとすぐに踵を返していった。

それから、もう数分。

見張りたちの気配も遠ざかった頃、ボートのすぐ近くの水面から、ざばっと自分たちの体が浮上してきたのである。

「……ぜえっ、ぜえっぜえっ」

死にそうな顔で、四つん這いになった師匠は水を滴らせていた。

　自分は数呼吸ほどで常態に復帰し、姿勢を低くしたままで、周囲に注意を配る。

「立てますか、師匠？」

「大丈、夫。大、丈夫……だ……だが……少しだけ……休みを……」

　息も絶え絶えに、青ざめた顔色の師匠が片手を上げる。

　一応言い訳しておくと、この作戦を考えたのは師匠本人なのである。

　水中で息を止めていても、十分な『強化』ができていれば、取り込んだ酸素で相当な時間耐えることができる。ならば、漂流してきた体を装い、エンジンを止めたモーターボートの底にへばりついていれば、コンサルタントがいるという海賊の本拠地にも侵入できるのではないかと。シンガポール周辺の海の透明度が低いことも、こうした作戦を後押しした理由である。

　問題は……師匠の『強化』が足りなかったことだ。

　酸素そのものは十分取り込んでいたものの、それを維持するための魔力──この場合本人の生命力である精オ気ドを食われた結果、こうして悶絶しているのだった。

　もちろん、こうなることは師匠も分かっていたはずなのだけど。

　魔術師にとって最も重大といえる、魔力を生産するための魔術回路が、師匠には致命的に欠けているのだから。

　──『講師から身を引こうかと考えている』

　──『今度こそ自分の魔術師としての道を、最優先すべきでないか、と』

また、あの言葉が脳内でリフレインしてしまった。楔くさびのように、自分の心臓に突き刺さってしまっている。別に、講師をやめたからといって、師匠が師匠でなくなるはずもないのに、どうしてこんなに動揺してしまうんだろう。

　体温が下がるのを堪えて、視線を落とす。

　そうするうちに、ようやく師匠が頬から滴る水を払いながら、視線を上げた。

「……ここが、コンサルタントの本拠地、か」

　と、呟く。

　あの海賊たちから聞き出した情報で、コンサルタントと名乗る相手の居場所を割り出したのだった。もっとも、その外見は、海賊の本拠地と言われて考えるような、堅固な要塞にはほど遠かった。

　どうやら、もとは漁村と思しい。

　視覚を『強化』すると、砂浜の奥とマングローブの林とで、いくつか貧相な木造の建物があるのが見えた。どうやら、その間に木材の橋を架けて、最低限の機能性を確保しているらしい。一番広い水路の近くには、自分たちが隠れていたのと大して変わらないオンボロのボートを並べているのだが、ひょっとしてそれらのボートでサルベージをしてるのだろうか。

「あまり、海賊の居場所とは……」

「……確かに周到だな」

　言いかけた自分をよそに、師匠はそんな感想をこぼした。

「どういうことです？」

「基盤になっているのは、おそらく捨てられた漁村だ。それもほとんど手を加えてないから、拠点として改造するのに半日の手間もかかっちゃいまい。小さなサルベージを基本としている以上、大掛かりな装備はいらないんだから、これぐらい割り切った方がやりやすい。万が一見つかってしまっても、こんな地形なら住民しか分からない逃げ道がいくらもあるだろう。正面切って戦うのと、どちらがマシだと思う？」

「……あ」

　なるほど、そんな考え方もあるのかと、自分も納得してしまった。

「どうせ、ここはいつでも捨てられる一時的な拠点に過ぎない。……なるほど、コンサルタントと呼ばれる相手が、なかなか見つからなかったわけだ」

　実際、海賊から情報を引き出した後も、この場所を特定するのに相当の手間がかかったのである。防御力よりも隠蔽工作を優先したということなのだろう。

「捕まったという生徒は、誰のことか分からなかったんですか」

「今、このあたりにいるだろう弟子で、連絡が取れないのは数人いた」

　厳しい面持ちで、師匠が口にする。

「だが、そもそも、あのメモが真実かどうかも分からないんだ。だいたい魔術師である以上、自分に降り掛かった火の粉は、本来自分で振り払うべきだ」

　まだ顔は青ざめているものの、師匠の言葉は、いつもの聡明さと──意外なぐらいの冷徹さに裏打ちされていた。

　魔術師たるもの、己の身は己で守るべきなのだと。

「なのに、今回はどうしてですか？」

「これは、私を狙った攻撃の可能性が高いからだよ。レディ」

　吐き出すように、師匠が言う。

「だったら、私の責任において見定めなければならない。私の落ち度で生徒を巻き込んだのならば、それは私の手で始末しなければならない事柄だからだ。たとえ、あのメモが罠かもしれなくてもね」

　危険地帯へ、内弟子の自分を先に派遣した人がこんなことを言う。

それが矛盾に思えて、しかしあまりにも師匠らしかった。

　一見ひ弱で臆病、自虐的とさえ思える言動を繰り返しているのに、時々驚くほど大胆な行動に打って出るのが、この人だったから。

「でも、師匠じゃライフルを持ち出されたら終わりですよ」

「……そこは、君を頼りにしてる」

　情けない顔で言うのだから、ズルイと思う。

　ため息をついて、自分は淡く微笑した。

「離れないでください」

「もちろんだとも」

　うなずいた師匠が、懐から蠟ろうで密閉された試験管を取り出し、ふたりの手の甲にとろりとした冷やっこい中身を垂らしてから、小さく呪文を呟く。

　魔力が通ると、互いの存在感が薄くなったように思えた。

　隠おん形ぎょうの魔術である。

　師匠レベルの魔術では、同じ魔術師相手には通じないが、ただの一般人ならば十分だ。床板の軋む音などは隠せないので、なるだけ滑るように動きつつ、本拠地周辺の人数を確認していく。

　昔と違って、この手の行為に慣れたな……と頭の隅で思う。

　師匠が敵をつくるペースが速すぎるのがよくないのだ、と結論づけておこう。

　漁村としては放棄されたのかと思っていたが、不格好な木箱のいくつかは新鮮な魚で埋まっていた。夕食だったものか、鼻の奥につんとくるスパイスとチーズの香りが、名残のように漂っている。

　すでに建物の内側で寝付いている者も含めて、可能な限り手際よく武装や身なりをチェックしていく。

　その共通点に、自分は眉をひそめた。

「みんな若いですね……子どもと言ってもいいぐらい」

「……うむ。もちろん、仕事の性質上、海賊は若い方が向いてるんだが、これだといささか幼すぎるだろう」

　師匠の声音も訝しげだった。

　もちろん、少年兵も珍しくない地域だが、意外と彼らの顔が明るい。多くはマレー語ではっきりとした内容は分からないが、日常的な内容を楽しく話し合っているようだった。

　武装も、想像よりかなり軽装備である。

　おおよそはナイフと拳銃程度。時々アサルトライフルを持っている者もいるが、年齢層や服装が異なり、傭兵らしい雰囲気を発散している。もちろん、仮にも海賊をやっている以上、武器庫にはロケットランチャーが仕舞われていても不思議ではないのだが、どうにもちぐはぐな印象を抱かずにいられなかった。

「コンサルタントにせよ、誘拐された生徒にせよ、いるとしたら一番奥か？」

「……多分」

　さすがに、ひとつずつ建物を確認していくほど余裕はない。

　立体的に張り巡らされた木材の板を踏んで、自分たちはマングローブの森を抜けて、砂浜の奥へと進んでいく。

　あくびを噛み殺した少年の隣を、そっと通り過ぎようとしたときだった。

　紫電というべき何かが、自分の足元から体に絡みつき、眠たげだった少年がはっと目を見開いたのだ。

「結界――?!」

「イッヒヒヒヒ！　見つかったかよ！」

　とっさに拳銃を構えた少年の足を払い、申し訳ないが、魔力の奔流で神経を揺さぶって気絶させる。

それだけで済めば良かったのだが、結界は周囲への通報を兼ねていた。

鳴り響いた警報で、離れた場所の構成員たちもこちらを振り返り、銃口を向けた。

「グレイ！」

「第一段階限定解除！」

一定の呪句とともに、右肩の固フ定ッ具クから取り出された鳥籠ごと、内側の匣が変形する。

その形は、死神の鎌グリム・リーパー。

放出された魔力が、颶ぐ風ふうを巻き起こした。

自分たちの姿を今度は渦巻きが押し隠し、その隙に師匠の腰をかき抱いて、跳躍する。『強化』された脚力はふたり分の体重をものともせず、一度に十メートルを稼いだ。砂浜へと着地する寸前、滅法に放たれた弾丸から、こちらに近い二発だけを切り落とす。

……以前は、これほどの能力ではなかった。

自分の身につけた秘術は、あくまで墓守としてのものだ。基本性能の向上やある程度の護身術が含まれてはいるが、近代兵器で武装した集団とやりあうようなものではない。

いや、そもそも専門に訓練された魔術師でも、弾丸を見極められる者などどれほどいるのだろうか。

「グレイ、平気か？」

「大丈夫です。大丈夫、すぎるくらいに」

腹ふく腔こうから膨らんでくる感情を押し込め、目星をつけた建物へ走り込もうとする。

その横あいから、不意に人影が現れたのだ。

砂漠の国からやってきたような、目の粗い布で顔を覆った人物だった。おそらく海賊として、素顔を隠すための細工だろう。

自分とさして変わらないぐらいの小柄で、だからこそ心臓が早鐘を打った。何より、感覚も『強化』していたはずの自分が、直前まで接近に気づけない相手とは──！

　まるで、滑るようだった。

　こちらの懐に、相手の体がぬるりと入り込む。

　速度だけで言えば、こちらがずっと上のはずなのに、反応できなかった。自分の知らない体術。不安定なはずの砂浜を強く踏み込んで、相手の肘が鳩みぞ尾おちを抉えぐる。

　吹き飛んだ自分の体が、砂浜を転がった。

　だが、とっさに建物の陰へ師匠を突き飛ばしていたことに、相手も気づいたろう。最低限の安全だけ確保して、自分は正体不明の強敵へと向き直った。

「……アッド」

「イッヒヒヒヒ！　こいつはだいぶ厄介だな！」

　鎌に、ギョロリと目が浮かび上がる。

　さすがにこれは驚いたらしく、相手からも動揺の気配が伝わった。ほんの一瞬だけ。踏み込むよりも早く、その指が持ち上がった。

「□□□□□Anfangセット」

　呪文とともに、解き放たれた魔弾。

　ほとんど無意識で撃ち落としたが、信じられないことに、魔術は連続した。

　もはや呪文さえ必要としない一工程シングルアクション。なのに、込められた魔力がただごとではない。ライフル弾を撃ち落としても平気だった手が、たった二撃で痺れ、続く魔弾が飛び退った砂浜を穿った。

「ヒヒッ違うぞグレイ！　こいつはただの魔弾じゃあない！　本来なら物理的な攻撃力なんぞ持たない、高密度に圧縮された呪いその

ものだ！」

「ルヴィアさんの、ガンドみたいな？」

　自分の知る、最も優美な魔術師の名であった。時計塔で師匠の教育を受けている、最優秀生のひとり。

　ならば、

（この相手がコンサルタント──！）

　確信する。

　ルヴィアに匹敵するほどの魔術師が、そうそういるはずもない。

　死神の鎌グリム・リーパーを構え直したところで、突き飛ばした師匠が叫んだ。

「グレイ！」

「────っ！」

　なぜだろう。

　師匠の叫びとともに、魔術師──コンサルタントが一瞬硬直したのだ。

　その隙に、自分は跳躍していた。

　近くのマングローブの幹を蹴り、相手の目測をずらす。それにすら追いすがった恐るべき呪いガンドを斬り裂き、再びマングローブを蹴って、自分にかなう限りの最速で鎌を振りかぶる。手加減はできない。できるような相手じゃない。

　コンサルタントが息を呑むのが見えた。

　遅い。

　もはや指を向けるだけの時間はない。

　自分の魔力を喰らい、鎌がさらに変形して、大きく禍々しい刃を剝き出す。

そのとき、あわてて追いすがってきた海賊の少年や傭兵たちから、ひとりの若者が突出してきたのだ。

「駄目だ！」

　そんな風に、聞こえた。

　どこかおぼつかない英語。

　刹那、迸ほとばしった死神の鎌グリム・リーパーが、ぴたりと静止した。

　いいや、そればかりか、自分の体も空中に縫い留められたのである。

　信じられない。一言の呪文さえなかった。現代の魔術による拘束なら、ほとんどは魔力の放出で振り払うことができるのに、この術式はびくともしないどころか、まともな手応えさえなかった。

（魔術じゃ……ない……?!）

　焦りが、脳を駆け巡った。

　一秒の停滞は致命傷、二秒もあれば師匠の命も持っていかれる。

　だが、コンサルタントの指から、新たなガンドが放たれることはなかった。

　代わりに、顔を覆っていた布をほどいて、

「……ちょっと先生。これって一体どういうことですか？　どうして、わたしの大事なアジトに、先生が潜入してらっしゃるんです？」

　と、爆発寸前のマグマにも似た声音で、言ったのだ。

　布の代わりになびいたのは、夜空のような漆黒の髪であった。

　整った顔立ちは、東洋のものだろうか。エキゾチックブルーを湛えた瞳に、意志の強そうな唇。おそらく二十歳になるかならぬかの年頃で、その肢体は、まだ固かった蕾がいまにも匂やかに花開かんという風情を醸し出している。

ふと、ドラクロワの絵を思い出した。

　フランス革命をテーマに描かれた、民衆を導く自由の女神。

　もっとも、この女神には、率いるべき民衆など必要ないのかもしれないが。

「……凛りん？」

　茫然と、砂浜に尻もちをついたままの師匠が、瞬きした。

3

　そらぞらしく、潮騒が鳴った。

　状況の急激な変化についていけず、自分たちを取り囲んだ海賊の少年たちも、互いに顔を見合わせて、困ったように動きを止めている。

　たっぷり十数秒も沈黙してから、やっとのことで若者が前に出た。

　さきほど、「駄目だ」と、声を発した若者だった。

（……ふわふわ、してる？）

　なぜだか、そんな印象を持った。

　育ちの良い大型犬にも似た、ひどく柔らかな雰囲気。

　髪は伸び放題の赤毛で、潮風のためか、一部が逆立っていた。十代後半ハイティーンに思えるが、人種や国籍は定かでない。シンガポール近辺の単なる混こん淆こうとは異なる、不思議な透明さと浮遊感を、自分はその若者から感じていた。

　凛と呼ばれた黒髪の女性と向かい合い、若者がおずおずと呼びかける。

「あの……凛」

「あーあー、いいのいいの、エルゴ。この人はわたしの先生だから」

　ひらひらと、凛が手を振る。

「先生？」

「そう。時計塔の先生。あなたに会わせてみたいって、話したことがあったでしょ」

「うん……覚えてるよ。凛」

　ちょっと自信なげに、エルゴはうなずく。

「そういうこと。だから、彼女を下ろしてあげてくれる？」

「分かった」

　エルゴの肯定とともに、自分の体がすんなりと砂浜に着地する。一体どんな理屈だったのかは分からないが、びくともしなかった体は、何の問題もなく機能した。それなりに多くの神秘に触れてきた自分にしてからが、不可解な現象だった。

　すぐ目の前で、ことりとエルゴが頭を下げる。

「ごめんね？」

「……は、はい」

　柔らかな人当たりになんとなく動転しつつ、小さくうなずく。

　今は、それどころではなかった。

　振り返ると、ようやく立ち上がった師匠が、トラウザーについた砂を払っているところだった。深呼吸を繰り返して、ゆっくりと女性に向き直る。

「凛。まさか、お前」

　そこまで言って、唾が気管に入ったのか、大いにむせ返ってから、もう一度尋ねた。

「お前が、コンサルタントなのか──?!」

「…………」

　しばらく、女性は目を泳がせていた。

　それでも、やがて観念したのか、腕組みとともに顔を持ち上げて、

「ええ。わたしがここの海賊のコンサルタントをしてるんですが、何か？」

胸を張って、堂々言ってのけたのである。

「どういうことだ！」

「そんなのはプライベートでしょう？　いろいろあって、流れでこういうことになった、以上の説明は必要ないと思いますが」

どんな流れがあれば、海賊のコンサルタントになるのか、さっぱり分からない。

ただ、かろうじてこの女性が師匠の生徒らしいことは理解できた。

「あの、ひょっとして、こちらの凛さんが誘拐されたって……いう？」

「誘拐？　なにそれ」

ことりと、凛が首を傾げる。

海賊の少年たちが見守る中で、師匠は頭を押さえて、言った。

「そういうメモを寄越されたんだ。どうやらガセだったようだが。ああいや、私だってお前の名前を聞いていれば放っておくとも！　というか、お前、夏季休暇サマー・ホリデーの申請は受けていたが、シンガポールやマラッカ海峡に行くなんてまったく聞いてなかったぞ！」

「そう言われましても、先生。エルメロイ教室の標語セオリーは独立独歩だと思っていましたが」

うぐ、と師匠が台詞に詰まる。

潜入した直後、魔術師ならば降り掛かった火の粉は己で払うべし、などと言っていたのは師匠本人である。どんな経緯で彼女が海賊のコンサルタントになったかはいざ知らず、少なくとも自前で責任をとって行動しているのだから、文句は言えなかろう。

ある意味、師匠の教育を正しく実践してきたわけだ。

凛の視線が、先に気絶させた少年へと向いて、そっと寄り添ってから抱き起こした。

「Blut der Erde,石は Lebenskraft癒やす」

　短い呪文とともに、背中にあてがった手から、かすかな光を見た気がした。

　うっすらと少年が目を開く。

「……リン？」

「よし、大丈夫ね。一応、後でドクター・ブノワに診てもらっておいて」

　ぱんと背中を叩いて、凛が立ち上がる。

「ところで先生……そちらの女の子は？」

「グレイ、フードをかぶれ」

　ちゃんとかぶっていたつもりだが、指示された通りにすると、凛が目を見開いた。

「グレイ？　さっきも同じ名前を言ってたけど、ひょっとして、先生の内弟子の？」

「は、はい。そう、ですけど」

「先生、わたしが出る授業には連れてこなかったじゃないですか。ほかのみんなは会ってるのに、ひとりだけ仲間はずれにされてる気分だったんですけれど」

　一応丁寧に言ってはいるが、滑らかな英語の端々に棘がある。

　可憐かつ華やかな、薔薇のごとき棘だ。

「……まあ、いろいろあるんだ」

　ぼそぼそと言ってから、師匠はこちらに向かって、手を差し伸べた。

「改めて。内弟子のグレイだ。こちらは私の生徒で、日本人の遠とお坂さか凛りん」

「よろしく、お願いします」

　小さく頭を下げると、女性はまじまじとこちらを見つめていた。なんだろう、まるで幽霊にでも出会ったかのようだった。

　その好奇心を阻むように、自分の手からもうひとつの声があがったのだ。

「イッヒヒヒヒ！　よろしくな！」

　鎌が変形して、もとの匣に戻る。

　ついでに、鳥籠の部品を口から吐き出して、その内側へと収まる。自分の仕事は終わったぞとばかりに、ふんぞりかえった匣に、自分はいささか逡しゅん巡じゅんしてから、仕方なく紹介することに踏み切った。

「ええと、こちらはアッドと言います」

「これだけ主張の激しい人格を付与された魔術礼装は、珍しいわね」

　凛が、小さくうなずく。

　さすがに時計塔所属だけあって、それで納得してくれたらしい。

　一呼吸おいて、

「とりあえず、入ってくれますか？　はいはい、あんたらは持ち場に戻って！」

　海賊の少年たちに呼びかけてから、凛はアジトの奥の建物を指し示したのであった。

4

　建物の内側は、こざっぱりしていた。

　大きさもまちまちな木材を組み合わせた、ほとんど手作りのような家だった。

　放棄された漁村では一番マシだった部類を、後から修築したらしい。あちこちから隙間風もあるのだが、少なくともこの時季は快適だった。虫などが入ってくるのではと気になったが、そちらは香料か魔術かで抑えているのだろうか。

　廃材から作ったと思しい古ぼけた椅子に、自分たちは腰掛けている。

　テーブルを挟んで、凛と向かい合った師匠は、ひどく難しい顔をしていた。もはや耐え難いとばかりに、耐水ケースに入れていた葉巻とマッチを取り出し、葉巻の先端をシガーカッターで切り落とし、マッチの火を擦り付けるようにする。

　やがて、部屋の内側に独特な香りの煙が漂い、ようやく水の中に戻してもらえた魚みたいな表情で、師匠は彼女へと口を開いた。

「つまり、君は昨年からここを訪れていたのかね？」

「サルベージが主体ですから、計画さえ周知しておけば、わたしがずっとこの辺りにいる必要はないですし。定期連絡だけなら電話でいけます」

　師匠の前で、滔とう々とうと凛が説明する。

　まるで、優等生の論文のようだった。もっとも、どこの優等生が海賊の親分じみたことをやるのだ、という話ではあるが。

「……インターネットの方がいい、とはドクター・ブノワから言われたけど」

ぼそり、と付け足した。

　対する師匠は、ゆっくりと、もう一度葉巻の煙を味わった。

「なるほど、サルベージか。その噂は私たちも聞いていた。コンサルタントが所属している海賊は、他人からの強奪ではなく、サルベージを主軸にしていると」

　そこで一拍おいて、自らの生徒を見つめ、師匠はこう口にしたのだ。

「ただ、私が来たことで、コンサルタントが焦っているという話もあったが」

「んっ……！」

　一瞬、凛の視線が泳ぐ。

「つまり、時計塔に知られたくないこともやってる、というところか」

「いやでも、神秘の隠匿には反してないはずです！　このあたりの島民は迷信深いから、わたしの魔術もそういう一部だと思ってますし、各種メディアからすれば単なるサルベージ屋ですから！　ただ、シンガポールに来たっていう時計塔の魔術師が先生とは知らなかったんで、ひょっとしたら……とは思いましたけど」

「赤点ギリギリ、といったところだがね。まあ法政科に直接踏み込まれない限りは、言い訳がつくラインか」

　やれやれ、と師匠がため息をつく。

「で、目的はなんだね？」

「その、ちょっと、個人的にサルベージしておきたいものがあって……ここの海賊と接触したのも、そのためだったんですよね……それでまあ金勘定とかもちょーっと請け負うことになっちゃって」

「海賊の上前をはねるということかね？」

「あっ、先生、誤解してるでしょう。あくまでWin-Win、わたしと海賊たちとは対等な取引です。わたしはサルベージで有用そうな場

所を教えてあげる。代わりに海賊たちは、わたしのお願いしたサルベージにも協力するってだけ」

　憤然と、彼女が主張する。

　実際、凛が教えたサルベージ場所が有益だったからこそ、コンサルタントの名が周辺で知れ渡ったのだろう。神秘の隠匿を旨とする時計塔の魔術師としては、いささか迂闊なようにも思えるが。

　遠坂凛。

　その名前だけは、自分も聞いたことがあった。

　ここ数年、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトと並び、鉱石科キシュアと現ノ代ー魔リ術ッ科ジの双方で、ほとんど災厄的なコンビとして活躍していたのである。何度となく教室に大穴を空け、時計塔に与えた被害総額は天井知らず、それでいて発表した論文や新しい術式の価値もほぼ同額になるとか。

　驚くべきことに、彼女の魔術属性は五大属性すべてアベレージ・ワンなのだという。通常、魔術師の属性はひとつきりで、よほど優秀なものでも二重がせいぜいであることを考えると、これは桁外れの才能といっていい。

　それでいて、なぜだか自分は彼女と顔を合わせたことはなかったのだが。

「まあ、君の認識については了解した」

　と、師匠は葉巻をくゆらせながら、うなずく。

「私に渡された、生徒が誘拐されたとかいうメモが、ガセだったか勘違いだったかは分からないままだがね。では、君がサルベージしようとしたものについて、聞かせてもらってもかまわないかね？」

「……正直、先生の意見を伺いたいとは思ってたんですよね」

「ほう？」

　葉巻を指にはさみ、師匠が眉を寄せた。

　対面の凛は、しばらく考え込んでいた。現象ははっきりしている

のだが、それがまだ彼女の中で定まった形を持っていない、というような。

「もともと、わたしがサルベージしようとしていたのは、鄭てい和わの沈没船だったんです」

「鄭和？」

　首を傾げた自分に、師匠が助け舟を出した。

「ヨーロッパだと中世の頃、最も巨大な船団を、最も遠くまで航海させたと言われる中国の英雄だ」

　それは中国史において、極めて重大な意味を持つ航海者の名だそうだった。

「なにしろ、彼が指揮した宝ほう船せんの全長は、百四十メートルほどもあったと言われている。艦隊全体の船員はおおよそ二万七千人。その職種も医者から芸人まで多岐にわたる。まあ、ほとんどひとつの国を移動させているようなものだ」

　あまりのスケールに、目眩がしてしまう。

　現代よりは遥かに劣るだろう航海技術で、どうやれば数万もの人々を移動させられるのだろう。師匠の講義でも、アジアに古く根づいた大国の歴史をあれこれと聞かされてはいたが、西洋の感覚からすると信じがたい話が時々飛び出てくる。

「その、中国の大船団がシンガポールまで来ていたんですか？」

「シンガポールどころか、アフリカの海岸まで行ってたんだ。このあたりは昔から東西の交流の結節点になりやすいところでね。たとえば、この国のもとになったマラッカ王国の開祖は、アレクサンドロス大王──イスカンダルの血を引いているとも言われている」

　その王の名に、一瞬、自分は息を止めた。

　師匠もかすかに苦笑する。

「まあ、あれは世界中のどこの歴史にも顔を出すような大迷惑だからな。話を戻すと、鄭和の艦隊がこのあたりに来航したのは歴史書にも残っている事実だ。当時の中国──明帝国の皇帝が派遣した大船

団で、朝ちょう貢こうのための宝物を大量に載せていたはずだ。記述が正しければ、うまくいけば一攫千金の目もあったろうが」

「でしょう！　先生ならそう言ってくれると思ってました！」

　喜色満面に、凛が手を叩く。

　なんというか、とても分かりやすい。あまりにも純粋に、欲望が星のごとく煌めいている。瞳にポンドかドルのシンボルが浮いているのではないか、と思われるほどだ。

「昨年、知り合いの古物商のところで、変わった地図が手に入っちゃって。これはいけるぞって、気づいたときには飛行機に乗ってたんです！　海で沈没船で宝物って、もう完璧なプランじゃないですか！」

「一応付け加えておくが、魔術に関係する品が出てきた場合、高確率で思想魔術に関係する品となる。時計塔に属する君が、勝手に発掘してしまうのは、かなりの問題になる可能性があるぞ」

「ですよね。だから、こっそりやっていたつもりだったんですけど……」

「そういう意味じゃない！」

　口角泡を飛ばして、師匠が否定する。

　実に、エルメロイ教室らしい光景ではあった。

　しかし、会談の軽妙な印象に反して、その内容はけして笑い飛ばせるようなものではなかった。ただでさえ、時計塔では異端児として睨まれやすい師匠が、周囲から攻撃される大義名分までつくってしまうとなれば、まず胃痛などでは済まないだろう。

「ただ、今回の場合、目的とは別のものをサルベージしてしまったんですよ」

（……ん？）

　別のもの、とはどういうことだろう。

　師匠も同じように思ったのか、もう一度口を開きかけたとき、扉

が軽くノックされたのだ。

「凛。来てくれって言われたけど、どうかした？」

「さっきの──」

　頭を下げて入ってきたのは、エルゴと呼ばれた若者だった。

　魔術ともほかの何かとも知れない方法で、こちらを拘束した相手。

　さきほどはあまり意識しなかったが、師匠よりもさらに背が高かった。伸び放題の赤毛が目の辺りも覆っており、茫ぼう洋ようとした印象を強めている。ただ、今回目を惹いたのは、ほかの海賊たちとは明らかに異なる──奇妙な材質の服装だった。

　ぴったりと身体に沿った、肌着の延長上とも思える衣服。しかし、彼が腕を伸ばしても、その素材には皺ひとつ寄りはしなかった。

「その服装は？」

「彼を見つけたときの服装です。分かりやすいかと思いまして」

「まさか……」

　振り返った自分に、凛はうなずいて、肯定した。

「ええ、彼がサルベージしてしまった相手。木片にしがみついたまま、海を漂流していたんですよ。うちの海賊たちが見つけたときは、記憶を失っていました。ただ、うなされていた彼は、何度か同じ言葉を呟いていたそうです」

　その言葉を、青年が口にした。

「……えるご」

「エルゴ？　どういうことだ？」

　尋ねた師匠を、若者はじっと見やった。

　吸い込まれそうな灰色の瞳に、眉間にきつく皺を寄せた師匠の顔が映っていた。

やがて、彼はきっぱりとかぶりを振る。

「わからない。その単語だけ覚えていた。だから、僕の名前になった」

　ひどく、生真面目な表情だった。

　いろんなものを無くしてしまったけれど、その性質だけは芯に残っていた……とでもいうように。

「……コギト・エルゴ・スム、ぐらいか」

　呟いた師匠に、凛が重ねた。

「我思う。ゆえに我あり。デカルトですね」

「さすがに説明はいらないようだ。近代西洋哲学の基本。目に見えるものを限界の限界まで疑い尽くした、最後に残るものだ」

「……それって、どういうことです？」

　申し訳なく自分が手をあげると、師匠はなんだか嬉しそうに解説した。

「いま言った通り、デカルトという哲学者が提唱した、いろんなものを疑っていった結果の概念だよ。私たちが見ているものは偽物かもしれない。私たちの聞いている音も偽物かもしれない。本当は何もかも存在していないのかもしれない。……でも、少なくとも、そう考える『我』だけは確かに存在しているはずだと、そういう思想だね」

　説明されると、なんとなく自分にも分かる。

　何もかもが偽物かもしれない、というのは時々胸を去来する想いだからだ。でも、そういう風に疑っている思考自体は、確かに存在するのだろう。だから、我思う。ゆえに我ありコギト・エルゴ・スム。

「必ずしも魔術用語ではないが、そうした近現代の逸話や言語化を面白いと感じて、自分の組織や魔術に名付けることも珍しくない。とりわけ魔術協会のひとつには、そういう趣味のところがあってね。……彷ほう徨こう海かいバルトアンデルス、なんていうんだ

が」

　魔術協会は、いくつかの組織に分かれている。

　師匠が属している時計塔。

　アトラス院。

　そして、彷徨海バルトアンデルス。

　実は、最後の名前は、自分もほとんど耳にしたことがなかった。三つの魔術組織はほとんど交流がないそうなので、自分が特別に無知だから、というわけではないのだろうが。

「エルゴ、あれを見えるようにしてあげて」

「分かった、凛」

　赤毛の若者がうなずくと、その背中にさざ波が立った。

　あ、と小さく声が出そうになった。

「透明な、腕？」

　今なら、分かる。

　エルゴの背中から、上着を突き抜けて、何本もの透明な腕が生えていたのである。半透明の表面に、いくつも不可思議な紋様が浮き上がっていた。

　まるで、薄青いガラスでこしらえたような腕。

　空中で自分を拘束したのも、この腕によるものだったか。

　自分の『強化』が一般的な魔術師を大きく上回り、それでもびくともしなかったことを考えると、この透明な腕は戦車にも匹敵するほどの力と、少なくとも十メートル近くは伸び縮みする性能を持ち合わせているに違いない。

「元の腕が二本で、背中に六本か。合計八本だと、いわゆる三さん面めん六ろっ臂ぴとはいささかずれるが……これが、君の力というわけかね。触れてもかまわないか？」

「あ、はい」

　うなずいたエルゴの背中を、師匠の指先が撫でた。

　パリ、とかすかな紫電が揺れたように見えた。もっとも、痛みなどの刺激は伴わなかったらしく、そのまま指を滑らせていく。とりわけ、複雑な紋様については、二度、三度と同じところをなぞった。

「ミス遠坂もあれこれ分析した後だろうが、私の知っている時計塔周辺の魔術とはまったく違う代物だな」

「先生でも分かりませんか。たとえば、アトラス院とかは？」

「アトラス院の錬金術師と会ったこともあるがね。彼らのそれは現代科学と魔術のミックスのようなものだ。これは既存の魔術とは異なるものの、もう少し私たちに近いように思える」

　つらつらと、師匠が述べていく。

　魔術の腕はともかく、他人の魔術を解体することにおいて、師匠は人後に落ちない。略奪公などという不名誉なあだ名も、それゆえであった。もっとも、解体した秘匿技術を勝手に弟子に教えるなんて不作法を、何度もやらかしたせいでもあるのだが。

　そんな師匠でも見当がつかないという、エルゴの透明な腕。

　幻手、とでもいうべきだろうか。

「グレイを拘束できるほどの腕力に、あの速度を捕捉できるだけの精度と伸縮性？　そんな性能を構築するのに、どれだけの魔力が必要になる？　どんな意味があって、透明な腕なんていう形状を取る？　いや、魔術とするならば、これはむしろ神しん代だいの……」

　しばらく呟いてから、師匠は青年へと向き直った。

「いくつか、質問させてもらってかまわないかな」

「はい」

「記憶を失っていると言っていたが、言語については不自由してな

いようだ。私とも英語で話せている。母語が何かは分かるかね？」

「言葉は、話しているうちに覚えたんです」

「……覚えた……？」

　そういえば、戦いのとき呼びかけた言葉は、もっと訛っていた気がした。

　つまり、この短時間で師匠の言葉遣いクイーンズ・イングリッシュに合わせて学習して、修正したということだろうか。その答えを聞いた師匠はますます眉間に皺を寄せて、質問した。

「さきほどの少年たちには、マレー語とタミール語の者もいたが、それも覚えた？」

「はい。中国語もいけます」

「本当よ。サルベージ品の売り込みで連れて行ったら、その場で覚えたわ。シュリーマンも顔負けね」

　これは、凛が追補した。

　だとすれば、軽々には信じがたいぐらいの、驚異的な学習能力ということになる。それほどの能力の持ち主が記憶を失っている……という皮肉な事実も含めて、自分も目を見張ってしまった。

「言葉も失ったのだとすると、単なる全生活史健忘とは異なるが……彼を見つけた当初は何の言葉も喋ってなかった？」

「ええ。シンガポール訛りの英語を喋りはじめたのは、発見から半日後のことね」

　凛が肯定する。

　小さな海賊の家に、しばし沈黙が落ちた。

　間をおいてから、師匠はこんなふうに尋ねた。

「日常生活で、困ることはないか？」

「時々、おなかがすくんです」

少しだけ困ったような顔で、エルゴが腹部を撫でた。

「あ、ケチらずにちゃんとご飯出してるわよ！」

「はい、もらってます。ここのスパイスを混ぜて煮込んだ魚料理、とても美味しいです」

　凛の主張に、淡く青年が笑う。

　ふんわりとした表情は、やはり子犬と似ている。

「でも、何かが足りない気がして……まるで足りてない気がして、くうくうとお腹が鳴いた気持ちになるんです」

　可愛らしい言い草で、若者がお腹のあたりを撫でる。長い赤髪の内側から、こちらを見つめる瞳と視線があった。

「ああ、そうだ。もうひとつだけ、思い出したことがあります」

「え？」

　これは凛も初耳だったのか、くるりと振り返った。

　お腹のあたりに手を置いたまま、若者の瞳はどこか遠くを彷徨っているようだった。なぜだか自分は暗がりを思い浮かべた。光ひとつ射さぬ暗黒で、四つん這いになったエルゴという若者を。

　その手に握られている、何かを。

「何かを、食べた気がするんです。とても甘くて、苦くて、酸っぱくて、肉みたいで、魚みたいで、果物みたいで……ああ、とてもお腹がいっぱいになったんです」

　さっき足りないと言ったもの。

　少しだけ尖った前歯が、唾液に濡れていた。

　自分もごくりと唾を飲み込んでしまったところで、師匠がぼそりと呟いた。

「ヨモツヘグイ。あるいはデメテルの娘、ペルセポネの冥界下りか……」

その意味は分からなかったが、ひどく真剣に見つめていた師匠に、凛が口を開いた。

「いっそ時計塔に連れ帰って、エルゴを先生の生徒にしたらいいんじゃないですか？」

　からかい半分の言葉だったから、その反応は彼女も想像しなかっただろう。

　師匠も自分も表情を硬くして、同時に凛を見つめてしまったのだ。

「どうしたの、ふたりとも」

「いや、なんでもない」

　自分も、胸が詰まった気がしてしまって、何も言えなかった。

　代わりに、師匠は改めて、

「ミス遠坂」

　と、名を呼んだ。

「しばらく、私たちもここに滞在させてもらってかまわないかね？」

＊

　暗闇であった。

　洋上の光がほとんど届かない、海の底。

　行き交う生物もぐっと少なくなった、海底数百メートルほどの座標である。光合成ができないため、多くの生物が生きる術を失うのだ。それでも深海魚の種類自体は豊富なのは、海の神秘というべきだろう。

　しかし、今潜っているのは、いかなる深海生物とも異なる代物

だった。

　光のないこの場では判別できるはずもないが、ひどく白い見た目だった。うつろなその色合いは、人々がよく知っているものだ。

　骨、であった。

　骨と酷似した材質が、まるで蟹や昆虫のように外殻を構築しているのだ。がっしりとした体格は、優に二メートル半を超え、重量も二百キロ近くに至っている。海底を歩く度に、その重みで暗闇に砂が舞い上がる。

　いわば、骨の巨人だった。

　大木のごとき腕をもちあげ、巨人は目の前の空間を軽く叩いた。

　ごつん、と硬い音がした。

「……よくやった、タンゲレ」

　囁きがこぼれる。

　音がした空間から、ゆっくりと何かが浮かび上がったのだ。

　骨の巨人よりさらに一回り大きい、楕円形のフォルムであった。

　その内側に何かを孕んでいた……あたかも孵卵器インキュベーターのごときカタチ。金属らしい表面を、骨の巨人が手のひらで擦ると、消えかかった紋様がその下から現れた。

「ああ……彷徨海、保存ゲノンの扉の紋章だ」

　まるで長い尾のような、あるいは三重の螺旋のような紋章だった。その紋章を見ると、物体の形状は棺にも似ているように思われた。

　孵卵器と棺。

　これから生まれるもののための器と、死者のための器。

　用途はまるで逆なのに、その金属の楕円形の印象は妙にだぶっていた。

しばらく、その外側を調べて、

「……中身が、抜け出ている」

　骨の巨人が呻いたのだ。

　あたかも、愛しい恋人の喪失にやっと気づいたかのような、絶望的な響きが混じっていた。その絶望に負けぬだけの克己も、また。

　すぐに、巨人は新たな指令を口にしたのだ。

「タンゲレ、隠ス蔽テ状ル態スを維持」

「イエス、マイクリエイター」

　応じる音声が、海底を流れ、骨の巨人の影とともに消えていった。

第二章

1

「Anfangセット！」

　呪文が、マングローブの森に響いた。

　凛の指から放たれたガンドが、幾度も分裂し、螺ら旋せんを描く。

「Pseudo-Edelsteine.疑似宝石。 Sieben,七番、 sechs,六番、 fünf,五番、 Spiegel,鏡よ、 Blume,花よ、 blühen und stolz sein咲き誇れ！」

　美しい万華鏡カレイドスコープにも似たその魔術は、全方位から敵を取り囲み、掠かすっただけで数日は昏こん倒とうさせるだけの呪いを込めて殺到した。

　だが、そのすべてが、眼前で弾かれたのだ。

　弾いた一瞬、半透明の腕が露わとなった。

　エルゴの背中から伸びていた幻手が、まるで硝がら子す玉だまでも砕くごとく、ガンドの嵐を打ち壊したのである。普通の魔術師であれば、まとめて一ダースも倒すだろう魔術は、青年に傷ひとつ負わせることもかなわなかった。

　だが、凛の動きは止まらない。

　ぬるりと両者の間合いが縮まったのを、自分は見た。

　海賊のアジトで自分の虚を衝いた、間合いを盗む歩法。

　炸裂したのは、八はっ極きょく拳けん・鉄てつ山ざん靠こう。

　技術的にはいまだ発展途上でも、魔術で十二分に『強化』された肉体は、達人に匹敵する速度と威力を生み出す。マングローブが植わった泥土から、有利な岩場へと巧妙に追い詰め、その岩をひび割れさせるほどの震しん脚きゃくを打つ。

身内にてベクトルを旋転・増幅。

　さらには練り上げた魔力を渾然一体とせしめ、発はっ勁けいとともに背中から体当たりする。まさに鉄の山を想起させる絶ぜっ招しょう。

　その体当たりが、エルゴの眼前で停止したのだ。

　二本の半透明の幻手が交差して、クロスアームブロックの構えを取っていた。

　残った四本の幻手に捕まるより速く、凛が背後に飛び退る。

　空中でガンドをばらまき、エルゴの動きを牽制するのを忘れない。ばかりか、地面を穿ったガンドの穴が、別のカタチをつくりあげるのを、自分は見た。

「Der sechsfache Stern.六重の星。 Vogelkäfig,縛る der bindet鳥籠──」

　穿たれた穴から、魔力が別の何かを実体化させた。

　いや、ガンドによる穴だけではない。

　さきほどの震脚も、魔術の一環だったのだ。

「□□Schließung.閉鎖 Kette der Finsternis闇の鎖！」

　周囲の泥土に続き、ひびわれた岩からも現れた漆黒のロープが、エルゴの六本の幻手を残らず縛り上げる。

　二重三重に、凛は罠を仕掛けていたのである。

　ガンドが防がれれば八極拳。八極拳が防がれれば再びガンド。それが阻まれても、さらなる魔術が敵を撃つ。どれだけ先を読んでいれば、こんな戦いができるのか。それとも、彼女がくぐりぬけた経験ゆえか。

　最後の魔術式こそが本命だったのか、さしものエルゴも動きを封じられた。

　そのまま、魔術のロープは力ずくで青年を押さえつけていく。

まるで、古の魔術で封印された巨人のように。

「……意識は身体の内に。視点は体の外に」

　指示が、背後から飛ぶ。

「エルゴくん、君の身体を動かすのは、君の意識ではない。君の無意識での反応こそが、表層の意識を決定づける。いまだ、その幻手を構築する魔術系統は分からないが、君の本質と深く結びついていることは疑いない。ゆえに考えるのではなく、身体から発する真理を感じたまえ」

　ロープに拘束されたエルゴが、呻きとともに地面に這いつくばる。

　凛の左手には、淡い光が輝いていた。おそらくは魔術刻印の光。そこに精オ気ドを注ぎ込むことによって、エルゴを拘束する術式を補強し続けているのだろう。

　変わらず、声は青年へと呼びかける。

「君の腕は、あくまで魔力が構築したものだ。ミス遠坂の魔術に縛られたというのは、先入観がそうさせているに過ぎない。この現実は真理の影だと考えたまえ。影は本来の君を縛ることはない。それはただの思いこみだ」

「思い……こみ……」

　呟きが、泥土に汚れた本物の腕にあたって砕けた。

　次の数秒で、右上の幻手が拘束から逃れて、消え失せる。

　再び背中から現れた幻手が、ぐいと横に打ち振られると、漆黒のロープは風に吹かれた蠟燭のように消え去ったのだ。

「うっそ！　手を振るだけで、魔術式自体を壊した?!」

　ぐいと伸びた幻手の三本が、今度は地面を叩いた。

　砲弾のごとく射出されたエルゴの身体が、凛へと突撃する。反撃のガンドを薙ぎ払いつつ、振るわれた拳が凛の細腕と激突する。

いや、激突したと思ったのは、自分の目の錯覚だったか。

　半透明の幻手と接触した嫋たおやかな掌が、ぐりんと回った。三倍は太さの違う幻手が、その回転に巻き込まれ、凛への直撃ルートを逸らされる。中国拳法に見られる、化か勁けいという技術だとは後で知ったことだ。

「体幹に集中しろ。幻手は質量を持たない」

　崩されかけたエルゴの体勢が、その言葉で立ち直った。

「目で見るな。その腕が先を知っている」

　背中に浮かび上がった幻手が、もう一度凛に振るわれる。二度、三度、『強化』された凛の体術がその拳を逸していくが、こうなれば文字通り手数が違う。あらかじめ掛けてあった防御の術式を食い破り、拳が彼女を圧倒していく。

　たまらず、一撃をはねのけた凛の指に宝石が煌めいた。

「ああもう！」

　あと一瞬あれば、彼女の新たな魔術が発動したのだろう。おそらくはガンドなどより、その宝石こそが遠坂凛の真骨頂であったはず。

　しかし、

「そこまで！」

　と、声が割り込んだのだ。

　ゆっくりと、マングローブの森から影が歩み出た。

　安全のため、周囲に防御用の結界を敷いていた師匠である。隣に自分を置いていたのも、もちろん保険である。

　こういうあたり、いっそ臆病なぐらいに用心深い人ではあった。

「まあ、悪くない」

　片目をつむって、師匠が評価した。

「ただ、ミス遠坂は体術との組み合わせはいいが、小細工に頼りすぎている。自信を持って、術式の練り上げに力を注いだ方が結果を出せるだろう」

「ご指摘ありがとうございます、先生」

　かすかに、凛が唇を尖らせる。

「でも、途中からエルゴにだけ指南するのはズルくなかったですか？」

「もともと、エルゴくんの能力を引き出すための訓練だ。グレイにやってもらっても良かったんだが、ミス遠坂の魔術の方が素直で都合が良かった。……本人の性質もそうあれば、言うことはないんだが」

「ご挨拶ですね、教授」

「でなければ、訓練だというのに、宝石に手を伸ばしたりしないだろう。その調子でルヴィアと吹き飛ばした教室の被害額が、いくらになったと思ってる」

　うぐと言葉に詰まった凛をよそに、師匠は青年へと視線を向けた。

「エルゴくんは、何かしら感じたことはあったかね？」

「……よく、分からないです」

「ふむ。実戦形式の訓練なら、身体と精神を一致させることで、記憶にアクセスできるかとも思ったんだがね。とはいえ収穫はあった」

　すでに幻手は見えなくなっていたが、エルゴの背中を師匠の手が触れた。

「どうやら、君の六本の幻手にも個性があるらしい」

「個性、ですか」

「ミス遠坂の拘束から最初に逃れ、魔術式を解除したのは右上の幻手だった。おそらく霊的な干渉能力を持っているんだろう。こうい

う霊体部位が発生するのは、守護霊や悪霊に取り憑かれたパターン、もしくは限定的な降霊に成功しているパターンが近いが……だとしても、こういう形で腕に個性が出るのは、いささか妙な話だな。ひょっとすると、別の腕には別の個性がありえるのか？」

　再び師匠が考えだす。

　こういう話になると、基本的に自分は外野である。

　ただ、悩みながらも妙に弾んだ師匠の声を聞くのは、楽しかった。あのロンドンのアパートで、新作ゲームの攻略に詰まったときのそれに、少しだけ似ている気もした。

　ゲームと比べてしまうのは、ちょっと不謹慎かもしれないけれど。

「君が喰らったという何かについても……」

　と、師匠が言いかけた時だった。

　ぐう、と可愛らしい音が鳴ったのだ。

　つられて、発生源に全員の視線が落ちた。

「ごめんなさい。お腹が、空きました」

　ぴょこんとエルゴが頭を下げると、つい自分と凛は揃って吹き出してしまった。

「……よろしい。君らのアジトに戻って、昼食といこう」

　吐息とともに、師匠が宣言したのであった。

2

「灰色ずくめだ！」

「瘦せ狐だ！」

　眩しい光の下、ぐるんぐるんと、つむじ風みたいに小柄な影たちが回っていく。

　蹴飛ばされる砂は、まるで極小の星のよう。中心の師匠がもろにそれをかぶってしまい、ぺっぺっと唾とともに吐き出す。

「お前ら、いい加減に……」

「瘦せ狐が怒った！」

　きゃーきゃー言って、日焼けした子供たちが走り去っていく。

　マングローブの密集した浅瀬と波打ち際を駆けていくのは、素足だったり、ボロボロのサンダルだったりとまちまちだ。

　潜入した夜中に見た少年たちは、あれでも年上の方だったらしい。建物の中にいた、もっと幼い子供たちは、今こうしてはしゃぎ回っている。

　久しぶりの客らしい師匠と自分は、物珍しさもあって、かなり熱心に付き纏われていた。正直今まで経験のないことだったので、どうしたものか、反応に困ってしまう。故郷でも、おおよそ自分は一番年下の部類だったからだ。

「ヒヒヒ！　子供が苦手なわりに、子供に好かれるタイプかもな！」

「……困ります」

　短く言って、自分はため息をついた。

　明るい南国の空気に、惑わされたのかもしれない。

ロンドンや自分の故郷とは何もかも異なる、熱くて爽やかな風。海の近くだからべたべたしそうなものなのに、その空気はひどく好もしい。肌に触れる感覚だけではなく、耳朶を撫でていく音も、視界を埋める色合いもそうだった。

　ざざざ、ざざざ、と規則正しい潮騒。

　真っ青な空の只中で、ほどけていく白い雲。

　どうしても、気持ちの芯がゆるんでしまうのを、自分は感じていた。まるで何年かぶりに、やっとまともにとれた休暇のよう。

「休暇だってんなら、精一杯のんびりしてればいいだろうがよ！
相変わらず損な性格してやがんな！」

「今更だと、思います」

　少しだけ強めに抗議をしてから、

「師匠も、少しは気が休まったでしょうか」

　と、背後を振り返る。

　師匠は、マングローブの根本に腰掛けていた。

　ある意味リゾート地ともいえる環境だが、表情は晴れやかとは言い難かった。さきほどの訓練について、いまだに考えているのかもしれない。もっとも、懐には防水用の魔術をかけた携帯ゲーム機が入っていて、子供たちに奪われぬよう隠しながら遊んでいるのも、自分の角度からは見えているのだが。

　そして、もうひとり。

「エルゴ！」

　どうやら、赤毛の若者は子供たちに慕われているようだった。

　何人かの幼子に囲まれて、うつらうつらと眠たげに首を揺らしている。

　子犬という印象があったが、そうしていると、子供たちを日差しから保護する樹木かなにかのようだ。

あぐらをかいたところに、少年のひとりがどんと王様みたいに居座っていた。

　対して、寝ぼけ顔のエルゴは、長い手を伸ばす。膝に座った少年を捕まえて、そのモジャモジャ頭に顔を埋めた。

「いい匂いがします」

「臭いだろ、俺の頭！」

「いいえ、お日様の匂いです」

　穏やかな声音に、ひどく温かなものを感じた。

　ふんわりとした雰囲気に惹かれて、つい歩み寄り、声をかけてしまった。

「眠いんですか？」

「……はい、食事の後の、昼寝が好きなんです」

　ほわあ、とあくびをひとつ。

　表情の半分が赤毛に隠れているせいで、なんだか海のくまさんみたいだ。どちらかというと人見知りする自分が話しかけてしまったのも、そんな印象のためだっただろうか。

「ここはすごくポカポカしてて、柔らかくて……だから、僕はこの島が好きです」

「……そうですか」

　魔術師たちとは異なる尺度。

　それとも、こんなのが普通なんだろうか。

　ついぞ自分が知ることのなかった普通の人生。普通の生き方。現代の海賊で、しかも記憶喪失の相手に、そんなことを考えるのはおかしいかもしれないけれど。

　ひとりの少女が、シャキシャキンと鳴る鋏を持って、こちらへ寄ってきた。

「エルゴ、髪切ってあげるから、こっち来て！」

「ありがとう、ラナ」

　うなずいて、彼は少女に手をひかれるまま、やや離れた砂浜の椅子に座らされる。

　少女が赤毛に指を差し込み、鋏を動かし始めると、すぐエルゴの首がうなだれた。驚くべきことに、ほんの数十秒ほどで、すやあ、と眠ってしまったらしかった。周囲では子どもたちも騒がしくしているけれど、まるで気にならないらしい。

「いつも、ああなのよね」

　いつのまにか隣にいた凛が、呆れたように肩をすくめる。

「エルゴがですか？」

「そう。放っておくと寝てるのよ。あんまり話を聞けてないのも、わたしが手の空いた時に、だいたい彼が寝てたからだし」

「睡眠が他人より必要な体質、ということかね？」

　これは、こっそりゲームを遊んでいた師匠が問うたのだ。

「かもしれません。で、先生とグレイさんのふたりとも──デザートにどうぞ」

「わ！」

　トレイごと差し出されたのは、紅茶とフルーツの盛り合わせだった。

　皿こそ端が欠けたプラスチックの安物だが、丁寧に並べられた果物は、赤、白、黄、オレンジと、実に鮮やかな色を湛えている。うっすらとかかっているのは、チョコレートか何かだろうか。

「ありがとう、ございます」

　パクリ、と口に含むと、びっくりするくらい甘かった。

　後から、果汁の酸味と苦味が追いかけてきて、鼻の奥に吹き抜ける。チョコレートかと思ったのは、かすかな辛味のあるソースだっ

たが、むしろその辛味がフルーツ本来の味を引き立ててくれた。

「中華の点心の要領で、ほんのちょっぴりソースをかけてるの。スイカに塩をかけるようなものね」

「美味いな、これ！」

　ゲーム機を仕舞った師匠が口走り、素が出てしまったと気づいたのか、こほんと咳払いする。

「あーミス遠坂。一応、海賊の隠れ家なんだから、そんな頻繁に行商が出入りしてるわけじゃないと思うが、どこから仕入れているんだね」

「自給自足ですよ。そこの畑の生産品です」

「…………っ！」

　師匠の目が、正気かとばかりに丸くなった。

　凛はしれっとした顔で、紅茶を飲んで、付け加える。

「マングローブとは違うわけですから、土壌改良には魔術を使いましたけどね。慣れたら、そんなに難しくなかったですよ。専門的なトロピカルフルーツは無理でも、現代の品種は育てやすいものが多いですし、余ったらサルベージ品と一緒に売ってしまってもいいわけだし。これが意外といい値がついたりするんで、最後はこっちに転身してもいいかもと思うんですよね」

　ふふん、と女性が鼻を鳴らす。

　なんというか、たくましい。魔術師だからというのではなく、ましてやエルメロイ教室でも特筆すべき秀才だからでもなく、彼女の在り方は根本的にしたたかで柔軟なのだ。

　師匠は、なるべく渋い顔を取り繕って、しばらくフルーツと紅茶を口に運んでいたが、

「ちょっといいかな、ミス遠坂」

　と、呼びかけた。

言ってから、背後を見やった。

　散髪中のエルゴのまわりを危なっかしく走り回り、怒られたりもしている子どもたち。

　彼らに目を細め、話を切り出す。

「海賊のコンサルタントを始めたのは、あの子供たちのためか」

「何の話です？」

「彼らに話を聞いた。子どもがやたらと多いのは、半ば孤児のような状態で、自然と寄り集まったグループだからだ。目的の品をサルベージするだけなら、そんな相手に依頼する必要はあるまい。そもそも、彼らにサルベージのための潜水技術はあっても、装備やコネクションは欠けている。そこの欠落を埋めるのに、計画はずいぶん遠回りすることになったのでは？」

「代わりに、得難い信頼関係を結べましたよ。秘密裏のサルベージには必須でしょう？」

　澄ました顔で、凛が言う。

　一粒、綺麗なライチを口にしてから、微苦笑した。

「果物の栽培もそうですけど、生きるための技術を叩き込んでるだけです。わたしがいなくなっても、大丈夫なぐらいの。等価交換は魔術の基本のひとつでしょう」

「だとしても、最適な相手を選んだとは言えまい。……正義感かね？」

「まさか」

　潮風に髪を押さえて、凛が言う。

「ただ、出会っちゃったからです。出会って話してしまったからには、放っておくのって気分が良くないでしょう。目にしてしまったからにはわたしの世界の一部なんだから、知らないふりで通してられないもの。って、こんなのが心の贅肉なのは分かってるけど」

　独特な言い回しだけど、なんとなく意味は分かった。

とても遠回りで、とても真剣で、とても強い人の言葉。

　そんな生徒を見やって、師匠はいつもよりも間をおいてから、ゆっくりと口を開いた。

「まるで、世界がまるごと君の責任みたいな言い草だな」

「当たり前でしょう。世界なんて、とっくにわたしのものなんですから」

　きっぱり言ってのけた凛が、すぐ困った風に、眉を寄せた。

「……って昔は言ってたけど、今はどうかなあ」

　手を上げて、青空を掴むように手を開く。

　あまり綺麗とは言えないシンガポール周辺の海だが、空は文句なしに美しかった。

「別におかしくはあるまい。君がいう世界とは、つまり自分を中心とした価値観のことだろう？　だったら魔術師としてもむしろ王道だ。あまりにも王道すぎる、と眉をひそめるものはいるだろうが」

　一拍おいてから、思い出したように付け加えた。

「それこそ、ルヴィア嬢のところで執事をしてる君の付き人なら、大真面目に受け合うだろう。正義の味方になりたいなどと言っていたんだから」

　途端、大いに凛が目を剝いたのだ。

「し、信じられない！　あいつ、先生にそんなこと言ってたんですか！」

（あいつ？）

　また自分の知らない人物が増えて、密やかに首を傾げる。

「きちんと話したのは一度きりだがね。ああ、馬鹿げた夢とは思うが、笑い話ではあるまい。てっきり、彼は君の恋人か何かだと思っていたが」

「そ、そういうんじゃありません！　いえ観念してくれてもいいん

ですけど……って、そんな解体をすぐにやるから、先生の敵が増える一方なんじゃないですか？」

「む」

　思い切りカウンターを食らって、師匠が唇を歪める。

　追い詰めた側と追い詰められた側の、鮮やかな逆転である。

　返す言葉もないのを誤魔化すように、残ったフルーツを食べている師匠を見ながら、凛はやりすぎたかと舌を出す感じで続けた。

「でも、さっきの訓練はさすがでしたけどね。エルゴの動き、あっという間によくなりましたし。フラットのヤツがわけの分からないあだ名をつけまくるのも、分からないではないです」

「グレイには言ったがね。……講師はやめようかと思っている」

　心臓を貫かれるかと思った。

　最初に告白された時と変わらず、その言葉を耳にすると、自分の喉も胸も石になってしまったかのようだ。

　遠坂凛の反応は、こうだった。

「……先生、今の本気ですか」

　ひどく真っ直ぐ、師匠を見つめていた。

「先生が本気なら、止められるわけありません。でも、先生は時計塔の講師になるために生まれてきたような人でしょう」

「君はそう言うだろうな」

　と、師匠は顔をしかめた。

　けして怒っているわけではなく、無理解を責めようとするのでもなく、ただどこか哀しげな表情だった。綺麗な星空に手をあげて、摑めないのだと初めて知ってしまった少年のようであった。

「デザートとお茶をありがとう。少し歩いてくる」

「あ、この子、借りてもいい？」

ついていこうとした自分の身体に、ぐいと柔らかな腕が巻き付いたのだ。

　けしてきつくはなかったが、有無を言わせない態度に動きを封じられてしまい、視線を右往左往させてしまった。

「いいんですよね、教授」

「……好きにしたまえ」

　そのまま、師匠は踵を返して、立ち去ってしまったのであった。

＊

「んっふっふ」

　遠坂凛は、いよいよ捕まえたぞと言わんばかりの笑い方をした。

　ターゲットをスコープに収めたスナイパー、もしくは鼠を追い詰めた猫である。たまに、師匠の義妹であるライネスもこういう表情を見せることがあるが、その相手は例外なくひどい目にあわされてきたものだった。

「あ、あの」

「いいからいいから。リラックスして座ってて。エルメロイ教室の秘蔵っ子だっていうから、いろいろ尋ねたかったのに、ずうっと先生が隠してるんだもの。まさか、こんな可愛い女の子だなんて思わなかったけどね」

　にっこりと優しい笑顔なのに、言いしれない圧がある。

　実際、自分は返事もできず、椅子に押し込められていた。エルゴの見えない幻手に拘束されたときの方が、よほどマシな気分ではあった。

「でも、先に訊きたいことができちゃった」

　じっ、と美しい瞳が、こちらを映し出す。

「講師をやめたいって、あの人、一体何をするつもりなの？」

「……研究に専念したい、って言ってました」

「あー……それは、困るわね」

　と、片手で顔を押さえて、視線を逸したのだ。

「困る、ですか」

「だって、講師を続けるのも、研究に専念するのも、どちらも正しいから。正しいこと同士で悩むのが、あの人らしすぎて笑っちゃいそうなぐらい」

　彼女の言いたいことは、よく分かった。

　師匠らしい悩み。まさにその通りだ。きっとどちらも辛い道だから、いつも痩せ我慢を重ねているあの人の横顔と、あまりにもよく似合ってしまう。

「でも、本当にそれだけ？」

　と、凛が訊いた。

「今のは、きっと嘘じゃないでしょうね。でも、正しいだけなら、あの人はもっと早く決断していた気がする。だって、悩んでる時間を過分に持てるほど、先生の生き方って余裕がないでしょう？
ブックメーカーでどの馬に賭けたっていいけど、悩んだあげくここぞというレースを逃したら、ただの馬鹿よ。だったら、先生のあれは、もっと別の理由があるんじゃないかしら」

　ぐいぐいと押してくる。

　あれでも、師匠相手には遠慮していたのだと、自分は感じていた。

「……多分」

　と、口から言葉がこぼれた。

「多分、拙は、その理由を知ってます」

「どういうこと？」

「…………」

　すぐに、自分は答えられなかった。

　すると、今度は凛の方から切り出したのである。

「……言うかどうか迷ってたんだけど、あなた、わたしの知り合いに似てるのよね」

　びくり、と肩が動いてしまった。

　それは、何より恐ろしい言葉だった。いや、かつての自分が恐れていた……というべきだろうか。夏のシンガポールでもフードを外せないその理由。

　ただ、それ以上踏み込む代わりに、凛は別の話題を持ち出した。

「わたし、数年前は戦争をしていたの」

3

　エルメロイII世は、砂浜の近くに腰掛けていた。

　この島は、途中までの水路もマングローブの森に隠されていて、外海があまり見えない地形だが、例外的にその場所からは遠くの光景まで視界に入った。さすがにシンガポール沿岸は無理にせよ、マラッカ海峡と、隣接した半島の一部は窺える。

　眩しい陽光の下、海は蒼くうねっている。

　背後から砂を踏む足音がして、エルメロイII世は振り返った。

「ずいぶん見違えたね、エルゴくん」

「思ったより短く、ラナに切られちゃって」

　明るく笑って、若者はうなじに触れた。

　子供なりに丁寧に切ったのだろう毛先が、さわさわと風に揺れていた。

　朴訥な印象の強かった顔立ちだが、さっぱりと髪を切られた今は、明晰そうな雰囲気が加わっていた。色素の薄い灰色の瞳のせいかもしれない。真っ直ぐに相手を見据える目の底に、子供のような無邪気さと、知性の光が同居している。

　もう少し仕草が洗練されれば、銀幕を飾ってもおかしくないほどの美貌であった。

　なぜか、エルメロイII世は少し驚いたような表情をした。

「どうか、しましたか？」

「いや、昔、赤毛の知り合いがいてね。君とはまるで似てない相手さ」

　軽く、肩をすくめる。

思い出を振り払うように視線をそむけた隣に、エルゴが寄り添った。

「座っていいですか」

「好きにしたまえ」

　言われたままに、エルゴが腰を下ろす。

　しばらく、ふたりとも何も言わなかった。潮騒と光を孕んだ風。鼻腔をくすぐる潮の香り。何千年も昔から、延々と倦うまずたゆまず繰り返す、海の律動。

　そのリズムに乗せるように、エルゴが切り出した。

「……エルメロイ教室でしたっけ。先生が直接教えてる場所」

「大学のゼミのようなものさ。いつも騒がしくて、どんなハプニングが起こるか私にも分からないあたりは、むしろライブハウスに近いが」

「先生の授業は、とても分かりやすいです」

　至極真面目な顔で、エルゴが言った。

「訓練もそうだけど、この数日教えてもらった瞑想も、すごく楽しかったから」

「観月法なんて、どこでも教えているようなことだよ」

「月を想うのが、素敵でした」

　観月法。もしくは月がち輪りん観かんともいう。

　心の中で、丸い月を想う。

　その月を少しずつ大きくしていく。最初は自分と同じ大きさほどに、次に家と同じ大きさほどに、それから街と同じ大きさほどに、やがては国の大きさ、大陸の大きさ、地球の大きさと広げていき、宇宙全体まで月を拡大する。

「心の中なら、なんだって摑める。そういう瞑想だ。君にふさわしいと思った。ブッディズムの菩薩などに顕著だが、おおよそたくさ

んの腕を持つ偶像は、あまねく手が届くものとして、人々に認識されてきた。君の見えない腕も似たようなものかもしれない」

　と、II世が言った。

「そんな良いものなら、いいんですけど」

　エルゴが頭を掻くと、赤毛がくりくりと動いた。

　それから、付け加えた。

「先生を、やめるんですか」

「聞こえていたのかね？」

「散髪中でうつらうつらしてたんですが。凛の声はよく通ります」

「そこは同意するが。どうやら、君の五体の性能は、そこらの魔術師が『強化』したレベルを常時発揮しているらしい」

　II世の言葉は、それなりに離れていたはずのエルゴが、グレイや凛との会話を正確に把握していたことを指摘していた。

　訓練風景でも明らかだったが、彼の肉体そのものも一般人とはかけ離れている。少なくとも、『強化』したII世を上回ることは確実だった。

「先生をやるのが嫌だったんですか」

「……まさか」

　ひどくゆっくりと、II世は首を横に振った。

「むしろ、思いがけないほどに楽しかった。望んで始めた講師業ではないが、この十数年ほどは慌ただしくて、目まぐるしくて、胃が痛い思いもさせられて、ずっとジェットコースターにでも乗っている気分だったよ。最初は五、六人ほどだった教室にもずいぶん人が増えた。聴講生を含めると、教室に入り切らないぐらいにね」

　魔術師からこぼれる声は、けして悲嘆の色を帯びてはいなかった。

　生成りのシャツの胸元に入っていたサングラスを取り出し、かけ

る。

「だけど、時々苦しい」

　ギラギラと太陽が輝いていた。

　雲は白く、薄く、たなびいている。

　爽やかな青空をサングラス越しに見上げたまま、II世は静かに呟いた。

「私はね、偉大な魔術師に憧れてた」

　掠れたような声だった。

　その抑揚が風にほどけてしまってから、エルゴがゆっくり口を開く。

「……過去形で言っているのに、諦めていないんですね」

　一瞬、II世が唸った。

「君は、ずいぶん見透かしたようなことを言うな」

「ごめんなさい」

　すとん、と若者が頭を下げた。

「まあ、そうだ。過去形で言ったが、結局私は諦められなかった。講師としてそれなりの成功をおさめた以上、こんな考えは後進に託すべきだろう。実際ミス遠坂も含めて、輝くような才能の持ち主が教室から出たことを、きっと誇るべきなんだろう。……だが、やはり違うと、私の心が叫ぶんだ」

　サングラスをかけたのは、その心が露わになりすぎるからだろうか。

　胸元を押さえた指先が、かすかに震えていた。

「真面目な人ですね。凛が言ってたとおりだ」

「悪口ばかりじゃなかったかな」

II世の唇の端が歪み、エルゴは首を横に振った。

「いいえ。ただ、先生とは特別な秘密があるからって」

「ああ……秘密というのとは少し違うが、共有している事実があるのは本当だな。参加した時期こそ違うが、私と彼女は同じ戦争に出ていたからね」

「戦争？」

　ことり、とエルゴが首を傾げた。

　彼にとって、想像しにくい単語であったやもしれない。まして、エルメロイII世と遠坂凛が参加していた戦争など。

　懐かしそうに、II世はサングラスの内側で、目を細めた。

＊

「わたし、数年前は戦争をしていたの」

　遠坂凛が切り出した話題に、自分は唾を飲み込んだ。

　こう、答える必要があったからだ。

「……聖杯戦争のことですね。七人の魔術師が、七騎の英霊を呼び出し、願いをかなえる聖杯を求めて争った儀式」

「うん。時計塔ではあまり話題にならなかった。というか、田舎によくある大言壮語の類として流されたんだけどね。わたしは第五次聖杯戦争、先生は第四次聖杯戦争に参加してる。やっぱり、あなたは知ってたんだ」

「……はい」

　そうなのだ。

　よく、知っている。

神話や伝説に刻まれた幾多の英雄を、自分の使い魔サーヴァントとして呼び出し、戦わせる儀式。魔術師ですら荒唐無稽としか考えられない壮挙が、日本という国では行われていたのだ。

「その戦争で、わたしはアーサー王と会ったの。これも、多分あなたは驚かないわね。ブリテンに名高き伝説の王が、うら若い少女だったと聞かされても。……だって、あなたとそっくりだもの」

「…………」

　その通りだ。

　師匠が自分を遠坂凛と会わせないようにしていたのも、同じ理由に違いない。「好きにしたまえ」と言って立ち去ったのは、それでも出会ってしまった以上、疑念をここで晴らしておくべきだと判断したのだろう。

　だから、自分も諦めて、目を閉じた。

　数秒の後、ゆっくりと瞼を開き、フードを下ろした。

　凛が呼吸を止めるのが分かった。それだけ自分の姿が、かの英霊と同一だったのだろう。師匠も初めて出会ったとき、見事に硬直したものだった。あのとき師匠が浮かべてくれた恐怖の表情にこそ、自分はついていく気になったのだから。

　自分と王とで、違うところはおそらく髪の色。

　話によれば、アーサー王は鮮やかな金髪ブロンドだったらしい。自分はくすんだ灰色の髪で、ほんの一房だけが金色に変じていた。

「拙は、何歳に見えますか？」

　と、尋ねた。

「十五歳ぐらい？　……いえ、童顔、ってわけじゃないわね？」

「はい」

　うなずいてから、自分は答えを吐き出した。

「三年と数ヶ月ほど前から、拙の身体は成長していません」

「わたしと、ほとんど同い年ってこと？」

　不思議そうに、凛が瞬きする。

　しかし、すぐに口元を押さえて、こう呟いた。

「ああ、でもそうか。……そういうのもありえるのか。彼女だって、そうだったもの」

　彼女が納得したことが、自分には痛かった。

「アーサー王と、拙には、縁があるんです。多分それが理由で、拙の身体はずっと停滞しています。師匠はなんとかしようと、講師の仕事の合間を縫っていろいろ調べてくれてましたけど……」

「片手間ではなんとかなりそうにないから、専念したいって？　ああもう、だったらそう言えばいいのに。……いや、絶対そういうこと言わないタイプよね」

　そのとおりだ。

　自分にも、けしてそんなことは漏らすまい。

　だから、師匠の前で言うことはできなかった。あの人の決意を、汚すことなんてできないから。

　だけど……

4

「……聖杯戦争」

「まあ、そういうことがあったのさ」

　エルゴに概要だけ説明したII世が、肩をすくめた。

「改めて考えると、不思議なものだな。聖杯戦争の参加者同士で、教師と生徒となっているとは。いや、私の師も参加していたわけだから、ひょっとしたら、そういう縁があるのかもしれないが」

「縁、ですか」

「魔術師は、そういうものを大事にするからね」

「僕には、先生の苦しみはわかりません」

　不意に、エルゴが話題を戻した。

　あんまり急だったから、片眉をあげたII世の前で、彼はそっと自分の肩を抱いた。

「ひょっとしたら、先生をやめたいと言ってたのも、もっと深い理由があるのかもしれないけれど、この数ヶ月しか記憶のない僕には理解できません。理解できるだけの経験がありません。……だけど、怖いんです」

　と、囁いた。

「僕が記憶を失っていても、みんなよくしてくれます。この島は暖かくて、みんな優しくて、食べ物が美味しいです」

「どうも、最後が一番大事そうに聞こえるな」

「ごめんなさい」

　また、素直に頭を下げてから、

「でも、僕が、人殺しだったら？」

　一言ずつ、区切るように、エルゴが話す。

「過去の僕が、たくさんの人を苦しめるような、とんでもない大悪人だったら？」

「…………」

　ひどく真剣な目で言う若者を、II世は黙って見つめていた。

「分からないことばかりです。失われた記憶も、背中の見えない手も、今先生が言った五体の性能も、僕にはまるで理由が分からない」

「思い出したくないのかね？」

　II世の問いに、エルゴが視線を落とした。

　足元の砂浜を、小さな蟹がのんきに渡っていった。ぱしゃぱしゃと水が音を立てる波打ち際まで、視線は彷徨った。

「先生に会って、やっといくつか思い出したり、分かったりしてきました。背中の腕のことも、おなかが空いていたことも」

「空腹感、か」

　と、II世が呟いた。

　胸から腹部へと、この数日で少しだけ日焼けした手が流れた。

「だいたいの場合、欲しいものとはそんなものかもしれないな」

　鳥の声が聞こえた。シンガポール周辺なら、どこでも見られるオオハッカという鳥だった。黒い羽に、印象的な黄色いくちばし。

　九官鳥とよく似た鳴き声が、青空に響いていく。

「本当に満たされるかなんて分からないけれど、それに向かって歩かざるを得ない……多分そんなものが夢なんだろう。君の場合は、少し違うかもしれないが」

「いえ、分かります」

と、エルゴが言う。

　同じ方を、ふたりは向いていた。そんなに綺麗ではないけれど、たくましくて力強い海の白波が、砂浜を洗っていた。

「意外と、私たちは似た者同士かもしれないな」

「エルメロイ教室に入れますか？」

「君は魔術師ではないだろう。……だから、私が旅に出てる間の、期間限定だな。それまでは、私も講師をやめられない」

「十分です。嬉しいです」

　柔らかく、エルゴが笑った。

　その笑顔から視線をそらすようにして、

「だが、君が食べたものについては……」

　II世が、そう言いかけたときだった。

　話しかけた若者が、硬直していたのだ。

　こめかみのあたりを、手のひらで押さえて、エルゴは大きく目を開いていた。喉がかすかに震えて、掠れた声を漏らした。

「呼んで……る……？」

「エルゴくん？」

　様子がおかしいと判断して、介抱しようとしたII世がすぐ別の異常に気づいた。

「……なんだ、これは」

　海は、突然異変をきたしていた。

　いいや、海だけではない。II世たちがいる砂浜中に、ゆっくりと──おびただしい数の、灰かい白はくの物質が盛り上がっていったのだ。

　その滑らかな色合いを、II世はこう表現した。

「骨……?!」

　まさしく、骨であった。

　降霊術には、人骨を動かして使い魔とする技術もあるが、質にせよ規模にせよ明らかに違う。II世たちを取り囲むように現れた怪物は、異形の蜘蛛であり、狼であり、物理法則を無視して空を舞う白骨の鳥であった。

「く……っ！」

　敵性と見て放ったII世の魔弾を、いともたやすく蜘蛛は弾く。魔術師としてのII世の技量は平凡とはいえ、灰白の表面をかすかに焦がしたきりで、小ゆるぎもしなかった。

　主人は、その奥から現れた。

　二メートル半を優に超える巨きょ軀くが、海の中から歩み出たのだ。

　異形の使い魔たちを従える主人の足が、砂浜をにじると、その重量によってくるぶしの近くまで沈み込んだ。

「骨の……巨人……？」

『警告する、君主ロード』

　と、巨人は告げた。

　周囲の使い魔たちと同じく、灰白色の骨でできた身体から、ぼとぼとと海水が滴り落ちていった。

『アトラスの名において、汝に警告する』

「アトラス、だと？」

　凛と話していたときにも、上がった単語だった。

　三つの魔術協会。

　時計塔に比肩する組織の名。

『その若者を引き渡していただきたい、ロード・エルメロイ』

「アトラス院が、彼に何の用だ。いや、どうしてアトラス院の錬金術師がこんなところにやってくる。君たちの領域ではないだろう。それとも、エルゴくんがアトラス院の錬金術師だったとでもいうのかね？」

『あなたに関係のないことだ、君主ロード』

　質問に答えず、巨人が言う。

『それを引き渡してくれればよい。同じ魔術協会とはいえ、いやだからこそ、我々は必要以上の交流を持つべきではないと考える』

　取り合う余地などない、という態度であった。同時に、その性能は魔弾を無効化した装甲からも明らかだ。使い魔の一匹ずつがあの性能ならば、彼らの総戦力は近代の軍隊にも勝るに違いない。

　実際、使い魔の群れを先に誇示したのは、余計な言い争いを省こうという合理性のゆえだろう。

　ちら、とII世が赤毛の若者を振り返った。

「先……生……」

　エルゴは、まだこめかみを押さえていた。

　状況を理解しているとは思えない。そもそも、アトラス院や錬金術師といった単語からして意味不明だろう。時計塔において、それなりの地位にあるエルメロイII世ですら、今この場で何が起きているのか、判断できていなかった。

　それでも、彼は弱々しく微笑したのだ。

「先生……僕……は……大丈夫ですから……」

「…………」

　唇を噛んだII世が、サングラスを外して、ジャケットの懐から葉巻を取り出す。

　すでに先端は切ってあり、パチンと指を鳴らすと、炎が灯った。かすかにその指先は震えていた。

震えが落ち着くまで、ゆっくり煙を味わってから、II世はこぼした。

「……大変に、残念だ」

『賢明な判断だ、君主ロード』

　骨の巨人が、抑揚のない口調で魔術師を讃える。

　対して、II世は、あとほんの少しで合格点を取り逃してしまった子供のように、悔しそうな口調で吐き出したのだ。

「もう十分ほど、早く来てくれればよかった。もしくは、私ではなく、彼に直接ついてくるよう話せばよかったんだ。そうすれば、介入する余地などなかった。自分に降り掛かった火の粉は自分で振り払いたまえ、と言うだけで済んだのに」

『……それはどういうことだ、ロード・エルメロイ？』

「期間限定だが、彼は私の生徒となった」

　葉巻の煙を潮風に溶かして、II世は骨の巨人を睨みつける。

「そして、私は生徒を売るような真似はしない。何があろうとだ」

『ロード・エルメロイ！』

「申し訳ないが、II世をつけてくれたまえ。私の肩には重すぎる名前でね！」

　最後の言葉とともに、葉巻を投げつけた。

　その葉巻から、膨大な量の煙が放出されたのである。単なる煙幕などではない。魔術を編まれたその煙は、アトラス院の錬金術によってつくられたのだろう骨の巨人の、感覚器をも妨害せしめた。

　いまだ若き君主ロードが携帯する、数少ない魔術礼装がこれであった。

「逃げるぞ！」

　耳打ちしたII世が、すぐさまエルゴの腕を引いた。

「先……生……っ」

「私がかなうわけないからな！　まずは体勢を立て直して……」

『なるほど、その認識は正しい』

　声とともに、衝撃がふたりを突き飛ばした。

　周囲にいた使い魔の一部が自爆したのだと、II世が悟ったのは少し後だ。

『認識が妨害されるなら、面で潰せばいい。いささか効率は落ちるが、問題はない』

　二度、三度と、衝撃が続く。

　無論、II世の防御魔術で受け止められるわけもない。しかし、衝撃自体は無効化できずとも、使い魔の破片が身体に食い入ることはなかった。

　空中で、破片がとどまっていた。

　半透明の幻手が、危険な破片をすべて阻んでいたのだ。脂汗を流しながら、砂にまみれた若者が、II世をかばっていたのであった。

「エルゴ……！」

『そういう性能か。どうやら間に合ったらしい』

　薄れてきた煙幕を蹴散らして近づき、ぶん、と巨人の拳が振り落とされる。

　再び、幻手が迎え撃った。

　巨人の拳ひとつに対して、エルゴの幻手が三つ。

　激突は、トラックほどもある鐘を鳴らしたような、凄絶な轟音を伴った。あるいはそれも物質的な音ではなく、霊的な現象であったやもしれない。足元の砂浜がクレーターのごとく抉れ、エルゴとII世がまとめて吹き飛ばされた。

『……悪くない』

骨の巨人が、自らの拳を見やった。

　五指が見る影もなく捻じれ、破壊されていた。圧倒的な質量差がなければ、吹き飛ばされるのは骨の巨人の側だったろう。

　一本ずつ、捻じれた指を、逆の手でつまんで強引に直す。

　それから、動かないエルゴたちに歩み寄ろうとして、巨人の身体が揺れた。頭部に突き刺さった黒い呪いが、巨人の表皮でくすぶっていた。

　視線を向ける。

　陸の方ではない。

　そちら側からの支援は、骨の巨人とて想定していた。

　今襲いかかった呪いガンドは、逆の方角━水路からモーターボートを駆ったひとりの女性によるものだ。

「待たせたわね！」

　西部劇の銃士ガンスリンガーのごとく、遠坂凛が白い人差し指を向けていたのであった。

＊

　モーターボートが、波を蹴立てた。

　片手で運転しながら、凛は砂浜に向かって呼びかける。

「結界が反応したから、何かと思ったら！　楽しくダンスのお誘いを受けてるってわけじゃないですよね、先生？」

「……お前、それの運転は」

「車よりは簡単でしたよ！　二、三台ぶつけちゃって、修理費やら買い直しやら賠償金やらで、ちょっと死ぬかと思いましたけど！」

海賊と接触したのは半年前と言っていたが、彼女が運転に習熟するには十分な時間だったらしい。いや、運転の技術だけではなく、ボート自体に何らかの魔術がかかっているようだった。水との摩擦や、風圧に応じた魔術を組むことなど、彼女にとってはたやすいことであったろう。

その出現に、骨の巨人の使い魔が反応した。

空中より飛来した骨鳥が、凛の頭上、斜め後ろから襲撃する。

「Anfangセット！」

対する彼女は、ノールックでガンドを飛ばして撃墜。そのまま薙ぎ払うように指を動かし、三節の呪文を詠唱する。

「Identifizieren,識別、 bestätigen und kontinuierlich feuern確定、連続射撃──！」

ガトリングガンもかくやというガンドの猛射。物理的な威力に達した呪いが、空中の使い魔たちを砕いていく。

まず、制空権を奪い取る戦術であった。

第一陣の使い魔を全滅させ、再び鮮やかにターンしたモーターボートへ、巨人が声を発した。

『妨害するのか、リン・トオサカ』

「あら、こっちの情報は検索済みってこと？　さすがはアトラス院」

にんまりと、彼女が唇の端を歪める。

『この島を特定した時点で、魔術師の特定は容易だった。コンサルタントを名乗る身の程知らずも、はるばる時計塔からやってきた君主ロードも』

巨人が視線をやると、エルゴたちを取り巻いた使い魔が、その包囲を縮めた。

いつでも、彼らを殺せるぞ、というように。

『どうする？　そこから私の使い魔を落とせるか？』

「必要ないわ」

　にこりと笑って、凛が指を持ち上げる。

「グレイ！」

　叫びに、自分が応じた。

　マングローブの森から飛び出し、エルゴと師匠の、周囲の使い魔たちを死神の鎌グリム・リーパーで切り払う。凛の言葉に従って、彼女がかきまわしている間に、森へ潜り込んでいたのだ。

　蜘蛛の脚が断ち切れ、骨の狼の体が斜めにずれる。

　その隙に師匠とエルゴを捕まえ、『強化』された足で跳躍した。

　着地の寸前、群がってきた白骨の使い魔たちを、片手殴りの鎌で牽制するまでが一動作。これ以上、師匠たちには指一本触れさせないと、目と刃の圧力で告げる。

「ありがたいが、もう少しお手柔らかにお願いできないかな。レディ」

「余裕があるときはそうします」

　地面に這いつくばり、咳き込んだ師匠の前に立つ。

　ただ、使い魔たちから覚える違和感に、自分は表情を硬くしていた。

「これは、死霊の類ではありません……！」

「……そうだろうな」

　予想していたらしく、師匠がうなずく。

「アトラス院は、私たちと同じ理屈では神秘を扱わない。おそらく、これらの使い魔は、細工こそしてあっても、本当に骨なんだろう。リン酸カルシウムを主体とした、単なる物質だ」

――『アトラス院の錬金術師と会ったこともあるがね。彼らのそれは現代科学と魔術のミックスのようなものだ』

師匠の言葉の意味が、ようやっと少しだけ理解できた。

だが、逆に安堵もした。おかしいかもしれないが、自分は墓守出身なのに、死霊や幽霊が恐ろしくてならない。それらの気配を感じただけで、いまだに身体がすくみ上がり、心は凍りついてしまう。

でも、この相手なら。

「エルゴさん、師匠を守ってくれますか」

「……いけると、思う」

若者が、小さくうなずく。

そこで、やっと変化に気がついた。

「髪を、切ったんですね」

「おかしいかな」

「いえ、思った通りの優しい顔でした」

　どちらかと言えば人見知りな自分だが、この相手は話しやすかった。

　おそらくは子供たちにも発揮していた人懐こさのためだ。

（……でも、どうしてだろう）

　近くにいると、自然と身体が強ばるのも感じていた。……それこそ、死霊を前にしたときみたいに。

「変だな」

　と、エルゴがお腹を撫でた。

「君を前にすると、おなかがすいちゃう」

　のんきで、少し不思議な言葉が、なぜだか気にかかった。

　だけど、それを訊く状況でもなく、先に師匠が口を開いたのだ。

「動けるなら、エルゴも行け」

「ですけど、先生は」

「ひとりずつで対処できるほど、軽い相手ではあるまい。ふん、一応逃げ足ぐらいは動く。お前らがさっさとあいつを無力化すればいいんだ」

　有無を言わさぬ指令に、自分も意識を切り替える。少なくとも一理はある。こんなときの師匠の分析なら、賭ける価値はあるだろう。

「──行きます！」

　思い切り、地面を蹴った。

跳躍の度に、白骨の使い魔たちを切り払う。単なる物質であり、ひょっとしたら無尽蔵に湧いてくる相手というならば、進路を塞ぐ最低限だけを排除すればいい。

　一体、二体、三体。

　四体目に鎌を振るうよりも早く、ひとりでに弾け飛んだ。

　幻手である。エルゴが、『強化』した自分とほぼ同じ速度で、すぐ横合いを疾走していたのだ。

（速い──！）

　訓練は見ていたが、ここまでの身体能力とは思わなかった。まともな魔術など使えない自分だが、こと『強化』についてはほとんどの魔術師を凌いでいるはずだ。それに苦もなくついてくるとは。

「そいつは、僕が！」

　エルゴの幻手が、前方の使い魔たちを次々撃破する。

　文字通りの手数はさることながら、伸縮自在の攻撃範囲がただごとではなかった。十数メートル先に至るまで、重量にして百キロほどはあろう骨の蜘蛛や狼の外殻がたやすく打ち砕かれ、砂浜に哀れな残骸だけを晒していく。

（これなら──！）

　真っ直ぐに、主人格たる骨の巨人へのルートが見えた。

　同時、決断とともに叫ぶ。

「アッド、第一段階応用限定解除！」

「イッヒヒヒヒ！　ああいうデカブツにはこうだな！」

　アッドの言葉とともに、自分の手の中で、死神の鎌グリム・リーパーがさらに変化する。

　破城槌バトリング・ラム。

　その名称は、文字通り城門を打ち砕く破壊力からだ。

ハンマー状の背面からジェット噴射のごとく魔力を放出し、加速するベクトルを遠心力へと変換する。同時に、骨の巨人の拳が、自分の頬から数ミリの距離を吹き抜けるのを感じた。風圧だけで姿勢を崩されそうになるのを堪え、交差法気味に、破城槌を骨巨人へと叩きつける──！

　轟音が、海を割った。

　破城槌の衝撃の余波、だけではない。

　自分の一撃で、骨の巨人が海まで吹き飛ばされていたのである。

　信じられない。

（……打ち砕けなかった！）

　おそらく、衝撃インパクトの寸前、何らかの手段で防御力を嵩かさ上げしたのだ。致命傷にならないようにとは考えたが、それこそ戦車の装甲だって粉砕する一撃だったはずだ。使い魔たちとはわけがちがう。一体、どのような技術があれば、骨がそこまでの強度を得るのか。

　……いや。

（今のは、まるで最初から）

　最初から、破城槌を予期していたかのような手応えではなかったか。

　ひびわれた片腕を庇いながら、腰まで海につかった巨人が体勢を立て直す。

　だが、その方向は──

「──凛さん！」

　モーターボートが、すでに回頭していた。

　一本の矢のごとく突き進み、操縦している凛は片手を振り上げている。

「ああもう、こうなったらとっておき！」

指の間に挟まれていた宝石が、虹色の輝きを放ったのだ。

「Anfangセット！」

　魔術刻印、起動。

　左手に、複雑な紋様が蒼く光るのを自分は見た。刻印された術式に従い、宝石に込められていた魔力が引き出されていく。

「自分の魔術を信じて練り上げろ、だったわよね。先生」

　呟き、呪文を構築する。

「Vierzehn,十四番、 neun,九番、 acht.八番。 Drei Schwerter,三連の剣、 Synergie,相乗、 eine Mulde抉れ！」

　打ち振られた手から、螺旋のごとく重なった光が、巨人へ挑みかかったのだ。

　単純な威力だけなら、現代の魔術師としては最高クラス。相乗された宝石は本来禁呪の領域のはずだが、凛の技量ならば十分使いこなす。

　直撃を受けた骨の巨人が、初めて大きく揺らいだ。

　だが、なお倒れずに持ちこたえた相手に、凛が瞬きした。

「どんだけ頑丈なわけ！　ヘラクレスだって一回ぐらい死ぬわよ！」

『魔力の転換とは、面白い性質だ』

　いや、けして無傷などではない。

　骨の巨人の頭部は、派手に抉れていた。剝き出しになった部分には何もなく、ただ空洞だけが空き、ぽっかりと向こう側の青空を覗かせていた。

　そして、動画を逆再生するように穴は収縮して、消滅する。

「頑丈だから、じゃない」

　エルゴの呟きが、聞こえた。

「そこに、誰もいないんだ」

　巨人と見えたのは、むしろ抜け殻のごとき存在。

　本体は別にいて、骨の巨人はカラクリ仕掛けのようなものならば、たとえ急所を穿とうが抉ろうが、いくらでも再生する道理ではないか。

「グレイ！　凛！」

　師匠の叫びは、少し遅れた。

　刹那、足元の砂浜から湧き出た骨の鞭──とでもいうべき白い索さく条じょうが、自分とエルゴの体に巻き付いたのだ。『強化』していた自分や、エルゴの幻手さえ凌ぐ剛力で、骨の鞭は強く、きつく、こちらを縛り付ける。

　視界の隅で、凛も同じ骨こつ鞭べんに拘束されているのが見えた。

　おそらく、自分が破城槌で打ち飛ばしたときから、その罠を張っていたのだ。

　普段なら用心を欠かさないだろう凛も、相手が吹き飛ばされた直後だからこそ油断した。戦況の変わったタイミングならば、対応は難しいはずだったのに。

（……どう、して）

　どうしてだろう、と思考が空転する。

　アッドの破城槌も、凛の魔術も初めて見せたはずなのに、そう来ると知っていたかのように対策を取られた──

「ぐぁ……っ！」

　押しつぶされた自分の肺から、空気が溢れた。

　途中に破城槌を挟み込み、一気に圧あっ搾さくされてしまうことだけはかろうじて凌いだが、脳内の赤色警報レッドアラートが最大音量で鳴り響く。それこそ鉄でも拉ひしぐほどの力で、骨の鞭は締め付けてきたのである。

「痛い痛い痛い痛い曲がる曲がる曲がる曲がる曲がる！」

　アッドが、悲鳴をあげる。

　握りしめた手に、嫌な軋みさえ伝わった。

「アッド……！」

　異常なまでの圧力の中で、自分は必死に思考していた。

　本体は、あの骨の巨人の中にいない。

　さっき推察した通り、人体の急所もあるまい。ひょっとしたら、核コアのようなものが存在するかもしれないが、自分にそれを判別する能力はなかった。

（だったら……）

　骨の巨人を、残らず消し飛ばせたら？

　破城槌の一撃でも穿てなかった巨人を、微塵に砕くような手段が……

（……ある……！）

　ぐっ、と歯を食いしばる。

　魔術回路を全開で励れい起き。強引に呼吸を再開し、心臓へと薪をくべる。肺ではなく、酸素でもなく、赤血球でもなく、ただ呼吸という儀式によって自分の心臓はひとつの魔力炉と化した。

　骨の鞭が鉄も曲げるほどの圧力ならば、これは鋼も溶かすほどの熱。一柱の竜にも似た絶大なる『力』が、体中の魔術回路を駆け巡る。

　ああ、まるでマグマのジェットコースターだ。

　骨の髄から、指先まで焼けただれそう。

　自分という存在が、根こそぎ置き換わっていく。眩まばゆすぎる『力』の本質が、自分という概念を押しのけていく。それでも消えかけた蠟燭の芯にしがみつくようにして、身体に巻き付いた骨の鞭の圧力に抗う。

徐々に、徐々に、拘束が緩んでいった。

　それに合わせて、手にしていた破城槌をさらに変形。

「師匠、抜ばつ錨びょうの許可をお願いします！」

　白い光が、自分の手の内側から、暴走寸前の威力を伴って立ち現れた。

　アッドに秘められたいくつもの形態の、真なる姿。魔力を伴った颶風が、回転する匣アッドから吹き荒れる。かつては周囲の魔力を食い荒らさなければ発動できなかった第二段階限定解除を、今の自分はひとりで成し遂げられる。

　自分と、アッドだけで。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……」

　半ばトランス状態で、詠唱を開始する。

　師匠の許可とともに、解き放てるように。

「Crave望んで……Deprave堕落させて……」

「そこまでだ」

　と、静かな声がこぼれた。

　蒼い長髪の人影だった。

　おおよそ、二十代半ばであろうか。

　背が高く、中性的な印象だが、スレンダーな肢体は紛れもなく女性のものだ。自然界には通常ありえない髪の色も、紫の瞳も、彼女にひどく似つかわしかった。

　制服と思しい衣装の胸元には、紺色のネクタイが揺れている。そのネクタイと、なびく蒼い髪で、彼女が潮風に吹かれる現実の存在だということに、やっと自分は気づいた。唇を引き結んだ美貌は、ギリシャ彫刻を思わせる絶妙なバランスで、自分と同じ生き物とすら思われなかったからだ。

（……まるで、人工物のよう）

そんな感想も、すぐに吹き飛ぶ。

　切り札さえも、開く前に封じられていた。

　女の手から伸びた骨の剣が、師匠の喉元にぴたりと突きつけられていたのであった。

＊

（助け……なきゃ……）

　体中を激痛で埋め尽くされながら、エルゴは思っていた。

　II世にしろ、グレイにしろ、わずか数日を過ごしただけの相手だ。最も長く一緒にいた凛でさえ、まだ一ヶ月にならない。

　だからこそ。

　エルゴにとっては、誰もが人生の大部分をともにした友人だった。

　たった一ヶ月にもならない記憶を共有した、かけがえのない相手であった。

（助けなきゃ……！）

　ただ、その想いが、身体を突き動かす。

　幻手の力ずくで、少しずつ骨の鞭をねじ伏せていく。

　なのに、その思考が突然失せたのだ。

　光に、エルゴは目を奪われていた。

　強烈な骨の鞭の拘束さえ忘れるほどに、意識を持っていかれていた。

　いつも自信なげで、伏し目がちな灰色グレイという少女から発せられているとは到底思えない、凄せい烈れつ凶きょう猛もうなる白

い光。

　大地から天空を逆しまに裂く稲妻のごとき光を前にして、得体の知れぬ衝動が、エルゴの身の内に起こっていたのである。

　それは、厄災のような。

　それは、疫病のような。

　それは、地獄のような。

（駄目だ）

　必死に食い止めながら、若者は喉を鳴らしていた。

　身内を渦巻く欲望が、脳を焦がしている。正気なんてものはとっくに喪失。骨も神経も焼き尽くすほどの業火を、エルゴは味わっていた。大気圏突入の断熱圧縮で燃え尽きていく流星のように、それは若者の血管という血管、神経という神経を蹂じゅう躙りんした。

　それこそ、たった今、少女の内側で蠕ぜん動どうしているものと同じほどの熱を。

（…………い）

　ぼんやりと、それは形を取る。

　けして聞いてはならぬ声だった。

　しかし、耳を塞ぐ力など、若者のどこにも残っていなかった。幻手ものきなみ封じられ、まともに呼吸することさえかなわない。血流も阻まれ、みるみるうちに若者のあどけない顔が青黒く染まっていく。

（……たい）

　震えるほどに、欲望がその勢いを増していく。

　あの少女を相手に、あってはならぬ衝動であった。だというのに、少女の放つ光を前にすれば、陽光を浴びた霜のごとく、自我が暗黒に溶けていく。

「アァ……！」

ただひとつの概念だけが、エルゴの裡うちに結実した。

（喰いたい）

5

　師匠の喉元に突きつけられた骨剣に、自分は硬直した。

　今にも、骨の巨人に、光を解放しようとしていた矢先の出来事であった。その照準を新たに現れた女に変えるのは、不可能だった。凛ならばこちらの行動に対応して回避行動に移れただろうが、この状態の師匠に望めるはずもない。

　かといって、発動しかけた光をすぐさま消し去ることもできず、じりじりと頬を汗が伝うのを感じていた。

　こんな膠こう着ちゃく状態は長く続かない。

　自分の魔力も、手の中の光を維持するだけで浪費されていく。ほんの一呼吸で、並の魔術師ならばまるまるひとり分の魔力が吹っ飛んでいくのだ。事情を知らない者が、その数値だけを知れば、あまりの蕩とう尽じんぶりに身を投げたくなるかもしれない。

　みるみるうちに干からびていく実感と、わずか数センチ刃を引かれるだけで師匠が死に至るだろうという恐怖で、板挟みになったところで、

「待て」

　と、声が響いたのだ。

　無論、このタイミングで、そんな言葉を放つ者はひとりしかいない。

「……師匠」

「わざわざ本体を晒す危険までおかして、なお喉元で剣を止めたというのは、話すことがあるからじゃないかね」

　じろりと睨みつけて、師匠が告げる。

　一見は頼もしい態度だが……後ろ手にした指が、かすかに震えて

いるのも、自分だけは見て取った。この人らしい意地っ張りが、どんな結果を招くのか、ただ冷や汗を掻くばかりだった。

　はたして、しばしの間をおいて、

「ラティオ」

　と、蒼い髪の女が口にした。

「ラティオ・クルドリス・ハイラム。この個体の名だ」

　その名前は、師匠に思いがけない反応を生じさせた。

「クルドリス家……アトラスの六ろく源げんだと」

「て、時計塔でいうところの君主ロードの家系?!」

　拘束されたまま、凛が目を見開いた。それなりの距離はあっても、自分たちの聴覚ならば問題は生じない。

　そして、自分もその言葉に衝撃を受けていた。

　時計塔に十二人しかいない君主ロード。それに匹敵するだけの家系とは。

　自分たちを翻弄した錬金術の技量も、ならばうなずける。師匠以外の君主ロードがいかに優れた魔術を行使するか、自分もこの数年で知ってきた事柄だからだ。

　紫の瞳が、じっと師匠を映していた。

　形の良い唇がゆっくりと動き、

「交渉をしよう」

　と、アトラス院の錬金術師が告げたのだ。

「ラティオも奥の手を出してはいないが、あなた方もそうだろう。ならば、ここで無理に争っても、互いの被害が大きくなるだけだ。互いに譲れる範囲を明確化したい」

「なんとか、そこまで引きずり出した、というところかね？」

「あなたがたの戦力を、過小評価していたのは認める」

「……ふうん。アトラス院なら、自分の最初の計測結果にこだわるかと思っていたけど」

　凛が軽口を叩いた。

　しかし、これにもラティオは表情を変えず、受ける。

「計算はあくまで既知の要素を組み合わせたもの。未知の要素が加われば、ズレが生じるのは当然だ。──そして、こちらの有利に終わらせられるだけの状況は整えた」

「アトラス院の高速思考と分割思考だな」

　師匠が指摘する。

「アトラス院の錬金術師は、自らをひとつの演算装置となす。ゆえに必須とされるのが高速思考と分割思考だ。前者は文字通りに高速化された思考を、後者は脳をパーティション分けして複数の自分を並列に動かす技術を差す。さきほどミス遠坂を拘束した手際、こちらの切り札を晒す前に私を押さえたやり口、これは高速思考と分割思考の併用によって、君が擬似的な未来視を可能としているからだろう。……そう、おそらく数秒ほど先の未来を演算できているんじゃないか？」

　思わず、声が出そうになった。

　だから、途中からずっと先回りされていたのか。

　あれは未来を演算できるほどの情報を、集め終わった結果だったのか。

「ならば、抵抗は無駄だと思わないか？」

「思わないとも。グレイを止めるのではなく、私を押さえたということは、こちらの切り札を確実に防ぐだけの自信がないのだろう？　少なくとも、君が無視できないだけの確率は残っているはずだ」

　挑発的な言動だが、ラティオの表情は小ゆるぎもしなかった。

冷ややかな視線が、すっと動いた。

こちらを見られて、びくりと身体が強張ってしまう。

「剣を引きたまえ。そうすれば、グレイに槍を止めさせよう」

「……いいだろう」

彼女が剣を引くのと同時に、こちらを束縛していた骨の鞭も退いていった。自分もゆっくりと、制御できる範囲に光を落ち着けていく。

ようやく、ほんの少しだけ息をつけた。

凛も同様に解放されて、モーターボートを岸の方に寄せたが、若者だけはまだだった。

「エルゴも、放してください」

「そんな風に名乗っているのか」

ラティオが、ちらと拘束されたままの若者を見た。

「それは……」

「ダメ、だ」

続く言葉を発したのは、ラティオではなかった。

うつむいたエルゴ本人だったのだ。

「絶対に、僕を解放しちゃダメだ。今だけは」

次の瞬間、骨の鞭が引きちぎれたのだ。

ラティオが緩めたからではない。

幻手が骨の鞭を上回ったのだ。自分がギリギリまで『強化』して、やっと押しのけた骨の鞭を、まるで飴細工かのごとくたやすく。

六本の幻手のうち、上部の二本が大きく伸びて、ラティオへと襲い掛かる。

咄嗟に庇おうとした白骨の使い魔たちが、その幻手の表面に触れるだけで崩壊した。

「やめろ！　やめろお前ら！」

　叫ぶエルゴ。

　完全に、幻手が彼の制御下を離れているのか。

　刹那、ラティオはひとつの名前を呼んだ。

「タンゲレ！」

　空中から、さらなる骨の鞭が走ったのだ。

　ラティオを襲撃した幻手を縛り上げ、そのままエルゴをも拘束する。

　それを成した人影は、爆発みたいに砂を撒き散らして、海岸へと着地した。あの骨の巨人であると理解するのに、少しだけかかった。一時休戦となり、波のただなかで停止していた骨の巨人が、ひとっ飛びで砂浜へと帰還したのだ。

　ばかりか、

「触れただけでこっちの術式を解析して、解呪デプログラミングしたってとこか。さすがに大した性能だが、今のは骨皮質と海綿質に三重の結界を敷いた特別製でな。──これで問題ないですか、ラティオお嬢さん」

　男臭い声が、骨の巨人から発せられた。

　さきほどまで、ラティオの言葉を伝えていたほかは、まったく無機質な態度でこちらを追い詰めていた相手とは考えがたい──いっそ人間味さえある仕草で、ぐいと肩をすくめて見せる。

　そのギャップに驚いていると、師匠が口を開いた。

「アトラス院では、原則として地下蔵の内側でつくられた兵器を持ち出してはならない、と聞いたことがあるがね」

　その言葉に、彼女は至極真面目な顔でうなずいた。

「もちろんだ。兵器など持ち出してはいない。この剣もタンゲレも、ラティオの骨なのだから」

「何？」

「同じアトラス院のエルトナム家が自らの神経としてエーテライトを扱うように、クルドリス家は自らの骨としてエグゾフォルムを扱う。今使った骨は、すべてラティオから生まれたものなのだ。体の一部である以上、アトラス院の掟には抵触しない。そも、アトラスの六源とは家伝特質を託された一族の名。我らは我らの身体の可能性を探求するがゆえ」

　その言葉に、師匠もかすかに目を見開いていた。

　アトラス院とは、そういう神秘を扱う者たちだったか。

　一応時計塔と同じく、魔術協会という括りのはずなのだが、むしろＳＦ映画に出てくるサイボーグか何かのようだった。あるいは、武の極みを目指す武術僧みたいなものであろうか。

「タンゲレの人格は、ラティオの分割思考のうち、ふたつをあてがったものだ。自己判断による成長を許したら、ロクでもない性格に成り下がったが」

「なんと、これは無慈悲な言葉！　姉弟みたいなものなのに、その罵倒ぶりには胸が張り裂けますよ、ラティオお嬢さん」

「黙れ。後、お嬢さん呼びはやめろ」

「へいへい、お嬢さん」

　片手をあげた巨人の口調からは、人工知能っぽい雰囲気はまるで感じられない。

　もちろん、理屈からすればアッドも似たようなものなのだが、仮にもヒトガタである分、なおさら巨人の挙きょ措そは自然かつ身近で、恐ろしく思えてならなかった。

「なぜ、エルゴを狙う？」

「ラティオたちが、遺産の相続者だからだ。そして、エルゴは古い契約の遺産だ」

当然のごとく、モノとして女は言った。

　拘束されたままのエルゴは、今度こそ動かなかった。タンゲレと呼ばれた巨人の新たな骨鞭は、さしもの幻手をも凌いだらしい。

　代わりに、凛が尋ねた。

「その呼び方はどうかと思うけれど……じゃあ、あなたの父親か誰かがエルゴをつくったとか言いたいわけ？」

「三つの組織から、三人の魔術師──あえてこう呼称しよう──が、ひとつの実験を行っていたと考えればいい。誰もが忘れ去るほど古い時代の実験ではあったが、現代になってその結果のひとつが、外界に流出したのを察知した」

「三つの組織から……三つの魔術師……」

　呟いて、師匠はこう続けた。

「まさか、それで六本の腕か」

「ほう？」

　ラティオの細い眉が動いた。

「エルゴに、何らかの霊的な因子が融合していることは察しがついていた。生きている人間が、憑依現象で肉体的変容を遂げること自体はさほど珍しい事例じゃない。狐憑きや人狼の伝説を紐解くだけですむし、卒業した私の弟子にも獣性魔術なんて使うものがいるぐらいだ」

　キリスト教圏でも、悪霊憑きというのはポピュラーだ。

　だからこそ、エクソシストなんて職業が表向きにも成立しているのだから。

「多腕の上、腕によって別種の個性と性質を感じられるところから疑っていたが、彼に複数の霊がついていると考えれば、不思議はあるまい。この場合、三人の魔術師に三対の腕、三つの霊。おおよその魔術は三角形トライアングルの安定より始まる。アトラス院と流儀は異なろうが、錬金術における塩と水銀と硫黄も三要素トゥリア・プリマとまとめられる。それぞれの魔術師が、秘ひ奥おうを持

ち寄ったということか」

　滑らかに動く師匠の舌に、自分はある種の既視感デジャヴを覚えていた。

　事件の謎に、触れる時のそれだ。

　師匠の推理は、単なる魔術の知識以上に、その魔術を行使する人間の観察によって成立する。今、遺産の相続者だと自称するアトラスの錬金術師を前にしたことで、その異能が発揮されたということか。

　実際、ラティオはかすかに眉を寄せたのだ。

「……儀式を見たわけでもあるまいに、いささか察しが良すぎるな」

「ここしばらく研究していた術式が似た類だったものでね。……ただし、逆方向で、因子を引き剝がす方だが」

「…………ッ」

　今度は、自分の胸に、ちりと痛みが走った。

　今の師匠の言葉は、まさしく自分のことだったからだ。

　かつての英雄の因子を引き剝がす。

　それは、肉体年齢ごと停滞してしまった自分のための研究だ。師匠が講師をやめてまでも傾注しようとしている術式。

「もしも、そうした因子を引き剝がすのではなく、誰かに植え付けるのなら、という仮説を考えたこともあった。こちらは、さしずめ疑似サーヴァントとでも言うべき、英霊もどきになるな。おそらく、エルゴも似たようなものだろう」

「……だったら、あれに何が憑いているのかも検討がついているのか？」

「よもつへぐい、だ」

　と、師匠は口にした。

凛が、表情を変える。

あるいは、自分の国の神話だったからかもしれない。

「冥界から死者が帰れなくなる話か」

「ああ、ヨモツヘグイは日本の神話だが、類似例として西欧圏で有名なのはペルセポネの伝説だろう」

エルゴの話を聞いた時から、師匠が漏らしていた言葉を、自分は思い出していた。あの時から、師匠には察しがついていたのだろうか。

「豊穣の神デメテルの娘、ペルセポネをさらった冥界神ハデスは、彼女に冥界の食べ物を差し出した。結果として、激昂したデメテルが娘を取り戻した後も、その冥界の食べ物を食した分だけ、ペルセポネは冥界に残らねばならなくなった。……名前の他にも、ひとつだけエルゴは記憶していた。過去に食べたという、形状も味わいも言語に絶する何かを」

ヨモツヘグイ。

黄泉戸喫。

「ペルセポネの伝承では彼女が食べたものは、ザクロだという説もある。多くの神話や伝説において、ザクロは人肉の代わりとして捧げられるものだ。ならば、黄泉の国のザクロとは一体なにか。それを食せば、もはや現世に相応しくならざるものとは」

「ちょっと待ってよ先生！」

耐えかねて、凛が口を挟んだ。

自分などより、遥かにまっとうな魔術師として勉強を積んできた彼女は、師匠の言葉の続きに思い至ってしまったのだろう。

その言葉の持つ、真の恐ろしさも。

「先生が言うとおりなら、エルゴが食べたのは……」

「エルゴの術式はおおよそこの伝説に即したものと考えていい。冥界にせよ、ヨモツヘグイにせよ、洋の東西を問わない伝承であるゆ

え、複数の魔術組織を隔ててなお通用する。そして、エルゴが何らかの因子を取り入れたという話からすると、その目的もはっきりする。たとえば、ミイラの欠片が長らく薬と考えられていたように。戦士の脳や心臓を食べれば、その勇猛さが得られると信じられてきたように。ならば、これらの伝説で最も強壮なる対象は何か。冥界にある人肉とは、もしくは人肉と紛うものとは」

　講義のごとく、朗々と師匠の声が響く。

　アトラス院の錬金術師──ラティオがたじろぐほどの圧が、そこにはあった。

「ヨハネによる福音書にはこうある。──『わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる』。これは説教ゆえのたとえの表現だが、我々が神聖なるものを喰らい、取り入れるという概念にどれほど古くより親しんできたかということも見て取れる。つまり」

　一拍をおいて、師匠は答えを口にする。

「つまり、エルゴは神の血肉を喰らった……違うかね？」

　その意味に、しんと沈黙が落ちた。

　潮騒だけが、五月蠅いほどに鼓膜を叩いた。

　せめて、少しの間だけでも、真実を覆い隠そうとしているようにも思えた。

「しかも、一柱じゃない。六本の幻手はつまり彼のものではなく、神のものだ。三対と考えて、三人の魔術師が協力したのなら、三柱の神と考えてまず間違いなかろう」

「……噂通り、侮れない方だ。ロード・エルメロイII世」

　と、ラティオは評価した。

「ほとんどヒントのない状況だったと思うのですが、よくぞそこまで。略奪公などと聞いてはいましたが」

「余計なあだ名はかまわんが、こんなものはまともな仮説ですらな

い。神の血肉を喰らったはいいにせよ、その因子を利用することなど現代の魔術では不可能だ……いいや、神代の魔術でもありえるのか？　そもそも一柱の神だって、人間の器にはあまる。三つの組織の、三人の魔術師と言ったが、一体どんな詐術を使った？」

「それこそ、明かすわけには参りません」

　ふわりと、女の唇に薄い笑みが浮かぶ。

「ですが、少なくとも彼の危険性は十分に理解できたはずだ。最初の無礼はお詫びしましょう。必要ならば、十分なだけの礼を供出してもいい。エルゴをお引き渡し願いたい」

「わたしはとっくに決めてるわよ」

　短く言って、凛が師匠の前に割り込んだ。

「突然しゃしゃり出てきて、人の知り合いを奪おうなんて、そんな勝手が通用するって思われたら困るんだから」

　その瞳は、挑戦的な色を帯びて、ラティオを睨みつけている。彼女の中ではとっくに答えが出ているのだった。

「…………」

　自分は、ただ茫然としてしまっていた。

　神を、喰らった。

　その意味を、自分はきちんと理解していなかった。──魔術師ならざる自分には、それがどれほど重大で、致命的であるかを、判断できなかった。

　あるいは、その意味を分かりすぎてしまった。──かつての英雄の因子からつくられた自分は、エルゴの境遇がいかに孤独であるか、身勝手な共感を覚えずにいられなかった。

「……先生……」

　手足を拘束されたままの若者が、低く呻いた。

「僕は……きっとその方がいい……」

「…………」

　黙ったままの師匠に、ラティオが口を開く。

「生徒の自主性を重んじればいかがですか、ロード・エルメロイII世」

「……断る」

「先生」

　もう一度、エルゴが呼ぶ。

「そうしたいじゃなく、その方がいいと言ったな。それは願望じゃない。ただ、楽な方に身を任せているだけだ。覚えておけ、それは私の生徒には最初に禁じていることだ。私の教室に籍を置くからには、自分がなすべきこと、やるべきことは嫌でも考えてもらう。たとえ、その結果が私と反目するものであったとしてもだ」

（……ああ）

　たまらない気持ちになった。

　いつも、この人はこうだ。

　目指すべき星に手を伸ばす。届かなくても背伸びする。恐ろしくて震えていても、それでも精一杯に胸を張る。

　だから、その隣にあれば、少しだけマシな自分になれるような気がした。

「拙には、分かりません」

　と、かぶりを振る。

「エルゴさんが神を喰らったというのも、ラティオさんがそのエルゴさんの相続者だというのも。でも、今エルゴさんがいなくなったら、この島の子どもたちは悲しみます」

「イッヒヒヒヒ、まあこうなるよなあ！」

　アッドを再び、死神の鎌グリム・リーパーの形へと戻す。

やれやれ、と骨の巨人がため息をついた。実際のところ、呼吸しているわけではなかろうから、それも単なるジェスチャーだったろうか。

「やっぱり無駄だったろ、ラティオお嬢さん」

「必要な過程だ」

「へいへい、院長は何も言わないだろうが、クルドリスの名代は知らんぜ」

　タンゲレ──骨の巨人が言う。

　再び、砂浜の緊張感が高まっていく。

　ラティオが呼び出した白骨の使い魔たちも、半数以上は残ったままだ。エルゴも拘束されたままの状態である以上、戦況としては分が悪くなったと言っていいだろう。しかも、こちらの情報は高速思考と分割思考によって明るみに晒された。

（数秒先の、未来）

　未来を、アトラス院の錬金術師は独占している。

　そんな相手に、どうやって立ち向かったらいいのか。

　数歩、ラティオが退き、止まった。

　今度、誰かが動き出したとき、それは戦闘開始の合図となるだろう。

　何かが、天空で響く。

　甲高く鋭いそれが、こんな海辺を飛ぶはずもない鷹の鳴き声だと気づくのに、少しだけかかった。

『見ぃつけた』

　おそらく、全員の脳裏に轟いた、その思念。

悪戯っぽく、巫ふ山ざ戯けた調子で、なのに死にそうなぐらいにおぞましい。

「あの……声……」

　エルゴが、震えた。

『はは、まだ覚えていられたか。いや、忘れられなかったか？』

　ラティオが、猛然と振り仰いだ。

「まさか、ムシキ……！」

　それ以上は、誰ひとり反応できなかった。

　師匠も、自分も、凛も、ラティオとタンゲレでさえも。

　いかなる魔術が行使されたのかさえ、まったく分からなかった。

　気づいたときには、拘束されていたエルゴの右頭部が、ごっそりと消滅していたのだ。

「エル、ゴ……」

　自分のかけようとした声もむなしい。

　若者の鼻梁から右上の部位がのきなみ失われ、ぴゅーと噴水のように血が溢れた。ああ、巨人のときと違って、破壊された頭蓋骨やその中身までも見えてしまっていたのだ。生存など考えるも愚かしい。脳をこれだけ失って、生きていられる人間などいまい。

　次の瞬間。

　死せるエルゴの背中から、光の翼のように巨大な幻手が迸った。

＊

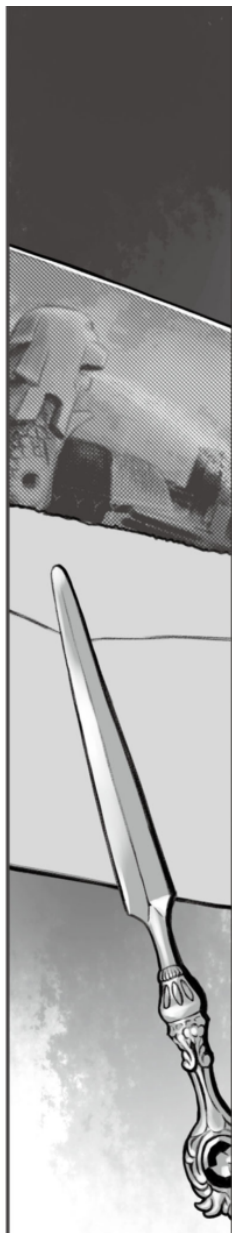
結果だけを、書き残そう。

　数日後、シンガポールより東南の小さな島で起きた、とある奇禍がニュースになった。取り上げたのが三流のゴシップ新聞であったためか、ほとんどの人間には本気にされなかったが、やがてネットの一部では現代のツングースなどと呼ばれるようになる。

　ニュースは、こうだ。

　島の海岸が、隕石でも落ちたように壊滅したと。

　まったく奇妙なことに、その破壊跡は巨大なヒトの手の形をしていたという。

✦幕間✦

—ロンドン。

大英帝国の首都にして、世界に冠たる霧の都。

その中央部から郊外へしばらく車を走らせたところに、スラーと呼ばれる通りがある。近代化の波が断続的だったためか、新旧の建物が不自然にいり交じり、ある種ツギハギめいた印象を抱かせる区画だ。

一般にはさしたる知名度もないこの地域は、実は魔術師たちの街なのだった。

時計塔において現ノ代ー魔リ術ッ科ジが、周辺の土地を買い占めてつくりあげた衛星都市。これでも時計塔十二科では最小とされることから、ロンドンの魔術師たちがいかに深く根を張っているかが想像できるだろう。

その通りの中央に、瀟しょう洒しゃなつくりの屋敷が建てられている。

「いやいやいや！　どういうことだ兄上、しばらく帰らないって！」

その執務室で、ひとりの少女が、一通の手紙を手にしていたのだ。

美しい金髪に、蒼い色の瞳。おおよそ十七、八ほどの年頃で、陶器人形ビスクドールのごとき肌と、それに似つかわしからざる、どこか嗜し虐ぎゃく的な表情が印象的だった。

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。

エルメロイII世の義妹にして、正式なロード・エルメロイの後継者であった。

それが君主ロードを引き継がず、II世に地位を委ねているのは、けして権力に興味がないからではない。むしろ権力の行使も、他人を跪ひざまずかせることも大いに愉しむタイプなのだが、現時点のライネスの年齢や境遇が、君主ロードという責任ある地位に向いていないからだ。

透かしの入った上質の紙を、少女は厳しい目つきで睨み付けている。

「しかも、ご丁寧にエアメールでの連絡。日付は三日前ときた。電話だったら、すぐさま問い詰められるからって考えだろうこれは。私がどれだけ仕事の穴埋めをする羽目になると思ってる！　うちごときの権威で、迂闊な隙を作れば、あっさり君主ロードを剝奪されるぞ。いや、というか、そうされたいからか?!　なかなか時計塔らしい腹芸が板についてきたな、兄上！」

　憎々しげに、唇を歪める。

　すると、近くのソファから相槌があったのだ。

「実際、あの方は、君主ロードなんて地位を早く手放したいようですけれど？」

　ソファに座っていた女性が、紅茶のカップを手に囁いた。

　ライネスよりはやや年上。

　少女時代をいよいよ終え、今にも開花しようとしている頃合いだ。蒼いドレスに包まれた、ほっそりとした肢体。通った鼻梁に伏せられた睫毛。横顔に残った青春の甘酸っぱささえも、彼女の完璧を損なうものではない。浮世離れした縦ロールの髪型は、天工による宝石のカッティングを思わせた。

　ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。

　こちらはエルメロイII世の生徒であった。

　すぐ後ろには、モヒカンの従僕などという、なかなかエキセントリックな相手を控えさせている。スーツ越しにも分かる筋骨隆々とした体軀の持ち主で、おそらくはボディガードも兼ねているのだろうと思わされた。

「そりゃあ、兄上はそうだろう。そもそも権力の喜悦に興味がない。私からすれば人生の楽しみの七割を知らないわけだが、趣味が合わないのは仕方あるまい。本来なら、あと数年ほどで君主ロードのお役御免になるのが、さぞ待ち遠しかったろう」

　あと数年。

そうすれば、ライネスも大学を卒業するほどの年代になる。後見人は必要としても、君主ロードを引き継いでもおかしくない年齢と見られるだろう。

しかし、今の実績からエルメロイII世の継続を望む声はかなり大きいのだ。

「やる気がないことばかりうまくやりすぎて、妙な実績をつくってしまうのは、まあ兄上の悪癖だ。略奪公なんて呼ばれてしまうほどにね」

「貴重な秘法や術式を掠め取っていく、鼠の王なんてあだ名も聞きましたわ。まあ、生徒側からしても否定する根拠はありませんが」

「君の一族も、地上で最も優美なハイエナなんて言われてなかったっけ」

「ですから、同族として正しい評価だとは思いません？」

悪びれもせず、ルヴィアが微笑する。

この場にII世がいたら、胃の辺りを押さえたまま、崩れ落ちそうなやりとりではあった。誰のせいでそんなことになった、ぐらいは叫ぶかもしれない。

ライネスは、軽く肩をすくめた。

「評価は正しい。だからこそ、兄上がここで君主ロードをやめるとなれば、命の危険に晒されるのも間違いあるまい」

君主ロードとして、かかる火の粉を払ってきた結果とはいえ、略奪公などと呼ばれるほど他人の術式を解体し続けてしまった以上、エルメロイII世を恨んでいる者は数えきれないのだ。言ってみれば、それは研究者の貴重な発見を盗んで、勝手に発表してしまうようなものだ。あげく、この論文はどこそこが出来が悪いなどと、論評と改善点まで加えてのける。

こんなやり口を重ねて、暗殺されずに済んだのが、君主ロードの地位ゆえというのも確かなのだった。

鶏が先か、卵が先か。

（……このあたりを問い詰めると、毎度死にそうな顔をするあたりは可愛いんだが）

　つい、ライネスはにまにまと唇をほころばせてしまう。

　そんな少女に、今度はルヴィアが尋ねた。

「あの人が逃げたとは思わないんですの？」

「思わないとも。このまま世捨て人になれるような性質なら、それこそ最初から苦労しないだろう。さて、南国で何があったものやら」

　エアメールを手にして、少女が口にする。

　ルヴィアの眉が、かすかに反応した。

「南国……ですか」

「何か心当たりでも？」

「いえ。ミス・トオサカから届いた手紙が、そういえばシンガポールのものだったなと思い出したんです」

「そういえば、凛のやつ、夏休みで旅行するとか言ってたな。日本から連れてきた従者も、この機会にロンドンに慣れるべきだとかで、置いていったんだっけ」

「ええ、その通りですわ。今のうちにシェロをどうやってあの女狐から引き離すか……」

「ん、君ら、同じアパートに住んでるんだったな」

「運命の出会いですもの！」

　途端、ルヴィアが目を輝かせたのだ。

　夢見る乙女、としか形容しようのない表情で、胸の前にしなやかな指を組み合わせる。もとより彼女の美貌が現実離れしているだけに、ユーモラスな御伽話といった風情が漂っていた。

「この一週間ほど、屋敷で忙しくて、執事の仕事も休みなものですから、シェロの顔を見られてないですが、運命の赤い糸は必ずや私

のもとに彼を届けてくれます。いいえ、赤い糸なんてかぼそいものに頼らずとも、私のもとに引き寄せてさしあげますわ」

　自信に溢れた貴族の横顔は、いっそ獰猛に美しい。

　執務机を挟んだライネスは、いささかならずうんざりした様子で、頬杖をついた。

「君たちふたりに言い寄られる男性は、冥加に尽きるというべきか、はたまた悪魔に魅入られたと同情すべきか、判断に困るね。あれこれ迷走した挙句、ロンドン塔から君と凛が手に手をとって身を投げた、というのは私の耳にも入っているよ。おかげで七月のメアリとか呼ばれたんだっけ」

「あ、あれは、気の迷いによるものです！　だいたい私だけじゃなくて、ミス・トオサカも七月のポピンズと呼ばれてるのだから、イーブンです！」

「うむ、イーブンになったからなんだというのか、私には理解しがたいが……」

　と、ライネスが言いかけたタイミングだった。

「教授ーっ！」

　陽気な呼びかけとともに、扉が開いたのだ。

　今度は、枯れ草色の髪をなびかせた少年であった。

　ライネスとおおよそ同じぐらいの年代で、無邪気な悪戯心をいっぱいに詰め込んだ顔が、キョロキョロと執務室を見回す。

「あれれ、教授は留守ですか！　今日帰りだったんじゃ！」

「フラットか。私も、帰還がしばらく遅れるというエアメールを、先ほどもらったところでね」

　封筒を手に、ライネスが片目をつむる。

　すると、フラットと呼ばれた少年は、うーん残念と指を鳴らした。

「せっかくルヴィアちゃんのところの執事くんから、日本製のプレミアレトロゲームが手に入ったのに」

「シェロから?!」

「英雄史大戦のプロトタイプになったオフライン時代のコンシューマー版ゲームだから、教授が凄く喜ぶやつだよこれ！　日本のタイガーだとかいう人から、特殊ルートで入手したんだって。ああ、でも凛ちゃんはルヴィアちゃんには話すなって……」

　あ、と大きく口を開いたまま、フラットが手で塞いだ。

　ルヴィア本人がそこにいることに、直前まで気づいてなかったらしい。ゆらりと立ち上がったルヴィアは、ぞっとするほど優しく唇をほころばせた。

「その話、ゆっくり聞かせてくださるかしら……？　ミス・トオサカが何か？」

「あ、いやいやいやいや！　ルヴィアちゃん、タイガーっていうのはきっと放し飼いにしてるペットか何かで、凛ちゃんが君にひた隠しにしてる執事くんの個人情報とは関係ないと思うよ？　実際俺もルヴィアちゃんに親戚とか友達知られるのは買収されそうで怖いっていうか今本当に怖いのは、俺を掴み次第マンジガタメって技をかけてきそうなその重心移動なんだけどね？」

「あら、キャッチアズキャッチキャンよりも、呪いガンドで撃ち抜かれるのがお好み？」

　じゅっ、とフラットの隣の壁が焼け焦げた。

　ルヴィアのガンドであった。圧縮された呪いは物質的な効果さえ持っていた。

　あくまで美しい微笑を浮かべたまま、優雅に近づいてくるルヴィアを前に、少年は印形をつくり、こう叫んだのだ。

「干渉開始プレイボール！」

　焦げた壁の『影』が、ぐにゃりと歪んだ。

　それはたちまち、フラットと同じ容姿を持った複数のヒトガタと

なって、ルヴィアの四方に立ち塞がったのである。

「また、ろくでもない新型魔術を！」

「ふっふっふ、ガンドを逆用した内的干渉ハッキング魔術。どれが本物か分かるかな？」

　声までまったくの同一で、人数分のエコーがかかる。

　しかし、

「……今、逃げようとしている貴方でしょう！」

「なんで分かったの?!　ええい、こうなったらルヴィアちゃんを足止めするんだ、第二第三第四第五の俺！」

　少年の指令と、一閃のどちらが速かったか。

　四人のフラットが、ルヴィアの放ったラリアットによって、残らず薙ぎ払われたのだ。

「まさかの力技?!　というか、どこかの市長ばりのラリアット?!」

　叫びながら執務室を脱走するフラットを、野獣のごとくルヴィアが追う。

　廊下に炸裂する魔術と格闘の衝撃。

　あげくに、いつもの騒ぎが始まったぞと、現代魔術科の生徒たちが次々と野次馬根性で駆けつけ、勝手に応援し始める。

「……やれやれ」

　喧騒を聞きながら、ライネスはため息をついた。

　数年前に比べても、エルメロイ教室と現代魔術科は大いに発展し、変化してきた。

　遠坂凛という女生徒は、まさにその象徴だろう。極東からやってきた宝石魔術の爆弾。彼女の連れてきた従者も含めて、時計塔のごく一部はさながらスラップスティックのコメディ映画じみた騒動を、毎月のように引き起こしている。

そして、もうひとり。

　この数年、いつもII世の隣に寄り添っている、内気な灰色の少女を思い出す。

　ほぼ同じだけの時間、ライネスだけが先に成長しはじめてしまっている──ひとりだけ取り残しはじめてしまっている、大切な友達を。

「……君が、私の背丈や体の変化を、こっそりと気にしているのは知っているさ」

　ほんの少し、優しい声で、ライネスが呟く。

　エルメロイ教室でも、彼女の変化のなさについて気づく者は増えてきた。口にはせずとも、雰囲気で伝わる。エルメロイ教室は原則四年で卒業するので、たいていの相手が隠しきれなくなる前にいなくなるのは幸いだったろうか。

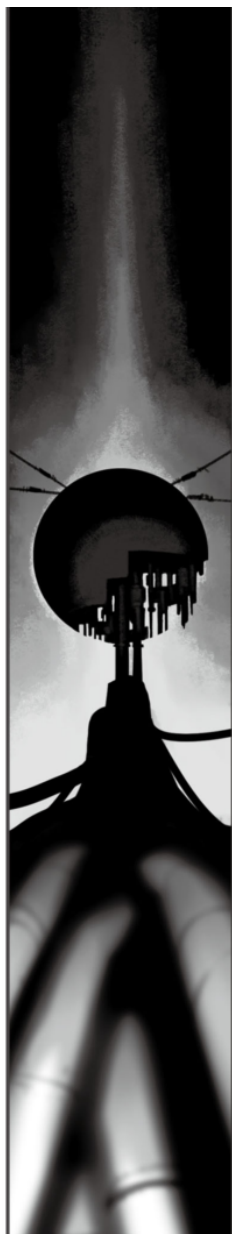
　あの兄が、現状についてあれこれ悩んでいる節が見受けられるのも、同じ理由だろう。魔術師はえてして身内に甘いもので、あの兄は時々あまりにも魔術師らしい魔術師なのだから。

「兄上がいくら悩もうが苦しもうが構わないが、どうにも君が悲しむのだけはやりきれない。……さて、またぞろ妙な事件に巻き込まれてなければいいが」

　指の間に手紙を挟み、南国に思いを馳せて、ライネスは口にする。

　執務室の電話が鳴ったのは、ちょうどその時だった。

# 第三章

1

　海を、見ていた。

　波が寄せては返し、返しては寄せる。

　いつまでも果てることのない繰り返しを、彼の瞳はただぼんやりと映していた。

　おなかが、空いている。

　こんなちっぽけな身体なのに、海をまるごと飲み干しても足りない気分だった。まるでおなかの中に、鬼かなにかが棲んでいるようだ。ひたすらに飢えているその鬼が、冷たい叫び声をあげているのだった。

　ひもじいよう。

　ひもじいよう。

　ひもじいよう。

　ひもじいよう。くるしいよう。

　ろくに動きもしない身体で、その叫びだけが強く渦巻いている。へその上あたりがずっと狂おしく、膝を抱えた手に、ますます力を込めるばかりであった。もはや己の内側はどうしようもない飢えだけに独占されており、自分自身と飢えとの区別さえつかなくなっていく。これほどまでに熱く、黒く、煮えたぎった欲情マグマが己でなければなんなのか。

　遥か彼方まで広がる海を前にしながら、意識はただ己の内側にのみ向けられている。思考の自食作用オートファジーを行うように、自分自身が少しずつ小さくなっていく。己が飢えで、飢えが己で、ただひとつの小さな心臓に還っていく。

　いや。

もうひとつだけ、あった。

　飢えの底に、今にも消えそうなほど、かぼそい光が瞬いていたのだ。

　――寂しい。

　誰もいない。

　ここは静かすぎる。

　風と波の音しかしないなんて、あんまりだ。

　どんな感情も時間の概念も、狂おしい飢えの中に溶けていって、それでも飽和してしまった残留物みたいに、この寂しさだけが揺よう曳えいしていた。嵐の中で取り残されてしまった難破船のようだ。原形などとっくに失っているのに、残骸だけが波間をたゆたっている。

「……エルゴ」

　誰かが呼んでいた。

　母親だろうか。

　切なく、胸が震えた。

　その柔らかな声音。その愛おしい響き。

　いつのまにか、三つの影が、若者を取り巻いていたのだ。

「どうやら、失敗だ」

　ひとりめの影は、陰鬱にうつむいていた。

　どこか未来的な雰囲気を感じる服装をしていた。神経質そうな視線はこちらを責めているのではなく、己の不手際を恥じているように思えた。

「ああ、お前はいい。お前はいいなあ」

　ふたりめは、女だった。

ひとりめと真逆の、原始の世界からやってきたような相手だった。

　瞳は金こん色じきで、その周囲は赤い。真紅の炎の中で浮いている、黄金の結晶のようだ。

　三つの影の中でも、圧倒的な生命力を感じさせる女。彼女が視界にいる間は、刹那でも飢えを忘れられた気さえした。

「失敗作に、余計な情報を与えるな」

「黙ってろよ、クルドリス」

　と、雪のごとき牙が剝かれた。

「妾あたしが、こいつを……と決めたんだ」

　己が世界の中心にあると信じて疑わぬ、いいや、己こそ世界そのものと断じるほどの傲ごう岸がんさが、その言葉から溢れていた。

　そして三人目は、何も語ろうとしなかった。

「…………」

　プラスもマイナスもなく、こちらの一挙手一投足を見据えている。

　単なる観察対象への視線ともまた違う。その眼差しには、徹底して自己という概念が欠けていた。

　星雲の顔をした絶対零度と正対しているようにすら感じた。

　さっき、こちらの名前を呼んだのは、三人のうちの誰だったのだろう。

（僕は……）

　思考が、何らかの形を取ろうとしたときだった。

「エルゴ」

　また、誰かが呼んだ。

かすかに、葉巻の香りを嗅いだように思った。

　こちらに手を伸ばす黒髪の男性と、その隣に寄り添う灰色の少女が……

2

「……グレイ」

　その声に、自分は意識を取り戻した。

　うつらうつらとしていたのだ。

　慌てて瞼をこすると、そこはコンクリートを打ちっぱなしにした小さな部屋だった。アナログの壁時計は午後の二時を示している。その時計とベッドとソファのほかは、安っぽい観葉植物と中華風の掛け軸ぐらいしかない殺風景さだが、それがかえって落ち着く気もした。

　多分、葉巻の香りのせいだと思う。

「疲れたか？」

「だ、大丈夫です」

　かぶりを振ってから、付け加える。

「夢を、見ていた気がします」

「どんな夢だね？」

「もう覚えてないんですけど……海のそばで……お腹が空いていた気がします」

　普段、どちらかといえば少食な自分なのに、夢の中では海を飲み干しても、まだ足りないほどの飢餓を感じていた。

　窓際に座った師匠は、何やら難しい顔をして、「そうか」とだけ囁いた。その唇に咥えられた葉巻から、白くて細い煙の筋がすぐ窓の外へと流れていった。

　自分は、目の前のベッドに視線を戻し、横たわったエルゴの汗を拭う。

苦しそうに表情を歪ませる赤毛の若者は、もう三日間こうして眠っているのだった。

　不思議な感情が、胸の内に湧き上がっていた。

（……もしも）

　もしも、自分に弟がいたら、こんな気分なのかもしれない。

　それは、ひょっとしたら師匠にとっても。

　もちろん、現役の生徒に関しては何かと手厚い──いっそ甘いと表現しても、差し支えない師匠である。だけど、こんな風に師匠とふたりで、誰かを世話するのは初めてのことだった。

（……いや）

　一度あったな、と思い返す。

　あれは師匠に連れられ、ロンドンに滞在するようになって間もない頃だ。

　しょっちゅう師匠の部屋に忍び込んでは悪戯をしていた一匹の猫が、ある日、車に轢かれて道に転がっていたのだ。師匠の魔術ではもはや治癒することもできず、しかし、重傷を負った猫がついに息を引き取る最期の一瞬まで、夜を徹して、師匠はずっと抱いていたのだった。

　──『こんなのは気の迷いなんだ』

　その言葉を、覚えている。

　自分の胸に仕舞われた、いくつもの記憶の断片の中でも、それは特別だったと思う。

　──『だいたい私が優秀な魔術師だったら、この程度の怪我はあっさり治すことだってできたはずだ。いつだって間に合わなくて、必

要な力もないのが私なんだろう』

　多分、師匠にとって、最も起源に近しい台詞。あれから数年が経過した今でも、悔しそうで、悲しそうで、しかし何ひとつ諦めてはいない抑揚を、はっきりと記憶している。

　あの日に似ている、と思った。

　人と猫をだぶらせるのは、おかしいかもしれないけれど。

「エルゴさんのことを、生徒だって言ってましたね、師匠」

「そういう約束をしたからな」

　と、葉巻を指に挟み、師匠が答える。

　少し悩んでから、思い切って、こう尋ねた。

「先生を続けることにしたんですか」

「とりあえず、この旅の間はね」

　ほっ、と胸を撫で下ろす。

　正直、今の質問は、崖から飛び降りるぐらいの勇気が必要だった。

　でも、どうして自分は、師匠が講師をすることに、こんなにこだわっているのだろう。

（……それが当たり前だと、どうして思っているんだろう）

　どんな仕事をしていようが、師匠は師匠だ。自分も自分だ。自分が変わるわけでも──変われるわけでもないというのに。

「グレイ」

　不意に、師匠が口を開いた。

　その意図するところを察して、視線を上げる。

エルゴの瞼が、ぴくりと動いたのだ。すぐに、それは何度か続いて、内側の瞳を外気に晒した。

「エルゴ、さん」

「……グレイ、さん？　先生？」

　しばらく、自分と師匠とをぼんやりと見やり、エルゴは瞬きをしていた。

　やがて、小さな呻きとともに上半身を起こして、

「ここ……は……？」

　と、尋ねた。

「安心したまえ。時計塔シンガポール支部から紹介された部屋でね。見かけはともかく、魔術的な防備もされている」

　師匠の言葉を受けて、ようやく若者はこれが現実と悟ったらしい。

　一瞬、瞳に安堵の気配が生まれるや、すぐさま詰め寄ったのである。

「あの島は！　凛や島の子たちは！」

「落ち着きたまえ」

　柔らかな声で言って、師匠が葉巻を灰皿に置いた。

　ゆっくりとベッドの近くに歩み寄り、話し出す。

「ひとまず子どもたちは無事だ。ミス遠坂がこちらに駆けつける前に逃がしてくれていたらしくてね。あの島自体、いつ他の海賊に踏み込まれても逃げられるように準備していたようだから」

　実際、あの後の凛の行動は、びっくりするぐらい手際が良かった。

　アトラス院の錬金術師━ラティオの襲撃に対応した直後には、すでに子供たちに避難を呼びかけており、シンガポールに戻った際も全員の無事を確認していた。

若者を見下ろしたまま、師匠は言葉を継ぐ。

「問題は、君の体質についてだ」

「……何の、ことです？」

　まだ、幾分か朦朧としているエルゴの表情が、緊張に硬くなる。

　おそらく言葉の意味は理解せず、しかしその重みだけは受け止めてしまったのだ。

「君が死んだことだ」

　すっ、とII世の指がエルゴの額を指す。

　赤い髪の下の、つるりとした白い肌には、傷ひとつなかった。

「ムシキと呼ばれた何者かの襲撃によって、頭部の三割ほどを喪失。たとえ幻想種であろうが、まず生存は不可能な負傷だ。一部の死徒などに例外はあるとしても、君のそれはまったく異なる」

　すぐに、その続きを師匠は口にしなかった。

「昏睡状態から目覚めたばかりの君に、話すようなことではないかもしれないが」

「教えてください！」

　エルゴの方が、師匠の腹部を掴んだのだ。

　仕立ての良い麻のシャツに、浅く皺が寄った。

「僕に、何が、あったんですか」

　一言ずつ区切るような—どうしても逃げられない恐怖に対して、必死に視線を向けようとするような態度に、師匠はわずかな沈黙の後、答えを告げる。

「君の幻手が、暴走した」

　島を襲った奇禍は、エルゴの身体から発した光によるものであった。

光は、ひとつの巨大な手となった。

それこそ神話にでも登場するような、信じがたいサイズの代物だった。上空を覆った巨大な手は、そのまま大地を握りしめた。すると、光の指に触れられた土壌はたちまち崩れ去ったのである。

つまり、巨人の手によって、島の半分が抉り取られたのだ。

自分たちは奇跡的に、指の間に潜り込む形で、被害を免れたのだが……それは、本当に奇跡だったろうか。

「死に瀕した宿主を守るために、ということだろう。あのムシキとか言われていた鷹の使い魔が何をしたかは分からないが、君を殺せば、こういう結果になるというのは予見していたはずだ。暴走の後、君の体は完全に復元していたのだしね」

「僕の……腕が……」

肩口を、エルゴが見やる。

正体不明だった幻手。己の体についていたモノが、怪物だったことにやっと気づいたかのような表情だった。

「三人の魔術師が君をつくったというが、その関係者には間違いあるまい。ラティオ・クルドリス・ハイラムが、おそらくその末裔であるように」

骨の使い魔を操り、骨の剣を振るった女を思い出して、自分も口を挟んだ。

「あの、師匠、アトラスの六源というのは」

「アトラスの六源は、アトラス院において最も古い家系とされている」

師匠が、かすかに眉をひそめる。

「だが、アトラス院自体、外部との接触が多いわけではないんだ。私も六源の名前は知っているが、規格外だったあの院長を除けば、実際に会ったのはこれが初めてでね」

踵を返して、窓際に寄った師匠が、先ほどの葉巻を再び指に挟ん

だ。まだ火の消えていなかったそれを味わい、音もなく吐き出す。

　けだるげに煙が漂う。

　どこか、ため息にも似ていた。

「ただ、ほとんどの場合、アトラス院の錬金術師はそれぞれが予測した世界の滅びに抗うため、研究を続けているのだという。君がクルドリスの研究と関連しているならば、彼女の予測した滅びは君の謎と紐付いているのかもしれない」

「世界の滅び……」

　あまりにも突然出てきた話に、ぴんとこなかった。

　こんなちっぽけな部屋で話されるには、いささか不似合いだったかもしれない。ただ、時計塔の魔術師が根源を目指すということと、アトラス院のその動機はどこか通じ合っているようにも思えた。いずれは滅びるのだから絶対なるものを探す時計塔と、その滅びに抵抗しようとするアトラス院。

　魔術師にしても錬金術師にしても、ひょっとして彼らはとてつもなく不器用な人々なのではないかと、そんな想いが一瞬頭をよぎったのだった。

　そして、

「……僕は」

　エルゴは言って、一度詰まった。

　それでも、必死に吐き出すように、続きを口にした。

「僕は、誰なんですか」

　あまりにも、その声は悲痛だった。

　あの島で、眠そうに子どもを抱きしめていた若者は、己の体を抱いて震えていた。

　──『いいえ、お日様の匂いです』

その声が、どうしても耳から離れてくれなかった。

　あんなにも、彼は嬉しそうだったのに。

　世界のどこにでもあるべき、世界のどこにでもありふれているはずの幸せを、南国の海で享受していた若者だったのに。

「……私にも、分からない」

　沈鬱な声で言って、師匠が顔をあげた。

　葉巻の煙を絡めとるように、人差し指が持ち上がる。

「だがひとつ、君に起きている現象についての仮説はある。……おそらく君のそれは記憶喪失じゃない」

「……どういう、ことです？」

「あえていえば、記憶飽和とでも呼ぶべき現象だ。いいかね、これは単純な情報量の問題なんだ」

　師匠の唇が、語り続ける。

　いつもの講義のように静かに、死病を告げる医師のように穏やかに。

「ひとりの人間が持つ情報量と、神と呼ばれるほどの存在が抱える情報量は比べ物にさえならない。一握の砂と、ひとつの山を比較する者などいないように。世界中のスパコンを掻き集めても足りはしないだろう。もしも、それを可能にするとしたら、パソコンの圧縮プログラムのように、神性を固く、小さく、封じ込めているに違いない」

　すっ、と突き出した両手を器のカタチにまるめ、合わせる。

　巨大なものを、小さな間かん隙げきに封じ込めてしまうように。

「これ自体は珍しい術式じゃない。世ほ界しほどに大きなものを、地球儀ひとつに押し込めるのは人間の得意技だ」

　まるまった両の手が、惑星に似ている、とふと思った。

多くの神話で、惑ほ星しも神に見立てられてきたのだった。

「同時に、神を降ろすのも、世界中にある伝承だ。とりわけ巫女は神の言葉を受け取るものとして、ほとんどの文献に記録されている。だが、どのような巫女であれ、常時神と対面し続けるわけではない。その言葉に触れ続けるだけでも、人間という器には耐えられないからだ。なのに、神を喰らったならば？」

師匠が問いかける。

あのとき、ラティオと話していたヨモツヘグイ。黄泉の食事。神の血肉。

「たとえば、熊を山の神とみなして、皆で肉を分け合うなどという儀式もある。神に捧げた生贄の心臓を喰らったり、血を飲んだりという風習もある。ごく一部の権能を模倣するという意味なら、時計塔の降霊科ユリフィスやこのシンガポールで有名なタンキーと呼ばれる魔術でも、極めた魔術師ならばやってのけるだろう。しかし、あの島を破壊した手はそんな部類ではない。現代において、あれほどの威力をやすやすと発揮する神秘となれば、それは単なる見立てや、概念上の存在ではありえないからだ」

立て板に水とばかりの言葉とともに、今度は胸の前へ右手をあげた。

「手とは、進化だ」

開いた手を、もう一度師匠が握りしめる。

「人が人たりえたのは、この手があったからだ。進化論にはさまざまな学説があるが、霊長類の中でも人間が特殊な位置になりおおせたのは、この手の形状によるものだという論は根強い。それは人間の手が洗練されたアシューリアン石器や弓をつくり出したからというだけではなく、そういった器用な者以外が淘汰圧で消えていったからというだけでもない。その際、手に受ける圧力や、自然と行われた指の連動から、我々に注ぎ込まれてきた情報が、進化に何らかの影響を与えたのではないかということだ」

熱弁に、つい自分の手を見つめてしまった。

普通、手といえばつくりあげるものだとか、破壊するものだとか、そういう印象が浮かぶだろう。幾多の武器や道具をつくりあげ

て獲物を狩り、土器や農具をつくりあげて生活を改善し続けてきた手は、まさに人類の歴史の象徴とも思えるからだ。

　だが、師匠はどちらでもなかった。

　目や鼻と同じ、いやそれ以上の感覚器として、手を捉えていたのだった。人体の中でも、手が特筆して神経の集中する場所であることを考えれば、けして物珍しいだけのアイディアでもなかっただろう。

「言い換えれば、手こそは神であったのではないか、という説だ。人をつくったものが神であるというならば、この手こそがそれだ。ああ、神託程度ならば、人間は受け入れられるだろう。神の依代になることもできるだろう。権能の一部を疑似的に再現することも、あるいは可能かもしれない。だが、神の手を扱えるようにはできていない。それは手というものが、単なる力の具現ではなく、極めて重大な感覚器でもあるからだ。神の名に足るほどの膨大な情報を受け止める──受け止め続ける器官だからだ。だとすれば、それほどの情報を注がれてしまった場合、人間としての記憶は必然として押し退けられる」

「…………」

　エルゴは、絶句したままだった。

（……海と、コップだ）

　自分が想像したのは、コップに海洋すべての水を注ぐところだ。湖ひとつ程度に減らしたところで、器に収まらないことには違いあるまい。神の巨大すぎる手は、それだけの情報を掬い上げてしまう。

　ひとつの種の、進化にも匹敵するだけの情報を。

「おそらくは三柱もの神が君の中にいるのが、一体どのような裏技を駆使してのものかは分からない。しかし、封じ込めているだけならばともかく、原典としての神の性能を発揮するのであれば無事ではすまない。いいか、君に起きている現象は単なる依代ではない。あの巨大な手から考えれば、神霊との融合ですらあるまい。原典としての、生身の神を現実に孵化させつつある最中なんだ。ならば、神としての性能を発露するほどに、君という宿主を押し退けていく

のは自然の理だろう。……あの手は、そういうモノだ」

　厳かに、師匠は結論する。

　島を破壊した大いなる手に、エルメロイII世の下した鑑定がこれだった。

「ほどなくして、君の記憶と人格は失われる。君の内側の神が、まず君を破壊する」

　ぞくり、と背筋に冷たいものが走った。

　恐れだけではない。

　同情や、哀れみともまた違う。

　ただ、なんてそれは……自分と似ているのだろうと。

「師匠……」

　茫然と呟いた自分に、師匠は小さくうなずいた。

　その仮説に辿り着いたのは、やはり単なる偶然ではない。エルゴが抱えている謎と神秘は、どこかしら自分のそれと似通っている。

　しばらく、エルゴは動かなかった。

　噛みしめるようにして、うつむいていた。

　自分の右手の甲に、そっと左手をあてて、呟く。

「なすべきこと、やるべきことを考えてもらうって、先生は言いましたね」

「ああ、言ったとも。恥ずかしながら、半分は自分に言ってたようなものだが」

「自分にですか？」

「そうさ」

　はにかむように、師匠が言う。

手元の灰皿で、葉巻の表面を指先が撫でていく。

「私には、私の戦場があった。十数年の時間をかけて、ある程度は形を成したと言っていいだろう。少なくとも、私をデータだけで知る者は、そんな風に評価するだろうさ。だが、ひとつ何かを成せたなんて勘違いをしてるからこそ迷いも生じる。……これは、本当に私のやるべきことだったのか、とね」

　足元に、言葉が落ちる。

　窓に吸い込まれなかった重い煙とともに、しばし床をたゆたった。

「僕に……やるべきことなんてあると思えますか？　先生も、僕の記憶と人格なんて、ほどなくして消えると言ったのに？」

「わからん」

　ひどく誠実に、師匠はかぶりを振った。

「こうだと真理を示せれば、格好いいのだろうがね。君に答えはやれない。そんなものは私も持っていない。なすべきこと、やるべきことなんて、いつだって迷いっぱなしだ。これで良かったんだなんて、死の間際にも言えたものかどうか」

　雨に打たれた犬みたいに、師匠も視線を落としていた。

　この人にとっても、真摯に挑み続けた問題に相違ないのだろう。自分が死ぬまでの時間をリアルに想像して、はたして辿り着けるかどうかと、ずっと自問しているのだろう。

　顔をあげ、師匠はもう一度エルゴへと歩み寄った。

「だが、約束しよう。私は君と一緒に迷うと」

　手を、伸ばす。

　つきつけられた白い指に、エルゴはしばらく停止してしまっていた。

　かまわずに、師匠は言葉を続けた。

「君と一緒に考え、君と一緒に悩み、君と一緒に葛藤しよう」

「……僕は」

　声が詰まった。

　それでも、何とか吐き出すように、おずおずとエルゴが話し出す。

「僕は、やることが、なかったんです」

　師匠は手を下ろさない。

　ともすると滑稽な姿のまま、しかし、会話は閉ざされない。

「あの子どもたちが無事だというのに、ほっとしました。帰る場所なんてない僕より、ずっと大切な人たちだと、思ってたから。あの島で、凛やあの人たちを手伝って、一生が終わっても別にいいと思ってた」

　若者の内側が紐解かれていく。

　やることがなかった、と。

　それは、誰より自分の胸に響いた。

　あんなに楽しそうに子どもたちと戯れ、子どもたちからあんなに慕われていた若者が、それでも秘めていた気持ち。

　いいや、誰でもそうなのかもしれない。

　どれほどに明るく振る舞っていたとしても、その底にはひんやりと冷たく、仄暗いものを、誰でも抱えているのではないか。

「間違いたい」

　ぽつり、とそんな言葉がこぼれた。

「追われて、殺されかけて、ひょっとしたら本当に一度殺されてしまって……思いました。あそこで子どもたちと過ごしたのは正しかったかもしれない。凛が僕を子どもたちと遊ばせていたのは、極めて正しい措置だったかもしれない。でも、違うんです。僕はきちんと間違いたい。間違いもしないうちに、消えてしまいたくない。

それでもいいんですか？」

「……正しい答えと間違った答えを、どうして分けられるんだね？」

　優しく、師匠が言ったのだ。

「私だって、いつも大切なことを間違いっぱなしだ。だけど、それは挑戦をした数だろう。人を何度も怒らせて、失望させて、それでも私たちは自分なりの答えを精一杯掲げていくしかない。正しいか間違ってるかなんていうのは、多分その結果でしかないんだよ」

　多分、と自信なげに付け足したのが、いかにも師匠らしかった。

　差し出されたままの手を、エルゴが見やった。

「間違って、いいんですか」

「どうだろうね。私の間違いに怒ってる人は多いさ。だけど、私は進みたい。ほんの一歩でも進んだのだと、実感を持って死にたい。正しすぎて身み動じろぎもしない人生なんてまっぴらだ。……どうだね？　君の教師がやれそうかな？」

「この旅限定の、教師と生徒でしたっけ」

「その通りだ」

　細い手と、エルゴのしっかりした手が触れ合った。

　握手とともに、

「よろしい。契約成立だ」

　と、師匠が微笑した。

「ではグレイ、出かける準備はいいか」

「あっ……は、はい！」

　突然話しかけられて、慌ててうなずいた。

　なぜだか目の端に涙が滲んでいて、そっと拭う。自分の後輩にかけられた言葉で、勝手に感情移入してしまっていたなんて、いささ

か不覚というべきだろう。

　ベッドの若者が、瞬きする。

「って、どうするんですか」

「エルゴも、動けるならついてきたまえ。わけもわからぬままに追われてきたんだ。ここらで攻守逆転といこう」

　葉巻を咥え、近くの帽子を手に取った師匠を、エルゴは改めて見上げた。

「逆転って、そんな手段が」

「もちろん、あるとも」

　と、黒髪の魔術師はうなずいた。

「これでも、君主ロードと呼ばれる魔術師なんだからね」

3

　外に出ると、南国の眩しい太陽が自分たちを迎えた。

　師匠は軽く帽子を押さえ、なるだけ直射日光を受けないよう、日陰を選んで歩いていく。単にひ弱な体質によるものだろうが、そうしているところは、なんとなく吸血鬼っぽく見えなくもない。

　街の中心ともいえるシンガポール川の橋を、南に下っていく。

　途中で横あいに目を向けると、大小、さまざまな種類の船が水面を渡っていった。光の欠片を拾い集めるかのような船舶の集合と離散は、まさしくこの街の血液の流れなのだろう。ひとりひとり、ひとつひとつ、まるで異なる人々と船たちが行き交い、アジア全体でも稀な都市国家を形成しているのだった。

　やがて橋が終わる頃、蒼い空に屹立した高層ビル群と、その手前のシンプルな水上公園に視線が移った。

　一際目立つのは、シンガポールのシンボルともいえるマーライオンである。

　人魚マーメイドと獅子ライオンの融合したその姿は、多民族が賑々しく活動し続けている街にふさわしく思えた。

　そして、石像の近くには、ひとりの女性が待っていたのだ。

　黒い髪が、光る風になびいている。

　公園を歩く人々には、もちろんアジア系が一番多いのだけれど、この相手はやはり特別な存在感を放っていた。まるで、歴史を重ねた宝石のように、風景から浮き上がってくる。

　あの海賊の島でも、このシンガポールでも、けっして変わらない彼女の本質。

「遅いですよ、教授」

いささかトゲのある言い方で、遠坂凛が唇を尖らせた。

「すまないな。エルゴとの話が長くなった」

「って、エルゴ、もう大丈夫なの?!」

　やっと気づいたらしく、すぐ後ろの若者へ、彼女が話しかける。

「うん。なんとか」

　はにかむようにして、エルゴは頭を掻いた。わしわしと揺れた赤毛が、やはり犬っぽく見えた。

　改めて、師匠が問う。

「頼んだ件は、どうだったかね」

「すぐ終わりましたよ。言伝するだけでしたもの。電話で済んだんじゃないですか？」

「それもしてもらったが、最後の一押しは顔を合わせてが肝要なんだ。馬鹿馬鹿しいと思わないではないが、とりわけ魔術師の世界はそういう面倒さで成り立っている。この場合、アジア系の君の方が、話もしやすかったろうしな」

「言っておきますけど、わたし、大陸の魔術組織とはほとんど接触ないですからね？」

　凛の言葉に、師匠の眉がぴくりと動いた。

「む。てっきり、君は思想魔術にも造詣があるかと思っていたが。護身術の授業で使っているのは八極拳だろう？」

「あれは知り合いの神父が教えてくれただけで、わたしと大陸は関係ないです」

「なるほど。神父と八極拳なんて組み合わせも珍しいが。機会があれば、会ってみたかったな」

「先生とはきっと気が合いませんよ。もういませんし」

　力強く断言して、彼女が身を翻す。

師匠と一緒に、再び、南に向かって歩き出した。

　橋から見えていた高層ビル街であった。ある種デジタルな風景の中を、ビジネスマンたちがきびきびと闊歩している。林立した近代的なミラービルが太陽を反射して、真っ直ぐな南国の道はなおさら光に溢れかえっていた。

　光の道。

　そんな形容が、頭にふっと浮かんだ。

「このシェントン・ウェイは、シンガポールにとって最も重要な道と言っていい。とりわけ七十年代に政府機関や商業施設がおかれてからは、アジアのウォール街として俄然注目を集めるようになった。最近ではＩＴ産業の企業なんかもここに居を構えているな」

　目を細めて、師匠が言う。

　それから、ふっと携帯電話の時間を見下ろして、

「時間通り。シンガポールは正確だな」

　と、呟いた。

　ビルの傾いた影の中に、自分も見覚えのある相手が佇んでいたのだ。

　この南国の夏でも、ぴしりとブリティッシュスーツを着込んだ壮漢。自分がシンガポールに派遣されて、最初の頃に挨拶したことがあった。

「……確か、支部長さんの」

「時計塔シンガポール支部、支部長のクリスです。昨日エルメロイII世から申し出を受けたときには驚きましたが」

「申し訳ない。急ぎだったのでね」

　何やら、師匠は細々と手回しをしていたらしい。時計塔シンガポール支部は、このシェントン・ウェイの企業ビルに偽装しており、自分も滞在中に何度か顔を出したことがあったのだった。

支部長は、アタッシェケースをそのまま差し出した。

「鍵はこちらです。お受け取りくださいませ」

「ありがとう」

　受け取った師匠が会釈すると、男は視線を道の向こうへとやった。

「次はあちらとなりますが、鈴は持ってらっしゃいますか」

「あ、わたしがもらってます」

　凜が申し出て、それであっさりと支部長は踵を返した。

　改めてシェントン・ウェイを少し進んでから、師匠は西向きの道へと進路を変えた。

　建物の背がぐっと低くなり、その分空が広くなる。びっくりするぐらい蒼くて、おかしな話だけれど海と紛う。どうかすると、逆しまに落ちていってしまいそう。

　ほんのひとつ道を変えただけなのに、まるで別の街のようだ。

　歩を進める度に、その違和感が増すのに気づいた。

「何だか、ここはおかしいです」

　と、自分は口を開いた。

「熱いのと冷たいのが……熱湯と冷水とが、ピタリとくっついているみたいです」

「ほう。さすが我が内弟子」

　珍しく褒められて、頬が熱くなった。

「からかわないでいただけますか」

「いや、本当に感心したんだ。エルゴはどうかな？」

　師匠に尋ねられて、若者がきょろきょろと周囲を見渡す。

「ええと……なんだか、ざわざわする感じはありますけれど、それ以上は」

「なるほど、霊的な感受性においてはグレイの方が上か」

　納得したように言って、視線をあげる。

　街の色が、またがらりと変わった。

「今までのシェントン・ウェイは、時計塔シンガポール支部の範疇。この先は」

　師匠が視線を向けた先は、赤と黄を主軸にした、歴史的な館や看板が立ち並んでいた。

「チャイナタウン……」

「シンガポールにいくつかある中華街でも、いまや一番由緒正しい地域だな。以前は街のどこもこんな感じだったが、私が最初に訪れてからの短い期間で、目まぐるしく変わってしまった」

　急に、道の幅が狭くなる。

　人の密度が高くなり、雑多な音とにおいが周囲を取り巻く。

　たとえば、大にん蒜にくをきかせたチキンライスや、ふかふかの饅頭の甘い香り。ここに鶏肉を威勢よく揚げる音や、包丁が海老や大根餅をぶつぎりにしていく音も重なり、自然と食欲をかきたてられてしまう。

　いっそ猥雑と言ってもよい賑やかさの中で、観光客向けのお土産と思しい仮面や提灯、風鈴や扇子などもあちこちに飾られている。

　そのひとつに、意識を奪われた。

「師匠、あれは」

「ワヤンの仮面だ」

　チャイニーズ・オペラ。

　ホーカーセンターでひと差しの舞とともに手紙を渡されたことから、師匠と自分はあの島へといざなわれたのだった。

「あの演者が誰だったのかも知りたいところだが、後回しだ。シンガポールの歴史の中で、ここのチャイナタウンが残ったことには意味がある。──凛」

「はい」

　うなずいて、凛が鈴を鳴らしたのだ。

　響き渡った涼しい音とともに、ふっと横合いから風が吹いたのだ。

　瞬き、してしまった。

　道の向こう側に、新たな館を発見したからだ。

　だが、そんな館は、ついさっきまで見当たらなかった。

　確かに、シンガポールには奇妙な見かけをした建物が多い。とりわけこのチャイナタウンは、人を驚かせるのが主体ではなかろうかと思うほど、あちこち意匠を凝らされていた。

　しかし、こんな巨大な施設があれば、すぐに気づいたはずだ。

　ひどく、ねじれた建築物だった。

　赤と黒の、螺旋を描いた楼たかどのとでも、言えばいいか。

　ふたつの尖塔を主軸として、増築し続けた古いホテルという印象だが、全体としてのカタチは不思議なほど統一されている。長い時間をかけて変化し続けてきたのに、すべての変化が最初から計画されていたかのように読み取れる矛盾。

「螺旋館・新加坡シンガポール楼」

　師匠が囁いた名前に、自分はぴったりだ、と考えてしまった。

「思想魔術の主だった組織はふたつだが、螺旋館は支部も含めて、何らかの形で螺旋の形状を取り入れている。建物も名前通りなのは、最もポピュラーなタイプだな」

「ふたつ、あるんですか」

「ああ。とはいえ、もうひとつが人界にかかわることはまずない。

あれは仙人の領域だからな」

　仙人と言われても、昔大英博物館で見た、白い髭を何メートルも伸ばしたお爺さんの絵ぐらいしか浮かばない。

　何より、ロンドンにおいては、魔術組織といえば時計塔の他にはなかった。

　もちろん、時計塔の本拠地だけあって、十二科がそれぞれ別の学術棟を保持していたのだが、こんなすぐ近くに別の組織があるとはまったく想定外で、どうやって受け入れたらいいのか、分からなかった。

「どうやら、お出迎えだ」

　と、師匠が言う。

　さきほどの支部長と同じように、館の前には恰幅の良い女性が立っていたのだ。

　四十かそこらだろうか。

　こちらは、古式ゆかしい民族衣装だった。細やかな刺繍がなされた衣服で、長い袖には鳳凰らしき鳥が飛翔していた。

「お待ちしておりました、ロード・エルメロイII世」

　すっ、と女性が拳と掌を組み合わせる。

　確か、拱手きょうしゅと言われる大陸の礼法だった。男性ならば矛を収めるという意味で、右拳を左手で包む。女性の場合は反対に左拳を右手で包むのだったか。

　師匠もそれに応じると、彼女はにっこり笑って、自己紹介した。

「螺旋館・新加坡シンガポール楼の、陶タオです。鍵はこちらですよ」

　さっき渡されたのはアタッシェケースだったが、今度は美しい細工の施された小さな木箱だった。

「まさか、時計塔の君主ロードと、このような用件でお会いすると

は思いませんでしたが」

「申し訳ありません」

「いえ、申請は正式なものでしたから。時計塔の機密に関わることとなれば、致し方ないでしょう。結界認識用の開鈴はそのままお持ちになられてかまいませんわ。螺旋館はいつなりとあなた方を歓迎いたします」

　差し出された小箱をスーツの懐にしまってから、一礼した師匠は、先ほどと同じように身を翻した。

　もう一度、凛が鈴を鳴らすと、ふっと建物は見えなくなった。

　まるで、霧の向こう側に消え失せてしまったかのようだ。問題はその霧さえも見えないということだが。

「さすが、お膝下だけあって大したものだ。風水を利用することで、大規模な認識改かい竄ざんに成功してる。グレイぐらいの感受性がなければ、異常に気づくことさえできんとは」

「暗示みたいなものですか、先生」

　と、これはエルゴが言った。

「土地にはそれぞれの雰囲気があるからね。過疎地の田舎をリゾート地として飾り立てれば、みんなそのように見るだろう？　風水に限らず、古来、王や政府は土地を改造して、人々の認識を変えることで、理想の国を作り上げてきた。今の螺旋館はその延長上といったところだ」

「……認識というと、たとえばリンゴは赤いと思い込んでると、リンゴの形をしたものが赤く見えるみたいな？」

「理解が早いな。もちろん、単なる暗示だけでできることじゃないから、土地を活用した魔術を併用している。機械的なデータについては、情報操作もしてるようだ。時計塔に比べると、螺旋館は現代への忌避感が薄いようだしね」

　ふたりのやりとりを見ていると、不思議な思いが、胸を渡って行った。

期間限定の、教師と生徒。

　まるで、フィールドワークの実習のようだ。

　エルメロイ教室の騒がしい日常が、もう懐かしかった。旅が終わった後、あの教室のひとりとしてエルゴが入学することもありえるのだろうか。

「じゃあ、その鍵はなんなんですか」

「その説明の前に、ひとつ講義といこう」

　と、師匠が話し出した。

　どうも、調子が出てきたらしい。

「ミス遠坂はよくご存じのように、時計塔の魔術には特許制度があってね。登録された魔術式が使われた場合、登録者と時計塔はそれぞれ対価となる金額を徴収できるようになっている。まあ古今変わらぬ、時計塔のメイン収入源のひとつだ」

　ちら、と聞いたことはあった。

　師匠が略奪公などという名で知られているのも、解体した魔術式に改善を加え、自分の名前で登録するという悪辣なやり口のためだった。もともとは暗殺されかけた報復だったのだが、何度か重なるうちにすっかり師匠のトレードマークとなってしまったものだ。

「だが、魔術師は自分の魔術を秘匿するものだ。本来なら、特許を受けた魔術の使用など、いちいち時計塔に申告するはずもない。なのに、どうしてこのシステムが機能するか分かるかな？」

「……登録された魔術式が使われたら、何らかの方法で分かるようになっているとか」

「正解だ。ロンドンの時計塔の地下には、はるか地上を観察するための天文台があってね。そこで霊脈と接続された魔術礼装によって、登録された魔術式が発動した形跡を定期的に報告するようになっている」

　地下の天文台。

ひどく矛盾した単語のようだが、ロンドンならばさもありなん。あの都市ならばその程度のものは埋まっていて当然、といつのまにか自分も考えるようになっていた。

「だが、当然だが、ロンドンの時計塔の魔術礼装ひとつで、世界すべてを見渡せるわけではない。かの天文台の魔術礼装は、君主十二家の至上礼装にも匹敵ないし凌駕する代物だが、けして万能というわけではないからだ。さて、ならば、どうしたらいいと思う？　これはグレイが答えたまえ」

　突然質問を振られて、うろたえてしまった。

　それでも、最新の生徒に恥ずかしくないように、なんとか答えを用意する。

「……同じ機能を持つものを、他の地域にも置く、でしょうか」

　おずおずと披露した解答に、師匠が再びうなずいた。

「よろしい。過去の時計塔も同じように考えたわけだ。世界各地に時計塔支部があるのは、こうした理由も背景にある。無論、ロンドンの真作には大きく劣るが、機能と範囲を限定した礼装を、主要な土地の霊脈に接続しているんだ。これらの集計によって、おおよそ世界の土地の七割から八割ほどでは、魔術利権を正当に取り締まれるようになっている。当然、このシンガポールを含めてね」

（……あ）

　やっと、話が見えてきた。

「ひょっとして、師匠が行こうとしてるのは」

　言いかけたところで、師匠が今度は近くに開いたエスカレーターへと降りていく。

　地下鉄の駅であった。

　周囲に人影はほとんどなく、踊り場でスタッフ用らしい通路へと足を向ける。

「師匠、そちらは」

「合ってるさ」

　言って、師匠が手をあげた。

　ただし、スタッフ用の扉ではない。すぐ隣の、何の変哲もない壁だった。

　くぐもった呟きとともに、師匠の体がするりと飲み込まれたのだ。

「え」

「シンガポールの誇るＭＲＴマス・ラピッド・トランジット。数十年前につくったときから仕込んでいたらしい。話したように風水と親しい土地柄だ。こういった仕掛けもつくりやすかったんだろう。どこの国でも、霊脈と地下鉄は多かれ少なかれ相互に影響を与えるものだからな。キングス・クロス駅の９と４分の３番線みたいなもんだ」

　躊躇せず凛が続き、エルゴも吸い込まれ、最後に自分がおっかなびっくり目をつむったまま、壁の内側へと歩みいった。

　一瞬、肌にぬるりと冷たい感触。

　目を開くと、視界は長い通路となっていた。

　長い通路に、いくつも扉が設置されていて、病院か研究所のようだった。

（こんな場所が……）

　茫然としていると、師匠がアタッシェケースと小箱を開き、それぞれの中身を取り出していた。

　金と銀の、一対の鍵だった。

　通路にいくつも並んだ古めかしい扉からひとつを選び、その鍵を差し込む。

　最初は金の鍵で、次は銀の鍵という順番だった。おそらく、その鍵も見かけ通りではなく、強大な魔術のかかった代物なのだろう。

扉が開き、内側の空間が露わとなった。

　床と同じく、金属の材質によって隔離された空間である。

　そこには、巨大な球体が鎮座していた。

　正確には、球体から一部をくり抜いたようなオブジェだった。ある種の前衛芸術めいたそのオブジェから、何本かのケーブルが垂れ下がっている。そのケーブルとつながっているのが、現代的なモニターではなく、どこか蒸気機関っぽいアナログなメーターなのが似つかわしく思えた。

「限定型魔術礼装・観測球ルクスカルタ」

　と、師匠が名を呼んだ。

「ご想像通り、魔力の波長、魔術の波形や術式の痕跡を確認するための魔術礼装だ。シンガポールから半径数百キロほどはこれで見通せる。ただし、当然螺旋館の範囲も覗き見てしまうのでね。使用に両組織の許可が必要なのはそういうわけだ」

「じゃあ、師匠やっぱり……」

「アトラス院の、ラティオの錬金術は見た」

　言いながら、師匠は近くの計器に触れつつ、もう一度金の鍵と銀の鍵を差し込んでいた。あの鍵はここに入るためのものであると同時に、観測球を使うための認証器具でもあったらしい。

「本人も言っていたが、骨を使ったあの錬金術は、つまり自分の体を利用している魔術だ。これは時計塔でも言われていることだが、現実世界からの反動が生じない分、おおよその神秘は体の内側の方が運用しやすくてね。アトラス院の錬金術師は魔術回路が少なく、自然干渉系の魔術を使うことはまずないと言われていたが、なるほど六源においてはああいう変則的な神秘を確立していたわけだ。ああ、体の中だけで完結するなら、魔術基盤も必要あるまい。ひょっとすると、六源の家系に限っては、魔術回路自体が変異しているのかもしれない」

　説明がまた専門的になりすぎて、首をかしげる。

「ええと……つまり、どういうことです？」

「自分の肉体を魔術に使用している以上、むしろ時計塔の魔術師より特定しやすいということだよ。おそらく、彼女の使うほぼすべての錬金術は、同じ波長を出すことになるだろうからね」

　そう言って、師匠が懐から出してきたのは、白ちゃけた欠片であった。

「骨の破片！」

　戦いの最中、師匠はそんなものを回収していたらしい。

　この人らしいちゃっかりぶりとは言えた。あのときから、いずれ反撃に必要になると考えていたのだろうか。

　近くの天秤にその骨を置いて、計器の針をいじりだす。

「凛、補助を頼みたい。観測球上での測定は私でもできるが、魔力の同調処理や細かい調整は多分君の方が……」

「その前に、ひとつ確認していいですか」

　今度は、観測球を見上げていた凛が口を開いたのだ。

　地上とうってかわって、ひどく重々しい様子であった。

「なんだね？」

「…………」

　少しの間黙ってから、彼女はこう尋ねた。

「この観測球の使用許可、どういう申請をして取ったんですか」

　一瞬、師匠が口ごもった。

　居心地悪そうに片目をつむって、ジャケットの襟元をいじりだす。

「さすがミス遠坂。そこに気づいたか。……ライネスに連絡を取ってね。私が特許をとった魔術式が近辺で無断使用されている、とエルメロイ家から時計塔シンガポール支部に抗議してもらった。いや、先に出したエアメールとほぼ同時になったようで、ずいぶんとっちめられたが」

「先生……っ！」

　凜が、目を丸くする。

「それ、思いっきり詐欺じゃないですか！　しかも国際的な詐欺です！　時計塔の君主ロードの権威で支部を動かしたあげく螺旋館まで騙したって、先生だけの問題で済まないでしょう！　バレたら場合によっては両組織の戦争ものですよ！」

「うむ、状況の理解と言語化が適切だ。というわけで、ここからしばらくの行為については、グレイとエルゴも一切合切黙っているように」

「し、師匠──！」

「先生ッ？」

　自分とエルゴも、たまらずに突っ込んだ。

「そうでも言わなければ、使わせてもらえないだろう。まして、アトラス院やエルゴのことを説明しだしたら、それこそいらぬ波紋を呼びかねない。一番迅速でスムーズな手段を講じたら、たまたま詐欺行為と一致しただけだ」

　さも当然とばかりに師匠が胸を張ったが、明らかにグレーゾーンの向こう側に突入した言い分である。

　同時に、自分はとある事実を思い出しつつあった。

　つまり、この人が一番恐ろしいのは、開き直ったときということだ。

　魔術師としては優れていないこの人が、魔術世界において一目置かれるようになったのはけして単なる幸運ではない。もちろん、偶然に恵まれはしたが、それだけで成り上がれるほど甘い世界ではないのだ。

　何度となく身をおいてきた運命の分岐点で、その度に師匠は猛然と反撃してきた。たかが新世代ニューエイジの魔術師と侮ってきた相手の裏をかき、数少ない特技を過剰なほどに活用して、ひたむきに生きあがいてきた。

まるで、星に手を伸ばす子供のように。

　あるいは、世界の果てを見たいなんて馬鹿げた衝動で、何十もの国を蹂躙してまわった古代の征服王のように。

　何度か深呼吸をしてから、

「ひとつ、分かりました」

　と、神妙な面持ちで凛が言った。

「何がだね？」

「正直、ルヴィアやフラットとのことで、教授にご迷惑をかけたのではないかとこれまで思っていましたが、あれは勘違いでした。いえ事実の問題ではなく、順序の問題です。わたしたちが教授にご迷惑をかけたのではなく、教授がわたしたちを指導したのだから至極当然の結果だと考えるべきでした」

「大いに異論を唱えたいところだが、それはまたにしよう」

　言って、もう一度師匠は観測球の計器に触れた。

　凛も素直に追従した。

　天秤の皿に置かれた骨の破片に向かって、手をかざし、すっと目をつむる。

「魔力同調の形式は授業通りでいいんですか？　骨との魔力同調は動キ物メ科ラでもやりましたが、鉱石科キシュアや降霊科ユリフィスのやり方もありますよね」

「降霊科ユリフィスで行こう。この場合、骨そのものよりも、その向こう側の本人に干渉するための感染魔術と考えるべきだ」

「パスのつなぎかたはクリフォトで？」

「セフィロトでいい。峻しゅん厳げんの柱から火星のシンボルを回せ」

　あれだけ文句を言っていたのが嘘のように、専門用語まじりの師匠の指揮のもと、凛がてきぱきと動き出す。それこそエルメロイ教

室でも、これほど段取りよく補佐できるのが、あと何人いるだろう。

　その結果は、すぐに知れた。

　かすかな振動とともに、巨大な球形のオブジェに光点が浮かび始めたのだ。

「あれって」

「彼女──ラティオが、あの骨による錬金術を使った地点だな」

　光点を睨みつけながら、師匠が言う。

　それはたちまち範囲を広げ、球体の上にいくつも重なっていった。

「拠点にしている地点、何らかの儀式に使った場所、魔術の残り香が少しでもあれば、ルクスカルタは見逃さない。アトラス院がどんな隠蔽工作をはかっていようが、暴き出してやるとも。……だが」

　最後は、ほかの者には聞こえなかっただろう。

　低く、掠れた声だった。

　たまたま師匠に注目していた自分が、なかば無意識に耳を『強化』してしまったのだ。おそらく、ほかの誰が聞いてもさして重大な意味とは考えず、しかし自分にとってはけして聞き逃せない言葉。

「……だが、最後はフーダニットになるだろうな」

　眉間にきつく皺を寄せ、師匠は囁いたのであった。

＊

　夕暮れの光が、ぼんやりと色を失っていく。

　南国の赤々とした太陽が地平線に沈むにつれて、からりとした空

気には、別の成分が混入するかのようだった。いいや、元からわだかまっていたものが、陽光のヴェールを取り除かれて、這い出てきただけかもしれない。たとえば、甘い化粧の香りだったり、エキゾチックなカクテルの誘惑だったり、昼より夜に似つかわしいものはあるだろう。

　そこの場合だと、鉄錆びたにおいだった。

　ビルの取り壊し工事が途中で停止したまま、放置された区域である。周囲のあちこちに、シンガポールの法律から四ヶ国語で『立入禁止』と書かれた貼り紙がされている。

　内側では、錆びた鉄骨が剝き出しのまま、コンクリの山に突き刺さっていた。

　本来なら解体された後、順次運び出されていくのだろうが、その区域では鉄骨とコンクリがパズルみたいに組み合わさって、長いこと捨て置かれているのだった。

　女は、そこで眠っていた。

　地面に直接座り、鉄骨に背中をもたせかけただけの姿勢である。

　蒼くて長い髪がゆるりと垂れて、汚れることもかまわないらしかった。

「ラティオお嬢さん」

　と、太い声が流れた。

　人工知能とは到底思えない、おどけた調子の声音だった。ラティオの並列思考からふたつもあてがっているのだから、そうした人格の深みも当然であったかもしれない。

「来やがったぜ、予想通りだ」

「想定された接近時刻から、十六分三十五秒のズレ。許容範囲内だ」

　機械よりもよほど無機質に、ラティオが言う。

　その瞼が開き、視線が右上に流れた。

工事現場の錆びた鉄骨のひとつに、一羽の鷹が止まっていたのだ。

　今更、夜目のきかぬ鷹が、といぶかしむ必要もあるまい。エルゴが暴走した際、若者の頭部を吹き飛ばしたのも同じ鷹であった。

　単なる猛禽にはありえざる知性が、その瞳には宿っていた。

「結論から尋ねます。ラティオとエルゴを殺そうとしたのですか」

「おいおい、あれで死ぬなら、クルドリス家は何千年も前に絶えてた方がマシってことになるぞ」

　くかか、と鷹が笑った。

「エルゴも同様だ。あれで死ぬようなら、あいつをつくった三人は妾あたしも含めて、全員底抜けのバカだったってことだろ。そうじゃないって結果を見せてやったんだから感謝されてもいいんじゃないかな」

　バサバサ、と翼がわざとらしく羽ばたく。

「ん、どうした。賛美の声が聞こえないな？　アトラス院は五体投地するんだっけ？」

「性能試験という意味でしたら、一定の成功は認めます」

　と、ラティオが返した。

「最後にエルゴが出した『手』は、他の幻手とは違っていました。つまり、彼という器の内側で、我々の研究成果がどのように醸成したかという結果です。規模からいえば、本来の性能からかろうじて絞り出された一雫に過ぎませんが、それでもあの現象から考えられることは多いでしょう。タンゲレにも現在進行形で検証させています」

「へいへい。エーテルおよび重力波や電磁波含めて十八のフィルターを交えつつ、七○一三回……今七○一四回目の再検証を試行してますよ。各種魔術系統、神話系統からの照合も同時に進行してますとも」

　タンゲレの声は、ラティオの足元から流れた。

ポツンと頭蓋骨が置かれていて、まるでビックリ箱みたいにひとりでに動き、喋っていたのである。どうやら、魔力の節約も兼ねて、普段のラティオの使い魔はこの形態で起動しているらしい。

「おお、お利口さん」

　と、鷹は称賛する。

「その生真面目さに免じて教えてやろう。お前さ、もう見つかってるぞ」

「痕跡は消しているはずです。このセントーサ島はまだ大規模開発中だけにデータが少ない。追う手段がロード・エルメロイII世にはないと、ラティオは考えます」

　シンガポール本土から南方、わずか八百メートルに位置する、東西に細長い島だ。

　かつては疫病が流行ったことから、背後から死の忍び寄るブラカンマティ島と呼ばれ、今は平和と静けさセントーサ島と呼ばれる土地。

　政府からは観光地として目されており、とりわけこの数年は大規模開発を続けている。カジノやアトラクションも建設中だ。結果として、いまだ工事中の区域も多く、こうして潜り込む場所にも事欠かないのであった。

　ラティオの返答に、鷹は首を傾げる。

「どんな箱入り娘だ、お前。つか時計塔の君主ロードをなめすぎだ」

「箱入り、という意味で、あなたに言われたくはありませんが」

「ははは、確かに年季が違う。個人の年数で言えば、こちらは桁が二つか三つ上の引きこもりだからな」

　しばし間をおいて、ラティオはこう言った。

「時計塔の権力を使う、ということですか」

「アトラス院は穴蔵にこもって、延々と人類守護やら維持やらの命

題に向かい続けてるな。だが、時計塔は違う。あれは現代社会に近い。その分、肝心の目的を忘れている者も多いだろうが、代わりに人間の悪意に近いんだ。はは、人間はまともな能力じゃ神様に敵わないが、悪意じゃあ底無しだ。それこそ神様だって裸足で逃げ出すさ」

　ラティオの瞳が、積み重ねられたコンクリと鉄骨に向く。

　開発の美名のもと、廃棄された工事現場。

　この島ひとつで、一体どれほどの資源が注ぎ込まれてきただろう。金銭面での投資はいずれ回収されるのだろうが、惑ほ星しから掘り尽くされた資源は百年や二百年で回復するものではない。

　ただただ消費されていく惑星の欠片。

　古代、星と神は同じものだったのに。

「大したものだよな人類。妾あたしたちだって、星の表象として神をどうこうするのが手一杯だったってのに、こいつらは本当に星そのものを食い荒らしてるんだぞ。ああ、だからこそ霊長ってもんだ。自分の棲んでる星のひとつやふたつ自滅させずに、そんな名前恥ずかしくて名乗れないだろ」

「あなたにとって、霊長の意味とはそうなのですか」

「おうとも。親を殺せないような子供に何の意味がある？　自分の生家だろうがとっとと焼いて、外に出るのが正しい道さ」

「道タオ」

　短く、ラティオが口にする。

「あなたは、そういう神を選んだのですね」

「クルドリスは違うのか？」

「……答える必要がありません。用件はそれだけですか」

「あれま。鈍いな。現代のクルドリスってなら、それぐらい察してくれると思ったんだが。お得意の高速思考はどうしたよ」

鷹が、翼を広げた。

広げきったと思われたそのとき、ふわ、と姿が変じたのだ。

次の瞬間、鉄骨に腰掛けているのは、白い炎のような女だった。その喉下から頬にかけて、蒼い痣か入れ墨かが走り、二重の炎のごとくに映った。

現代の魔術にも、変身の類はある。しかし、そのほとんどは幻覚だったり、別に用意した人形などの媒体に被験者の五感を移すといった術式だ。実際に体を組み換えさせる系統は、もはや絶滅危惧種の大魔術と言ってよい。

瞳は黄金。

さらに、右耳には金鈴のイヤリングをつけて、両手首からはぐるぐると巻いた金属の鎖を垂らしていた。

極めて美しいが、兇猛さがなお大きく勝る。

花が匂うように、血が香るように、禍々しさを感じさせる女であった。

「エルゴを、妾あたしにわたせよ」

三日月のように、白い女の唇が裂けた。

「古い契約だからな。順番は守る。クルドリスが第一、妾あたしが第二、彷徨海が最後。だが、お前が妾あたしに順番を譲ったのなら、誰も咎めようがないだろう？」

「ラティオは断ります」

錬金術師が即答する。

「へえ、だがお前も分かったろうが、向こうも切り札は晒してないぞ。あの内弟子とやら、なかなか面白いブツを持ってる。それを感じたからこそ、お前も一度は交渉を申し出たんじゃないのか？」

女が言ったのは、海賊島の戦いでグレイが奥の手を使おうとした時、ラティオが制止に入ったことだった。

アッドの内側に秘められた神秘。

　あの時から女は監視していて、神秘の威力をも看破したらしかった。

「あなたなら、なんとかなるというのですか。ムシキ」

「そりゃあ、妾あたしは強いからな」

　臆面なく、ムシキと呼ばれた女が言い切った。

　けして、それが単なる傲慢や過信ではない証拠に、ラティオは黙ったままだった。

　鉄骨に座ったまま、色っぽく足を組み直して、ムシキはほっそりとした顎に白い指先をあてがった。

「ああ、クルドリスは昔からかくれんぼが得意だったっけ。昔の六源──六賢でも、お前の家は他人の背中に隠れて、死体の骨ばかり漁ってご満悦だったな？」

　ラティオの顔に、ただならぬ強い感情がよぎった。

　それが具体的な行動へとつながるより早く、

「許していただけませんかね、マダム」

　足元の頭蓋骨──タンゲレが、口を挟んだのだ。

「ラティオお嬢さんは、あの洞穴から出てきたところなんですよ。地上らしい交渉は、少しばかり刺激が強い。はいはい、お嬢さんもあまりこの方の言葉を真に受けないで。生きている時間スケールが違うんだから、半分どころか九割ぐらいは聞くだけ無駄。年寄りの言葉が常に示唆に満ちているってわけじゃないでしょう」

「やれやれ、気の利く人工知能だな。主人よりよほどいい」

　と、呆れたようにムシキが苦笑した。

「なんなら、こいつをもらえるなら手伝ってやってもいいぞ。お前の分割思考ふたつぶんぐらいのリソースなら、妾あたしでもなんとかなるだろう」

「『盤』の制作者のひとりでもあるあなたなら、あながち嘘でもないでしょうが、ラティオは断らせていただきます」

　もとの冷ややかさを取り戻して、錬金術師が言った。

　足元の頭蓋骨を拾い、蒼い髪を黄昏の空気に溶かして、立ち上がる。

「それに、時計塔の悪意が、ラティオの隠蔽工作を上回ったとしても問題ありません。彼らの未来はすでに演算済みですし、ラティオにはラティオの仕掛けがあるからです」

「ほほう」

　と、白い女が片眉をあげた。

　耳元に手をやって、くいくいとわざとらしく動かす。

「なんだ、それ以上自慢はしてくれないのか？　仕掛けとやらの中身についても、ぽろっと口を滑らせておくれよ」

　錬金術師は、冷たい表情で目を細める。

「二度と邪魔をしないでください」

「おうおう、言ってくれる。まあ、それならそれでいいさ。だが、忘れるな。妾あたしたちは、それぞれの目的のためにエルゴが欲しいだけだ。順番は譲るが、その先はないぞ」

「記憶しておきます」

　ラティオが肯定すると、白い女はくるりと後ろを向いた。

　北側には、黄昏から夜にかけて、徐々にライトアップしてくるシンガポールの風景が広がっている。

　鼻歌がこぼれていることに、ラティオは気づいた。

　現代ではなく、古い時代のものであろう。美しく洗練された抑揚には、なぜか遥か彼方の深山の印象があった。人が近寄りもせぬ険しい幽谷と、清冽なる瀑布。この禍々しい女とはまるでそぐわないようで、ひどくしっくりと来る気もした。

「どうせ、ずうっと待ってたんだ。ほんの少し延びたところで、砂時計を一回ひっくり返す程度のことさ」

　その言葉が耳朶を叩いたと同時に、女の姿は消えていた。

　羽ばたきの音だけが、後に残ったのであった。

4

　夜になって、かすかな鼻歌が聞こえてきた。

　あまり上手な旋律とは言えなかった。節回しはところどころ外れていたし、リズムは速すぎたり遅すぎたり、とにかく一定しない。子供が衝動のままに、でたらめに喉を震わせているかのようだった。

　はっきり言ってしまえば、音痴の類。

　だけど、不思議と、長く聞いてたくなる歌だった。

「……ん」

　寝ぼけ眼をこすって、自分は梯子に手をかけた。

　ルクスカルタによる捜索が終わった後、このアパートへ戻ってきたのであった。時計塔シンガポール支部が用意してくれた建築物は、確かに魔術的な防御はしっかりしてるのだろうけれど、その分古めかしい。こんな風に屋根の上に出られる仕組みも、時代がかった建築によるものだろうか。

　乾いた風が、顔にあたった。

　目の前に、美しい夜景が広がっていた。

　ライトアップされたシンガポールの街は、それこそ星空を反転させたかのようだ。天と地の双方で、これでもかと光の海が煌めいている。あまりの華やかさに耐えられなくなって、一度目を閉じてから、ゆっくりと開いた。

　歌い手は屋根瓦に腰掛け、天の星を見つめていた。

ゆうれいなんか　こわくない

ゆうれいなんか　こわくない

うみのむこうに　消えてった
なみのむこうに　消えてった

ゆうれいなんか　こわくない
ゆうれいなんか　こわくない

うたのむこうに　消えてった
つられてむこうも　歌ってた

ほしは　こちらにやってこい
ぼくらのところに　やってこい
うたってるから　さあおいで
きみがくるまで　まってるぞ

「……エルゴさん？」
　呼びかけると、びっくりした顔で、若者がこちらを振り向いた。
　ひゃあっ、と可愛らしい声がこぼれる。
「そ、その、グレイさん！」
　言いかけて、ずるっ、とエルゴが体勢を崩した。
　斜めの屋根を滑って、背の高い身体が夜の闇へと落下する。こち

らが止める間もなく、十数メートルはあるはずの地面へと。

「エルゴさん！」

　見下ろすと、中空に若者の身体は留まっていた。

　背中の幻手が伸びて、若者の落下を防いだらしかった。不可視のロープで宙ぶらりんになったかのような姿勢で、

「見ないでください」

　と、若者は顔を覆っていた。

「でも」

「……誰も、聞いてないと思ってたから」

　夜闇でも、若者の耳まで真っ赤なのが見てとれた。

　うっかり追及すると、そのまま幻手を放して、墜落してしまいそうだ。かといって、うまく話題をそらすような能力は自分にはなく、精一杯言葉を選んで、声をかける。

「いい歌、でしたね」

　少なくとも、歌についてはそう思ったのだ。初めて聞く歌詞だったが、シンガポールに煌めく星に語りかけているようだった。

　ギリギリ、赤点を免れたというところだろうか。

　風に揺れる洗濯物みたいなエルゴは、両手で顔を押さえたまま、小さく呟いた。

「ラナがつくってくれた歌なんです」

「あなたの髪の毛を切った女の子？」

「はい。あの島に来てすぐの僕が怖がってたのを、幽霊が怖いんだと勘違いして」

　ちょこんとうなずいたエルゴに吹き出しかけて、堪えるのに苦労した。あの小さな女の子が、毛布をかぶって怖がっている若者を慰めているところを、思い浮かべてしまったからだった。

でも、今はもうひとつのことが気にかかった。

「本当は、何が怖かったんですか」

「知らない誰かが、僕の中にいるんです」

　エルゴの返事に、一瞬息を詰めてしまった。

　記憶飽和。

「それは、神様が？」

「分かりません。でも、そうなのかもしれない」

　顔を押さえたままのエルゴが、声をひそめて言う。

　たとえば、その手を開くと、誰か別の仮面に変わっているというように。

「誰かは、いつも内側から僕を見ているんです。その視線を、手触りを感じるんです。みんなは誰もいないっていうのに。……だから、怖くてどうしようもなくなったら、ゆうれいだって歌って、笑い飛ばそうとしていたんです」

「……そうですね。怖いですよね」

　自然と返したのは、彼の言葉が痛いほど分かってしまったからだ。

　過去の英雄に囚われている自分と、過去の神様に囚われているエルゴ。ならば、自分の抱えている恐怖は、彼のものとひどく近しいように思えてしまって。

　もちろん、単に成長が停止している自分と、いずれ記憶と人格が飽和して崩壊すると告げられたエルゴでは、その重みも深刻さもまるで違うだろうけれど。

　そんな感情が伝わったのか、ぶら下がったままのエルゴが、こちらを見上げた。

「グレイさんは、辛くなかったんですか」

「拙には……師匠がいましたから」

胸の中の、一番柔らかいところに佇んでいる長身の影を、自分は告白した。

　ああ、思い出した。

　あの故郷で、師匠は言ってくれたのだ。

　──『君は、人間は成長すると思うか？』

　いくらでもいる新世代ニューエイジの魔術師から、時計塔の君主ロードにまでなりおおせたことを、師匠はまったく評価していなかった。

　ばかりか、何も成長していないと、血を吐くように述懐していた。

　──『人生の岐路なんて、小さな幸運や偶然で決まってしまう。だとすれば、真の意味で人間が成長することなんてあるのか？　本当は誰だって小さな子供のままで、誰かもっとずっと立派な……生まれながらの王様にでも従いたいと思っているんじゃないのか？』

　──『私は、変わりたい』

　こちらを導こうなんてせず、ただ無様なぐらい率直に、己の悩みを告白したのだ。それはなんて愚かで、なんて身勝手で……なんて救いのある台詞だったろう。

　あれは、共にあろうという言葉であった。

　一緒に間違い、一緒に傷つき、場合によっては命を落とすときも歩みをともにしようという誘い。

　当時の自分は、それならついていこうと思ったのだ。

「師匠があの故郷から連れ出してくれて、ロンドンでいろんな人々

に関わって、ここにいていいのだと、やっと思えました。自分の中にはほかの誰かがいるのかもしれないけど、それでもここにいていいんだって」

　だから、あなたも、とは言えなかった。

　自分に起きた経験は、あくまで自分だけのものだ。まったく同じ出来事が他人に起きたとして、その意味合いはまるで異なるだろう。

　間をおいて、エルゴの問いかけが夜闇に響いた。

「友達が、できたんですか」

「……はい。向こうがどう思ってるかは分からないけれど、拙にとってはとても大切な友達です」

　金髪の少女の面影が、瞼に映っていた。

　師匠をロード・エルメロイII世に封じた、君主ロードの次期後継者。ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。

「だから、拙は、置いていかれたくない、と思っています」

　肩を抱いて、自分は言った。

　高位の魔術には、老化を遅らせるものもあるらしい。だったら、自分がずっと同じ年齢のままでも、それほど奇異の目で見られることはないのかもしれない。

　それでも、自分は彼女と同じ歩みがいい。

　同じ歩幅で、同じように成長して、同じように老いていきたい。

「グレイさん」

　ようやく、ゆっくりと屋根に戻ってきて、若者はこう言ったのだ。

「先生の内弟子になって、よかったんですね」

「は、はい」

強く、うなずいた。

「それは……拙の、何よりも大事な誇りです」

「イッヒヒヒヒ！　同類相憐れむってか！　まあ、俺もその同類には違いないが！」

「……アッド」

　右肩の固フ定ッ具クからアッドを取り外し、ぶんぶんと縦に振る。盛大に響いた悲鳴に鬱憤を晴らしたところで、別の、小さな異音が生じた。

　エルゴのお腹が、鳴ったのだった。

　顔を見合わせて、ついお互い吹き出してしまった。

「キッチンで、ちょっとしたご飯ぐらいならつくれますよ。何を食べたいですか？」

「食べたいもの……」

　一瞬、エルゴが口ごもった。

「じゃあ、目玉焼きをお願いできますか？　できたら、両面焼きターンオーバーで」

「はい、お安い御用です」

　うなずいて、自分から先に梯子を降りていく。

　途中で、首筋に指で触れた。二度ほど擦ると、不思議な悪寒は嘘のように消えた。

（……どうして、だろう）

　ほんの一瞬だけど。

　口ごもったときのエルゴは、ひどく思い詰めた表情をしていたように思えたのだった。

＊

　暗がりで机に向かったまま、凛は真剣な面持ちで、指先を見つめていた。

　アパートの地下室である。時計塔シンガポール支部には専門の研究室もあったのだが、今回は固辞して、あくまで平凡な地下室を選んだのだった。

　赤、緑、蒼。

　数多の色合いに、近くの蠟燭の光が揺らめいていた。

　宝石である。

　それぞれ紅玉ルビー、翠玉エメラルド、蒼玉サファァイア。

　いずれも大ぶりな品で、鮮やかなカッティングを施されている。

　慎重にそれらの宝石を見つめたまま、凛は握っていたナイフを動かした。

　人差し指に切っ先が潜り込み、たちまち肌からぷくりと血の珠が膨れ上がる。

　やがて、限界に達した血の珠は雫となって、紅玉の上に垂れた。

「呼吸を整えたまえ」

　地上とつながった通気窓の近くから、エルメロイII世が囁く。

　口元で、葉巻が赤く灯っている。暗い部屋でそのかすかな光が揺れるのが、まるで蛍かなにかのようだった。

「すでに何度も経験してるだろうが、君がやっていることはつまり石との契約だ。己の一部を石に憑依させると言ってもいい。ならば、君が石に血を垂らしているのではなく、君が君自身に血を垂らしているんだ。その一滴を額に受け止め、脳から神経の一筋ずつに染み渡らせるのをイメージしろ」

　言葉に従って、凛の集中が深まっていく。

それにつれて、垂れた血から宝石に異変が生じた。

　ぶるぶると宝石が震え、その内側へと血が吸い込まれたように見えたのだ。いや、血だけではなく、不可視の『力』もまた宝石に吸収され、そうした『力』は紅玉から他の宝石に連鎖した。

　ある種の魔法円めいたカタチをつくりあげ、ぐるぐると速度を増していく。

　円環というよりも螺旋に近い。

　一周する度に『力』の螺旋はその速度と勢いをさらに増幅し、徐々に、徐々に最初のカタチを失ってブレていく。宝石の震えもまた連鎖して、紅玉から翠玉、翠玉から蒼玉と、まるで音叉のように共鳴していく。

「まだだ」

　と、II世が言った。

「まだ集中を研ぎ澄ませ。魔力のみに集中しろというんじゃない。フォーカスすべきはその外だ。宝石が魔術回路になったつもりで、宝石を君自身となせ。ああ、君ならナイフを突き立てるイメージが似合うだろう。宝石は君の心臓だ。そこにナイフを突き立てろ」

　集中の深さはそのまま、アドバイスによって質が変じた。

　張り詰めていた凛の姿が、そのままふわりと宝石に溶け込んだかのようだった。その変化に応じて、破裂しそうな直前で『力』の流れが安定した。

　ダムが決壊して、突然川が正しいカタチを取り戻したようにも見えた。

　ふっ、と息を吐いて、凛が振り返る。

「いかがですか、先生」

「申し分ない。……まだ術式が終わってないことを除けば」

　す、と指し示した宝石が、むずむずと動いた。

「あっ！」

　次の瞬間、紅玉から、ハリネズミのように突起が浮き上がったのだ。

　すぐにそれも収まっていき、後には驚愕した表情の凛と、小さくため息をついたII世だけが残された。

「怪我はしなかったかね」

「そこまで未熟ではありませんので」

　居心地悪そうに咳払いした凛に、II世が歩み寄る。

　そっと彼女の手を表返して、傷がないか一瞥してから、宝石のひとつをつまんだ。懐から取り出した単眼鏡モノクルをかけて、蠟燭の光に透かした。

「同じ宝石魔術ならではの収しゅう斂れん進化かもしれないが、君の魔術とルヴィア嬢のそれはよく似ている。上っ面よりも本質的な部分においてだ。彼女の魔術の本質が価値の流動とすれば、君のそれは価値の蓄積に近いかな」

　宝石をためつすがめつしてから、小さく舌打ちする。

　なぜだか、かすかに忌々しそうな表情ではあった。もしもグレイがいたら、かすかな嫉妬を感じ取って、視線を落としたかもしれない。

「……正直、三セットぐらいは無駄にされるつもりでいたんだが」

「じゃあ、残りもいただけますか！」

　ぱっと華やぐような笑顔で、凛が言う。

「格安の提供とさせてほしい。乏しい自腹で揃えたんだ」

「仕方ありません。先生の顔を立てて、それで手を打ちましょう。慈悲深くて優秀な生徒に感謝してくださってもいいですよ？」

　ふふんと鼻を鳴らした彼女が、もう返さないぞとばかりに、手際よく宝石を回収する。

ひととおりを革袋にいれて、しっかり紐で縛り付けてから、口を開いた。

「でも先生、この術式、いつから考えてたんですか。ラティオに対抗するためだけに考案したって感じじゃないですよね？　さっきのアドバイスもそうですけど、わたしの魔術や魔術回路の性質と合致しすぎてます。ひょっとして、いつも嫌がらせを考えていたりするんですか？」

「非才の身なものでね。他人を見れば、何かしら糧にならないか、と考えるのが習い性になっている。──まして、五大属性すべてアベレージ・ワンなんて君のふざけた才能を前にすれば、どう活用すればベストかと考察するのは、普通のことだろう」

　眉間に皺を寄せて、II世が返す。

「ふざけたとはご挨拶ですね」

「正直な感想と言ってほしい。その才能の十分の一でもあれば、私は君主ロードなんかになっていない」

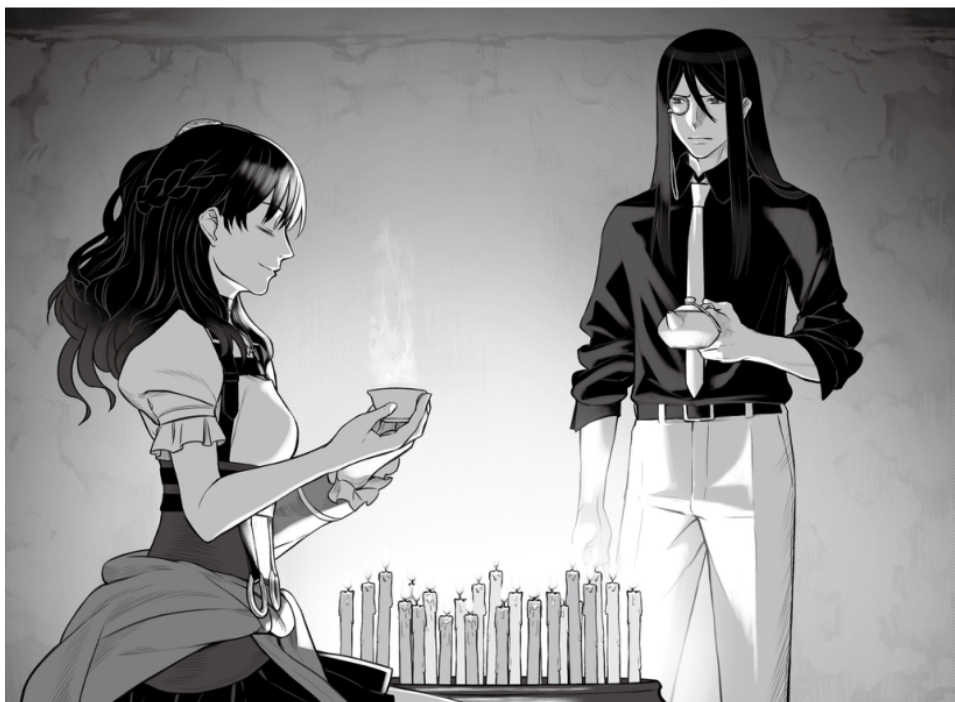
　誤魔化すように、葉巻を灰皿においた。凛から少し離れた器具で、アルコールランプに火をつけて、ビーカーでお湯を沸騰させる。

　その間に、棚から出してきた器具に、凛が目を丸くした。

「中国の茶器ですか」

　古ぼけた陶器が、一式揃っていたのである。

　一度、お湯で器を温めて、捨てる。その後、茶葉とお湯をもう一度いれてから、そっと蓋を重ねた。

「先生、お茶を淹れられたんですか。しかも中国茶」

「茶壺チャフーならともかく、蓋がい碗わん式なぞ誰でもできるだろう。それに、以前シンガポールに来たときのことを思い出してね。かつての世界旅行中はなんでもひとりでこなす必要があったんだ」

「つまり、最近はあの内弟子に世話されていたので忘れてた、ということです？」

　生徒の指摘には返事せず、頃合いと見て器を差し出す。

　一口含んで、

「美味しい」

　と、凛が素直に感想を漏らした。

「魔術でひとしきり集中した後は、緩和するためのルーティンが肝要だ。お茶はさまざまな意味で魔術師には必須の品だろう」

「お湯を沸かすのがアルコールランプとビーカーというのも実践的ですね」

　くすくすと、凛が笑う。研究室みたいな道具立てだが、これはおおよそ魔術も科学も基礎的なところを同じくするからだ。その後、時計塔の魔術師は科学を拒絶するようになったが、意外なところで共通する品は残っている。

　自分用にも淹れた茶を、II世が立ったまま飲む。

「懐かしい味だ。……しかし、良かったのかね？」

　と、問うた。

　言葉はそれだけだったが、十分意味は通じたようだった。

　ぎゅっ、とII世のネクタイを摑んで、凛がその顔を引き下ろしたのだ。単眼鏡モノクルをかけたままのII世と、凛の顔の高さが揃った。

「先生が、エルメロイ教室の生徒を自分のいざこざに巻き込みたがらないのはよく知ってます。でも、ここで仲間外れとか言い出そう

ものなら、最初に先生を殺しますよ」

　あまり冗談にならない目つきであった。

　お手上げとばかりに、魔術師も肩をすくめる。

「エルゴを拾ったのは君だからな」

「責任があるってもんでしょう？　生徒である限り裏切らないって先生が言うのなら、わたしだって同じです」

「そちらの理由は納得するが、もう一度訊こう。本当にそれだけか？」

　ネクタイを直しながら尋ねたII世に、凛がぱちぱちと何度か瞬きした。

「本っ当に見透かしますね、先生。━うん、正直にいえば、ワクワクしてるんです」

　と、開き直った風に胸を張ったのだ。

「だって冒険って感じでしょ？　こういうの、ずいぶん久しぶりです。正体もはっきり分からない相手に、自分の限りをぶつけられる機会なんて滅多にありません。ええ、こういう機会をものにせず、何が魔術師かって思っていますとも」

「私たち魔術師は、常に根源を目指すものだ」

　不意に、II世が言った。

　凛が、その続きを口にした。

「この手が根源に届くかどうかなんて分からない。いいえ、まず自分の世代では届かないと、誰もがよく知っている」

「知っていても、ひたすらに研磨し続け、次の世代に託す。それが私たちの輪廻だ」

「ならば、今ここで失われているのは、わたしひとりの時間ではない。ここまで積み重ねてきてくれた過去の魔術師たち、ともに生きている現代の魔術師たち、これからわたしの上に積んでいくだろう

未来の魔術師たち、そのすべての時間である。──先生がよくホワイダニットと口にされるのも、これだけ積み重ねてしまっているせいで、魔術師が自分の目的を裏切れないからですよね？」

　何故やったかホワイダニット。

　犯人の動機に注目する、ミステリ用語である。

　II世は、小さくうなずいた。

「よろしい。その道理をわきまえ、今がチャンスだと考えるのなら、私が止める筋合いはあるまい。……もっとも、私のまわりの女性には筋金入りのファイターが多すぎるな」

「それは間違いですね。ご存じなかったんですか。女は誰だってファイターですよ？」

　ため息まじりのII世に、凛はとっておきの微笑を投げかける。

　魅力的であり、同時に挑戦的な笑顔であった。

　いずれにせよ、II世は自分を納得させるかのように、ゆっくりと中国茶を味わってから、改めて口を開いた。

「それから、海賊のコンサルタントとしての君に、ひとつ依頼したいんだが……」

　君主ロードの瞳が、生徒の顔を映し出す。

　いや、それは教師と生徒という関係ではなかった。魔術師と海賊としてふたりは会話し、やがて女海賊がひとつの結論を出したのだ。

「その提案で、いけると思います。でも、その前に質問を」

「なんだね」

「グレイの魔力って、ちょっとありえないですよね？」

　エルメロイII世の内弟子。

　あの海賊島で一度は戦いあい、一度は共闘した相手の性能と性質を、彼女はしっかりと値踏みしていた。

「魔術に卓越してるとも思えないのに、あの強化魔術の精度は異常です。それに、あの人格持ちの礼装も、現代でつくれるような代物じゃありません。何より……ずっと、あの内弟子を私にだけは会わせないようにしてた理由って、やっぱりあの顔ですか」

「…………」

　少しの間、エルメロイII世は答えなかった。

「君は、第五次聖杯戦争で直接見たのだったか」

「ええ」

　と、凛はうなずいた。

　七人の魔術師が、七騎の英霊を使い魔として争ったという大儀式に、この師と弟子は参加したのであった。

「剣セの英バ霊ー──アーサー王を。グレイの顔は、かの英霊とうりふたつでした。当然、先生はご存じだったんですね」

「ごく稀に、その話をすることになるがね。まあ、おおむね、遠縁の末裔ぐらいに思っていてくれればいい」

「年齢が停止していることも、それだけで済むんですか」

「む」

　それも知ってたのか、と言わんばかりに、II世が顔をしかめる。

　グレイの肉体が、ある時期から年をとっていないという事実。そして、アーサー王と同じ顔をしているという証言。ふたつの言葉は、さまざまな神秘のまかり通る魔術師界隈ですら、無視しがたいものだった。

「まあ、もしもあの顔が時計塔で知れ渡ってたら、まずあいつが気づいたろうから、そこは助かったんですけど」

　呟いてから、凛が先ほどの宝石が入った革袋を懐に仕舞い込む。

「言いたくなさそうですから、年齢の停止についてはまたにしましょうか。ただ、エルゴとグレイってなんだか似てる気がするんで

す」

「姉弟みたいな？」

「そうですね。わたしもあまり上手く説明できないんですが……ええと、コインの表と裏を見てるみたいな？　いやちょっと違うわね。もう少し、一方的な何かを感じるというか、たとえば宝石とお金みたいな？」

　ややこんがらがった感じに、凛が眉をひそめる。

「羊と狼、かもしれない」

「え？」

「いや、私の方も気をつけておく。忠告には感謝する」

　単眼鏡モノクルを布で拭いて、II世は地下室を出たのであった。

5

　翌日は、呆れるほどの快晴となった。

　青空にはわずかな雲しか浮かんでおらず、溢れんばかりの光を大地に投げかけている。

　フードをしていても、眩しさを感じるほどの光量だ。蒸し暑さもかなりのもので、自分の『強化』が神経系にまで及んでなければ、かなりの汗にまみれることとなったろう。

　とはいえ、シンガポールの室内は異常なほどにエアコンが利いているのが常なので、ストールなどを持っている女性も多々見られるのだが。

　ただ、潮風は気持ちよかった。

　海の近くである。

　本土とブラニ島、セントーサ島の間に位置する、シンガポール港。

　香港や上海とも肩を並べ、貨物取扱量では世界トップクラスの港の、奥まった位置である。周囲にはこれでもかとコンテナが積まれ、忙しくトレーラーが行き来している。自分たちが待機しているのは、そうしたコンテナの山からやや離れた倉庫のそばだった。

　多くがオートメーション化された中で、ひとつだけ取り残されたような、あちこちが赤錆びた倉庫。

　その陰で、ふら、と師匠の姿が傾いだのだ。

「師匠、大丈夫ですか？」

「問題ない。立ちくらみしただけだ」

　目の下に、淡くくまができていた。

もちろん、師匠の体質はあまり頑健ではなく、この気温となれば体力を消耗するのは当然である。残念ながら、師匠の魔術の腕では暑さを避けるのも難しい。とはいえ、あのアパートもエアコンは十分利いていたのだから、そういう理由の寝不足ではあるまい。

（……多分）

　夜の間ずっと考えていたのだろう、と思った。

　師匠の場合、開き直ることはあっても、基本的にはストレスに弱い性質だと、自分は知っている。そのストレスに対抗するための手段は、結局考え抜くしかないのだ。納得がいくことなどなくても、ただひたすらに考えて、考えて、考え抜く。

　時計塔の魔術師ならばともかく、知られざる要素の多いアトラス院の錬金術師が相手で、舞台が異国の地となれば、なおさら師匠の悩みは深まる道理だ。

（……アトラス院の、錬金術）

　考えると、ぶるりと身体が震えた。

　エグゾフォルムとかいう骨を利用した戦術も恐ろしいが、より本質的な脅威は高速思考と分割思考による擬似的な未来視だ。数秒先の未来を読み取るあの演算を前に、海賊島での自分たちは完封されてしまった。

　もう一度あの錬金術師と相対したとして、自分たちは……

「……グレイ」

　囁きが、耳朶を叩いた。

「大丈夫だ」

　まだ、立ちくらみが落ち着いてないだろうに、こんなときだけしっかりと言うのだ。

　同じことを考えたのか、凛も苦笑まじりの表情で、師匠を覗き込む。

「先生は、もう少し体力をどうにかした方がいいんじゃないです

か」

「ありがたい忠告だが、これでも定期的にトレーニングはしているんだ。……エルゴはどうだ？　体調に問題はないか」

「は、はい。僕は大丈夫です」

　唾を飲み込みつつ、エルゴがそう言ったときだった。

「あ、エルゴ！」

　コンテナの向こうから現れた、よく日焼けした少女が、にぱっと笑い、若者の腹部に飛びついたのだ。

「ラナ」

　あの海賊島で、エルゴの髪を切った少女だった。

　ぐりぐり、と腹部に額を押し付けてから、若者を見上げる。

「リンに呼ばれたからやってきたの！　あたしが代表で、みんなは海で待機してるわ」

　それを聞いた凛が、口を挟んだ。

「ほかのみんなは首尾よくいった？」

「うん。引っ越しは万全。畑をほかの拠点につくるのも前から言ってたものね」

　白い歯を剝き出して、ラナが笑う。

　そうすると、鼻のところに小さく皺が寄った。数日前に、暮らしていた島が半壊したとは思われないほどのたくましさである。これもまた、海賊の資質かもしれない。

「コンサルタントとしての依頼。これでかまいませんか？」

　と、凛が師匠を見やる。

「ああ、確かに」

「師匠の言ってた、合同作戦ですか」

あらましだけは、あのアパートで聞かされていた。

だが、細かいところはまだである。つまるところ、アトラス院の錬金術師ラティオの居場所をつきとめた以上、次は彼女を捕らえるつもりだ、ということだけ。

「行為自体は極めて単純だ。魔術師と海賊による包囲網というだけだからな。地形は海賊たちの方が詳しいだろうから、彼らに案内してもらいつつ、適宜私が指示を出す。……ただ、ミス遠坂を慕う海賊たちに、危険な仕事をやらせることにはなるが」

「先生ってば、詐欺は気にしないくせに、そちらは気にするんですか」

「……悪いかね」

本人も矛盾には気づいてるのか、バツの悪そうな顔ではあった。

「いいえ、お気遣いに感謝します。マイロード」

ニンマリと笑って、凛が一礼した。

「でもね、どう思う？　ラナ」

「リンとエルゴに喧嘩を売ってきたんでしょ」

鼻息も荒く、少女は顎を持ち上げた。

「だったら、売られた喧嘩は買うしかないわ！　リンもエルゴもあたしたちの仲間なんだから、仲間を狙ってきた相手は殴り返すのが当たり前！　理屈が分かってないような小さな子は参加させないけど、あたしたちは断固戦います！」

はっきりと言い切り、可愛らしい拳でドンと胸をたたいたのだ。

しばらく真面目に向き合ってから、師匠は視線を自らの生徒へと移した。

「……お前、どういう教育をした、凛」

「もちろん、生き残るための教育です」

自慢気に言い切った凛を前に、胃のあたりを押さえる。

あながち間違ってもいないから、胃痛に耐えるしかないだろうよと、ライネスあたりなら言いそうではあった。幼かろうがなんだろうが、どうしても戦わねばならぬ時と場所があるのだと、彼女は誰より知っているだろうから。

　良いか悪いかではなく、戦わねば生きられない。

　聞こえのいい倫理観や常識とはそぐわずとも、仲間を傷つけられたら許さない、という単純さこそが必要な世界がある。

　それはきっと、あの故郷とロンドンのほかは、数えるほどの土地しか踏んでこなかった自分の、知らない世界だ。

　しばらく腹部をさすってから、

「──エルゴ」

　と、師匠は若者へ振り返った。

「相手の目的は君だ。だから私は君を囮に使う。不服はないか」

「使ってください」

　即座に、エルゴが返した。

「いいのかね？　強要はしないつもりだが、この状況で保護役ともいえる私が切り出す以上、それはどうしても強制性を持つだろう。だが、そういう強制を無理に飲み込んでいるのなら、ここぞというところで躊躇いが生じる。状況によってはその躊躇いで命を失うこともあるだろう。だから、正直な君の気持ちを聞いておきたい」

「怖くない、わけじゃないです」

　正直に、エルゴは打ち明ける。

「でも、僕が僕を知るために、必要と思うからです。一ヶ月ほどしか記憶のない僕が、この先を生きていくために、どうしてもこの戦いは避けられないと思うんです」

　きっぱりとした言葉は、自分の胸にも食い入った。

　自分のことを知りたい。

結局のところ、これ以上の動機ホワイダニットなどあるだろうか。

　たとえ、エルゴのように謎の神を喰らった身でなくても。自分のように、過去の英雄に囚われ、成長を止められた身でなくても。

「君をつくった三人の魔術師の、ひとりめか」

　小さく、師匠が呟いた。

「分かった。君の覚悟を疑ったことを許してほしい」

　謝ってから、胸元から取り出した葉巻に点火して、唇に咥える。

　一服の間に、潮風がたちまち煙を散らしていった。きつい潮の香りと葉巻の香りとが入り混じり、儚げに佇んだ師匠が、たちまち海の波に呑み込まれてしまいそうな恐怖を、一瞬だけ自分は感じた。

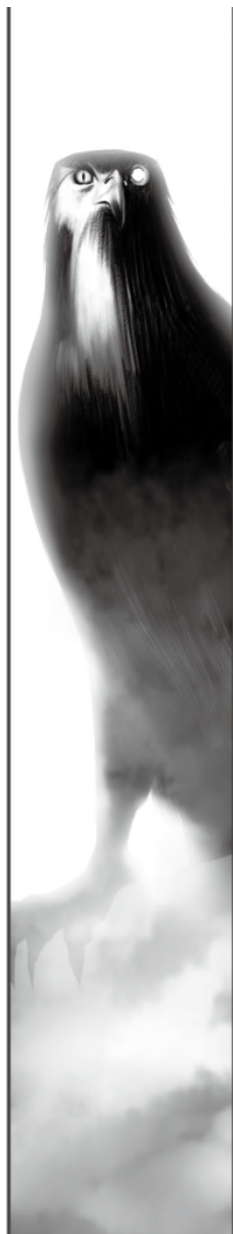
「あの鷹のことなど、気になることはほかにもあるがね」

　目を細め、葉巻を口元から離して。ゆっくりと息を吸う。

「まずはひとつずつ、手の届くところからだ。──これより、アトラス院の錬金術師、ラティオ・クルドリス・ハイラムを先制攻撃する」

　蒼い海を睨みつけ、力強く宣言したのであった。

# ✦ 第四章 ✦

1

　用意されたモーターボートは、いずれも中型で、七艘だった。

　自分と師匠、エルゴの三人は、凛の操縦するボートに乗り込んでいる。

　他の六艘は、海賊たちのものだ。

　乗員のおおよそは、エルゴと同じぐらいの年齢。十八歳ぐらいと思しい。

　白波を蹴立てて進むボートに乗り込んだ、横顔たちの勇ましさ。もはや出身なんて分からないほど日焼けした肌が、海賊の誇りやもしれなかった。

（凛さんが、育てた海賊たち）

　その顔に、彼女のたくましさが乗り移ってるようにも見えた。凛に教わった時間がどれほどかは分からないが、生き抜く方法を教えたという彼女の言葉からは、一切の偽りが感じ取れなかった。

　海賊たちが凛に寄せる信頼も、また。

「こちらアルファ１。リン、周囲に異常なし」

「ブラボー１。こちらも異常なし」

　設置された無線から、次々と声が届く。

　アルファ、ブラボーというのは、聞き違い防止のためのフォネティックコードだろう。エルメロイ教室だと、フラットなんかが好きな戦争映画ではよく聞いていたが、海賊が使うとは思っていなかった。

　凛は、少しの間腕組みしてから、無線機のボタンを押した。

「とにかく、最初の計画プラン通りに動いてね。状況が分からなく

なったら、一目散に逃げること。これは絶対」

「分かったアイアイマム！」

　頼もしい了解の声が響く。

　シンガポールからだいぶ離れ、すでにマラッカ海峡の入り口まで近づいているためか、ほかの船はまばらにしか見えなくなっていた。港を出るときこそ警察に見つかるのではとヒヤヒヤしたものの、ここまで沖に出てしまうと、逆に陸地が恋しくなってくる。

　すぐ後ろで、師匠が地図を広げた。

「ルクスカルタの検索で、ラティオの拠点と見なされたのはふたつ」

　海の風に注意しながら、細い指が紙の表面を滑る。

「ひとつはセントーサ島。こちらはさきほど調べたがもぬけのから」

　先んじて調査した地点である。

　ラティオが隠れていた名残はあったものの、とうに引き払ったらしかった。

　結果として、自分たちはすぐ沖に出て、新たな場所へと急行していたのである。

「もうひとつ、我々が向かっている座標は海上だ。ずいぶん長く、この地点で何らかの作業をしていた形跡がある」

　新たな地点を師匠が指し示したとき、不意に凛が振り返ったのだ。

「どうしたね、凛。前を見て運転してほしいんだが」

「わたし、どうして気づかなかったんだろう」

　師匠の指が触れた地図の箇所を、穴があくほどに強く、凛は見つめていた。

「何のことだね」

「この座標、よく知ってるのよ。だって、何度も調べたもの」

「調べた？」

　師匠の眉が、かすかに寄った。

　そのときだった。

　無線に、ノイズが混じったのだ。

「霧、が……」

　と、掠れた声がした。

　ほとんどクリーム状と言ってもよいほどの濃い霧が、周辺を包み込んでいた。

　こちらの視界もあっという間に覆われ、世界のすべては曖昧模糊とした乳白色に入れ替わった。

「海上警察避けに、モーターボートには全部隠蔽の術式を組み込んでますけど、必要なかったかもしれませんね」

　緊張の色をよぎらせながら、凛が言う。

「自然の霧だと思うかね？」

「まさか」

　かぶりを振る。

　瞳には、好戦的な色が浮いていた。

　喧嘩を売ってきたものへ、絶対にそれ以上の仕返しをしてやる、という決意だ。彼女は時計塔でも、いやそれ以前からも、ずっとそうやって生きてきたのだろう。

　そして、

『エルメロイII世』

　霧のどこからか、声がした。

いっそ非人間的な──海賊島で、初めて語りかけてきたときの声音。

師匠は、小さく息をついた。

「どうやら、II世をつけてくれというお願いを覚えていてくれたようだ」

『エルゴを引き渡す気になったか』

単刀直入に、目的を告げてきた。

この場合、恫どう喝かつの対象、と言ってもいいかもしれない。

「アトラス院の錬金術師なら、私たちの答えぐらいは演算できてるだろう」

『よろしい』

思念が、相槌を打つ。

やがて、うっすらとした影が、霧の向こうに現れたのだ。

……いや。

最初、自分たちはその影の規模を見誤っていた。

あの海賊島で戦った骨の巨人か、もしくは骨の使い魔による船か、その類であろうとなんとなく目算を立てていたのだ。乏しい情報ながら、ラティオの能力が骨を操るものであることは分かっていた。また、「アトラス院から兵器を持ち出していない」という本人の証言も得ていた。

ならば、必然的に大きさは限られてくる、とそう考えてしまう。

しかし、霧の向こうに現れたのは、想像を遥かに超えた物体であった。

「あ……」

思わず、喉から声が漏れた。

それは、なんという威容であったか。

腐敗した海藻や貝がこびりついた船体は、優に百メートルを超えている。その船体を進めるための巨大なマストは十本ほどもあるのだが、こちらも破れ、へし折れ、かつての美しさや壮大さを偲ばせつつも、いまは恐るべき禍々しさを湛えているのだ。

　幽霊船。

　そういう言葉が、一番似合うだろう。

　欧米のものではない。意匠にせよ、船の形状にせよ、まったく違う古い文化のものだと、一目で知れた。しかし、いかなる建築技術による賜物か、はたまた何らかの神秘を利用したものか、現代の巨大船舶にも匹敵するほどの成果を、彼らははるか昔から達成していたのであった。

　凛の喉が、かすかに震えた。

「まさか……鄭和の……宝ほう船せん……」

　その名前に、聞き覚えがあることに気づいた。

　もともと、凛が探していた遺物の名が、それではなかったか。

　中国の明代において、国ひとつにもなろうかという艦隊を率い、何度も大航海を成功させたという英雄・鄭和。かの英雄が指揮していた宝船のひとつが、海に沈んでいるという情報を得たからこそ、彼女はこのシンガポールまではるばるとやってきたのだった。

　さらに、朽ちた船体は、稲妻状に白いもので覆われていた。

　骨、だとすぐに理解した。

　あの海賊島で戦った、骨の使い魔たちと同質のものが、とうに劣化して崩壊寸前だったはずの船体を繕っていたのだ。いや、単なる修繕で済まないことは、まともな乗員がいるとも思えぬ宝船が、こうして航行していることからも明らかだ。

『島を訪れる際には、間に合いませんでした。というよりも、初期想定では必要もありませんでした』

　ラティオが言う。

『ですが、万が一エルゴが段階フェイズ２に進んでいる可能性を危惧して、こちらの準備もしていたのです。当たってほしくはありませんでしたが、役には立ちました』

　彼女の扱う、骨の錬金術。

　それが、かつての宝船を現世に引き戻したのか。

　まるで、黄泉路から誰かを引き戻そうとする、神話の行いにも似た神秘。

　周囲にボートで布陣していた海賊たちにも、さすがに動揺の気配が浮き上がった。

　中世の亡霊船と、現代の海賊たち。

　そんな対峙を、誰が想像しただろう。無論、彼らも魔術に対抗するための基礎的な知識は教わっているのだろうが、だからといって、こんな相手を想定しているはずもない。

　しかし、

「ど、泥棒じゃない！」

　次の瞬間、高らかな非難の声が、濃霧に響き渡ったのだ。無線などなくても、全員に聞こえるだけの声だった。

　周囲の視線が集中したのは、海賊たちのコンサルタント、遠坂凛である。

「それ、わたしのよ！　わたしが先に狙ってたんだから！　わざわざシンガポールまで来て、丸一年も何のために粘っていたと思ってるの、この泥棒錬金術師！」

　つかのま、沈黙が海を渡った。

　ちょっぴりだけ、海賊たちと凛との信頼にひびが入った気がした。ほんのちょっぴり。

「ミス遠坂。その……」

　師匠が困ったように言いかけたときだった。

『放て』

　冷たいラティオの声は、自分たちが想像した通りの事態を引き起こした。

　炎の矢が、幽霊船から撃ち放たれたのだ。

「火か箭せん?!」

　凛が、目を剝いた。

　鄭和が生きた時代、すでに中国では火薬による兵器が実用化されていたという。ならば、これらの炎の矢もまた、ラティオが現代に蘇らせたものだったろうか。

「回避して！」

　凛の指示に、海賊のボートたちが応じる。

　驚愕で腰を抜かしていてもおかしくない状況を前に、彼らの操舵は完璧だった。火箭は中空で爆発したが、すんでに彼らは被害の外側へ逃れていた。

　それぞれ、船底に隠していた銃器を撃ち放つ。

　中のひとりは、ロケットランチャーを持ち出したのだ。

　海波を断ち切って、噴射ガスを放出する飛翔体が、宝船へと激突する。

　爆炎と衝撃が空気を揺るがし、巨船は微塵も揺らぎはしなかった。ばかりか、『強化』された自分の視界では、傷ひとつ入ってないと確認できた。

（あの骨の巨人と……同じ……?!）

　アッドの破城槌ですら砕けなかった骨の巨人。純粋な強度ではあれには劣るだろうが、似た理屈で船体を保護しているに違いない。ならば、海賊の持ってきた装備は、どれひとつとして通用すまい。

「逃げて！」

　凛が、無線機へと叫ぶ。

ほぼ同時に、自分もボートの側面へと陣取り、右肩の固フ定ッ具クを外す。

「アッド！　第一段階限定解除！」

「ヒヒヒヒヒ！　こりゃでかいな！　無駄に馬鹿でかすぎる！　まともにやりあった中じゃ、いままでで一番でかいんじゃねえかあ?!」

　雑言とともに、自分の手元で匣が変形する。

　死神の鎌グリム・リーパーと化して、こちらを目掛けた火箭を切り払う。続けて、エルゴが幻手を現出させ、自分の死角になる方向からの火箭に備えた。

「グレイさん、こっちは！」

「お願いします！」

　続けざまに、七本の火箭を切った。

　自分の鎌はこちらのボートを目掛けた火箭だけ。しかし、エルゴの幻手はさらに遠くへ伸びて、離散していく海賊たちを追った火箭をも薙ぎ払う。

　だが、すべてとはいかなかった。

　火箭のひとつが自分たちのボートを掠めて破裂し、大きく揺らしたのだ。

「凛さん！」

「な、なんとか……」

　ボートの制御を、かろうじて凛が取り戻す。

　真っ赤な顔で、力ずくながらハンドルを押さえ込んだ。

　しかし、ボートの挙動は落ち着くどころか、ガタガタとおかしな振動を繰り返し、迫る宝船を背後にしながら減速していったのだ。

「凛さん?!」

「は、ハンドルが……」

　すぽんと抜けたハンドルを手に、凛が硬直していた。

　どう見ても、取れていいパーツではなかった。というか、唖然とした凛の表情こそが、現状のまずさを物語っている。

「な、な、何もしてないのに壊れたのよ！」

「いいから寄越せ！」

　ぐい、と師匠がレバーを押し込んだ。

　加速したボートの背後の海面へ、何本も火箭が突き刺さる。発した衝撃波だけで吹き飛ばされてしまいそうだった。

　盛大にかぶる波も気にならない。

　飛沫と風圧で視界を埋められつつ、師匠が手探りで無理やりハンドルを差し込み、思い切り右に回した。

「モーターボート運転できたんですか、先生！」

「昔、ギリシャのあたりを旅していた頃にちょっとな！　後は、法政科の新人とゲームのシミュレーターでやっただけだ！　って、おいなんだこの加速性能！　お前、どんな改造をした！」

「海上で戦う可能性もあったから、やれるだけはしてますよ！　みんなのも含めて、エンジンは火の属性で補強、風の属性で対物理防壁に運転の制御補助も！」

「用意周到なのは結構だがね！」

　悲鳴のように叫び返し、師匠がボートを運転する。

　言葉の通り、経験はさほどではないだろう。ほとんどでたらめに切り返し、転覆寸前でエルゴがぐうんと幻手を振り回して、バランスを取る。

（━━駄目！）

　取り切れていない。

カーブの頂点で転覆する、と自分は感じた。

「リンさん！」

　刹那、ラナの声がした。

　本当に転覆する寸前で、海賊のボートの一台が寄り添ったのだ。

　まるで、そっと優しく掬い上げるように、そのボートがこちらを支えた。

　ひとつ間違えれば、激突して双方沈むところだったろう。それを克服したのは、互いの速度や、船体の重なり方を限界ギリギリまで調整した――操舵手の水際立った腕によるものであった。よもや、その操舵手が幼いラナであろうとは、自分もこの目で見るまで信じられなかったが。

「あ、ありがとうラナ！」

「後で、本島のパフェおごってよ！」

　大きく片手を振って、ラナのボートが離れていく。

　だが、火箭の雨はいまだやまぬ。凛の言っていた物理結界がある程度弾いてくれているようだが、長くは続くまい。

　真っ直ぐ目の前が、宝船。

　ここぞとばかりに、火箭がこちらへと集中した。

『争いにはしない。ラティオはここでお前たちを一方的に潰す』

（――誘い込まれた?!）

　高速思考と分割思考による疑似未来視からすれば、自分たちを追い込むことなどいかにも容易な事柄だったろう。転覆の回避で速度を失ったモーターボートなど、どうにだって料理できる。

「やはり、そう来たか」

　苦渋を吐き出すように、師匠が言った。

「グレイ、『槍』の抜錨を」

「でも……」

　誘い込んだ以上、相手はこちらの次の手も予期しているだろう。

　つまり、対策を考えているはずだ。たとえ『槍』を発動させたところで、それはむしろ決定的な敗北へとつながる一手になるのではないか。

　しかし、

「いいや、むしろ好都合だ。幽霊船を出してくるなんて考えなかったが、ここしかない。いま、この瞬間なら、食い潰せる」

　と、師匠がかぶりを振ったのだ。

　それで、自分も覚悟が決まった。

「分かりました。エルゴさん、迎撃をお願いします」

　顔を上げ、宝船を睨みつける。せめて心の中だけでは、あの幽霊船に負けぬよう。

　呼吸を整え、精神を集中させる。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……」

　自然と、呪言が唇を割った。

　一定のリズムと抑揚に支えられた、自己暗示を兼ねた言葉。

「Crave望んで……Deprave堕落させて……」

　徐々に、集中を高めていく。

　意識はすでに忘我の域にあり、舌は定められた呪句を追う。

「Grave刻んで……me私に……」

　ボートを目掛けた火箭さえ、もはや自分は認識していない。

　意識しているのは、ブラックモアの墓守として与えられた最大の秘宝のみ。それを解き放つための手順は、自分の細胞のひとつずつにまで染み込んでいる。

「Grave墓をほろう……for youあなたに……」

　古き神秘ミステルよ、死に絶えよ。

　甘き謎よ、ことごとく無と帰せ。

「疑似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。第二段階限定解除を開始」

　アッドの飄々とした声音が、無機質なそれへと変わる。いや、戻る。

　霊や魔力を食らう死神の鎌グリム・リーパーが、一旦匣へと戻り、そこから本来のカタチを取り戻す。ああ、アッドという疑似人格は、それを隠匿するための封印に過ぎないのだ。

　この……『槍』のための封印。

　自分もまた、その仕掛けのひとつなのだから。

＊

　波間に膨れ上がる光を、ラティオは宝船の甲板から見ていた。

「本当に、そんな超抜級の宝具を持ち合わせているだと……」

「ラティオお嬢さん！　あいつぁやばいぜ！」

　使い魔タンゲレが警告する。

　さしものアトラス院の使い魔の気配にも、淡い恐れに似たものが混じっていた。それだけの驚異をあの光は孕んでいた。

「分かってる」

　蒼い髪の女の手で、腕輪リングが鳴った。

＊

　変化が、生じた。

　宝船の船体の、骨の部分が一気に増殖する。防御力を上げるための措置だろう、というのはすぐに分かった。

　関係ない。

　その程度が今更何になる。

　ただ『槍』を起動するための機構システムとなった自分の耳に、同じボートからの声が届いた。

「本当に……あの子の……〈約束された勝利の剣エクスカリバー〉と同じ……」

　ああ、凛はその眼で見たことがあるのだろう。

　世界で最も有名な宝具といえば、そのひとつにアーサー王の〈約束された勝利の剣エクスカリバー〉が入ることに異論はあるまい。

　だが、それはアーサー王の数ある宝具のひとつに過ぎぬ。

　これは、〈約束された勝利の剣エクスカリバー〉とともに讃えられた、アーサー王伝説の最後を飾る宝具。

　円卓を裏切った騎士モードレッドを貫いた聖槍。

　恐れもなく、躊躇もなく、『匣』の内側から溢れた光を、自分は摑み取る。

「〈最果てにてロンゴ──」

　魔力が、渦を巻く。

　小島ひとつぐらいならば地図から消滅させかねないほどの、莫大な魔力が、自分の腕の中で渦を巻く。自分に親しんだ──この数年でなおさらに近づいてしまった魔力。

　残った真名を解放するとともに、投とう擲てきする。

「――輝ミけニるア槍ド〉――！　」

2

　眩い颶風が、世界を突き抜けた。

　飛翔する龍にも似た光の渦であった。

　太陽がこの海に現出したかと思うほどの、凄絶なるエネルギー。苛烈にして燦然たる、奇跡にも似た輝き。ひたすらに加速した魔力は破壊的な粒子となり、触れるものをすべて滅さずにおかぬ。

　錬金術による濃霧で閉ざされていなければ、強烈な閃光はシンガポール本島からも確認できたろう。

　光が落ち着いたとき、ラティオはコンマ数秒とはいえ、茫然と硬直した。

　鄭和の宝船が、その半ばを抉り取られていたからだ。

　船体の斜め下から甲板に至るまで、光に触れた箇所を文字通り蒸発させた聖槍の威力の凄まじさ。溶解面は今も赤熱し、ぶすぶすと煙をあげている。仮に隕石が衝突したとして、これほどの被害を与えることができるかどうか。

「それが、あなたがたの切り札ですか」

　ラティオは、小さく呟く。

「いえ」

　と、すぐに否定した。

　視線を、甲板の前方に据える。

「切り札を、避難に使いましたか」

　その声を、自分は宝船の甲板で聞いていた。

「グレイさん、大丈夫ですか」

「なん、とか」

　エルゴの言葉に、自分はやっとのことでうなずき、立ち上がる。

　宝船の甲板である。聖槍が炸裂した直後、エルゴの幻手を伸ばし、宝船へと引き込んでもらったのだ。

　ラティオの骨によって継ぎ合わされた甲板は、まるで異界の土地のようだった。波によって揺れつつも、まるで内臓のごとき得体のしれぬ柔らかさを併せ持っている。今も足の裏から、どくんどくんと鼓動を感じるようにさえ思った。

「まさか……幽霊船に乗り込むことに……なろうとはな」

　喘ぜん鳴めいを混じらせながら言った師匠も、似た感想らしかった。

　こちらは両手をついたままで、まだ立ち上がれない。師匠にしてみれば、限度を超えたアクションではあったろう。

　自分は、黙って師匠の前に移動する。

　アッドは死神の鎌グリム・リーパーへと戻っている。以前は、〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉を発動すれば、半日ほどはまともに動くことも難しかった。

　今は、違う。

　戦闘を継続することは、十分に可能。

　師匠を守ることは、できる。

「ラティオは、計算し尽くした」

　蒼い髪の女が言う。

「〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉のエネルギーが、焼き尽くす速度を、その位置を計測し、中心部の保護を諦め、周辺部の保護に徹した。それでもなお、かろうじて航行能力を維持している……というところまで削られた」

　実際、先ほどの自分はすべてを焼き払うつもりで、『槍』を撃っ

たのだ。

　それでも、耐え抜かれたのは鄭和の宝船の頑丈さによるものか。ラティオの錬金術によるものか。……それとも、その双方だったろうか。

　撃破できぬと見た師匠が合図をして、エルゴとともにこちらに乗り込んだのである。

「だが、あの宝具を撃たせてしまえば、こちらは物量で食い尽くせる」

　リングのはまった手を、ラティオがあげる。

　すると、まるでコンダクターの指揮棒のように、自分たちの周囲に骨の使い魔が湧いたのだ。あるいは蜘蛛、あるいは狼、あるいは蝙こう蝠もりのカタチをしていた。

「この船に乗ってしまった以上、あなた方の敗北が確定した」

　次から次へと、骨の使い魔が湧いてくる。

　さきほど直感した通り、この船はラティオの体内にも等しいのだ。あとは如何様にも始末できると、ラティオは考えているのだろう。〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉の一撃で宝船を破壊できなかった以上、勝敗はすでに確定したのだと。

　それが、高速思考と分割思考による未来視の結果。

「ははは、危うく一撃で宝船ごとやられるところだったがな！」

　ラティオのすぐ前に、骨の巨人が現出した。

　タンゲレと呼ばれた、錬金術師の相棒。

　器用なことに、すっぽりと空いた眼窩が片方閉じて、開いた。ウィンクのつもりだったかもしれない。

「改めて言おう、ロード・エルメロイII世。エルゴを差し出すがいい。アトラス院は時計塔と事を構えることを望んでいない」

　無機質なラティオの声音が、甲板に響く。

勝利宣言というには、冷静に過ぎたかもしれない。同時に、それは絶対的な摂理のごとく、こちらの芯を打ち据えた。

　今にも膝を折って、うずくまりたくなるほど。

　だが、自分の隣に、もうひとり立ち上がったのだ。

「エルゴ、さん」

「僕が、連れてきた人たちです」

　半透明の幻手を構え、若者は雄々しく顔を上げた。

「だから、僕だけは折れられません」

「健気なことだな、神喰い」

　タンゲレが、ぐいと腕を回す。

　海賊島の戦いで、ふたりは五分だった。しかし、高速思考と分割思考によって、動きを見切られてしまった今となってはどうか。まして、足場となる幽霊船すら自分たちの敵で、無数の使い魔に囲まれたこの状況では。

　じわじわと、包囲を狭めてくる使い魔たちを前に、師匠が口を開いた。

「やめろ、エルゴ」

「でも、先生」

　視線を切らず返したエルゴに、まだうつむいたままの師匠は淡く微笑した。

「これは、私たちの勝ちだ」

「え――」

　訊き返すよりも、次の展開が早かった。

「そこぉ！」

　マストの上に隠れていた凛が、飛び降りたのだ。

不意打ちざまに、手にした宝石を叩きつけるが、タンゲレは巨体に似合わぬ敏捷さで身をかわした。

「残念！」

　おどけたようなタンゲレの声に、にっと凛の唇が笑みを刻む。

　かまわず、女魔術師は新たな呪文を唱えた。

「Vorbereitung,準備、 neunzehn,十九番、 achtzehn,十八番、 siebzehn,十七番、 sechzehn,十六番、 fünfzehn十五番──」

　宝石から、魔力の波が甲板に広がった。それと同時に、目に見えない何かが、宝船の内側へと侵入したのだ。

　意図を察して、ラティオが叫んだ。

「タンゲレ！　論理感知網、エーテル取得範囲をそれぞれ百倍に拡大！」

　すぐ、骨の巨人が反応する。

「お嬢さん、こいつは──」

「理解がずいぶん遅かったわね、アトラス院。さっき逃げたうちの海賊たちに、触媒になる宝石を持っていてもらったのよ」

　凛の命令で逃げていた海賊たち。

　彼らはそれぞれひとつの宝石を握り込んでいた。

　もしも空中から見れば、その軌跡と全体のカタチが五芒星を描いていることに気づいただろう。

「高速思考と分割思考を教えてもらったものね。お返しに時計塔の魔術も教えてあげる。わたしたちは世界に刻みつけられた魔術基盤に指令を送り、魔術式を起動させる。ならば、魔術基盤にコンタクトする魔法円が大きいほど、魔術は何重にも織り込める──！」

　凛の左手で魔術刻印が駆動するのを、自分は感じた。

　その魔術刻印を中心として、途轍もなく巨大な魔法円が、鄭和の幽霊船に向かって収束していく。

「Der Schlüssel sind Zahlen.鍵は数字である

　Der Schlüssel ist die Welle.波である

　Der Schlüssel sind die fünf Farben五つの色である」

「させるな、タンゲレ！」

「支援しろ、グレイ、エルゴ！」

　ラティオの指示と、師匠の指揮が同時だった。

　凛を狙ったタンゲレの拳を、エルゴの幻手と自分の鎌が交差して受け止める。

　その真下で、凛が最後の詠唱を口にする。

「Die fünf Elemente.五つの要素よ

　Aus Gold wird Blei.黄金を鉛とせよ

　Hühner in Eier verwandeln.鶏を卵とせよ

　Drehen,回せ、 drehen,回せ、 drehen,回せ、 drehen,回せ

　drehen Sie den Kreis rückwärts円環を逆しまに回せ！」

　その呪文が言い切られるか否か。

　異変は、けして炎や氷といった形を取らなかった。

　代わりに、タンゲレをはじめとして、こちらを取り囲んだ骨の使い魔たちが、動きを止めたのだ。不気味に蠢しゅん動どうしていた宝船すら、その機能に致命的な不具合を生じた証拠に、突然航行を停止した。

　ラティオが、低く呻く。

「まさか、これは……」

「内的干渉ハッキング」

　と、師匠が囁いた。

「アトラス院の錬金術といえど、神秘に根ざすものは魔力で動いている。君の骨──エグゾフォルムなんかはその典型例だ。肉体に根ざしているからこそ、魔術基盤もなしで強固に成立する神秘。ならば、君の肉体の外に出た部分については、むしろ外部からの干渉を受けやすいんじゃないか？　そういう風に考えたんだ」

「だからといって、ラティオのエグゾフォルムに介入するなど、まともなやり方でできるはずがない。それはでたらめに数字を打ち込んで、何十桁ものパスワードをクリアしろというようなものだ」

「そのとおり。魔術には固有の波長と術式があり、このふたつが嚙み合わないことには他人の術式に干渉することなどかなわない。未熟な格下相手ならともかくね。だが、私の弟子にはこれが得意な奇才がいてな。ある種のコツを知っていた。──逆に言えば、波長と術式を特定できればやりようがあると」

（波長と、術式──！）

　その言葉で、自分も思い当たった。

　──『魔力の波長、魔術の波形や術式の痕跡を確認するための魔術礼装だ』

　観測球ルクスカルタ。

　詐欺同然の行為で、あの礼装を利用したのはラティオの位置を暴くためだけではなく、この一手のためであったのか。

「くわえて、ミス遠坂の属性は、五大属性すべてアベレージ・ワンなんて代物でな。これを単なる魔術の才能と見ると、どのような術式に手を伸ばすかで悩ましい。なにしろ、虚属性と無属性なんて反則さえ除けば、ほぼあらゆる魔術に適性があるということだからだ。だけど、逆に考えれば、別の才能が浮き上がってくる。──つまり、彼女は現存するほとんどの魔術に干渉することが可能なんだ」

「褒めてるように聞こえませんね。先生」

　抗議する凛が、不敵に唇を歪めた。

最初から、師匠と凛はこれを狙っていたらしい。

〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉を耐え抜いた相手が、ほんの一瞬でも、防御が崩れた状態のまま油断するのを。

「アトラス院の高速思考と分割思考は確かに恐ろしい。十全に働けば、それは確定した未来視にも等しい。演算で測定できるのはせいぜい数秒先だろうが、戦闘の最中にそんな能力を発揮されてはこちらの打つ手はほぼ封じられる。前回〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉を撃たせてももらえなかったように」

　ぽそり、と師匠が呟く。

「あなたが十全であれば、こんなハッキングは仕掛ける前に見破られたろう。……だが、その処理能力は、聖槍からの防御で食い潰されていたんじゃないか？」

　わざと受けきれるタイミングで、〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉を放たせた。アトラス院の死角から、凛の魔術が忍び込めるように。

「ラティオを解体していたと言うのですか」

　内的干渉ハッキングが本人の動作にまで支障をもたらしたのか、膝をついたラティオに、師匠は嫌そうに眉をひそめた。

「業腹だが、私はそういう異名で知られているらしい」

　略奪公。

　しかし同時に、これが恐るべき賭けであったことも、自分には分かった。

　かすかに、師匠の手が震えていたからだ。考えてみれば、聖槍の威力がアトラス院の思考リソースを食い潰せるかどうか、凛が魔術ハッキングを成功させられるかどうかなど、その場になってみなければ分かるはずもない。

　他人を戦いに巻き込みたがらぬ師匠が、これほどの賭けに身を投じるのに、一体どれほどの葛藤と覚悟が必要だったろう。

　それでも、

「あなたに問いたい」

　と、真っ直ぐに師匠が言う。

「エルゴに、一体何をしたのですか」

「……君主ロード。それはあなたが自分で紐解いたのでは」

　神を喰らったのだと、あの海賊島で、ラティオを前に師匠は喝破した。

「あんなもの、仮説に仮説を重ねた蜃気楼だ。かろうじて本質の欠片を捉えていても、実態には程遠い。私の生徒に必要な答えにはなりえない。……だが、いずれエルゴに記憶飽和が起こるのだけは確実だろう。どうやったら、それを避けられる？」

「…………」

　しばし、彼女は沈黙した。

　いままでとは性質の違う沈黙であった。

「エルゴを守るのは生徒だからだ、と言ってたな、ロード・エルメロイII世。ラティオには分からない。教師とはそこまでするものなのか」

　講師をやめたいと言っていた師匠に、そんな問いかけがなされるとは。

　今度は、低く師匠が呻いた。

「私は……」

　一度眉間を押さえ、ごつごつした石を吐き出すように、言葉を投げかけた。

「私が、納得できる自分で、ありたいだけだ。後悔ばかりのこの人生で、せめて誰もいないときぐらいは、こっそり胸を張っていたいだけなんだ。私が教師としてしがみつきたいのは、そんなちっぽけでくだらない矜持なんだよ、アトラス院の錬金術師」

　その言葉が、錬金術師にどのような意味があったかは分からな

い。

　高速思考や分割思考が当たり前デフォルトである彼女からすれば、師匠の答えなどとうに予測していたものかもしれない。そもそも同じ言葉を使っていても、それほどに処理能力の違う相手なら、もはやその人格は自分たちとは違う在り方を築いているのではなかろうか。

　しかし、数秒ほどで、うつむいたままのラティオが口を開いたのだ。

「エルゴの記憶飽和を止めたいならば、神を還すしかないだろう」

「還す……？」

「エルゴの喰らった神は、いずれも自然の在り方より生じたものだ。かつて喰らわせた者たちも、そんなことは考えもしなかったろうが、理屈からいえば、自然に戻すことは可能なはずだ。そのために必要な術式や人員は、ラティオにも見当がつかないが」

「……ラティオ、さん」

　これは、エルゴが目を剝いたのだ。

　つかのま、幽霊船にはそぐわない、平穏の気配が流れたかのように思えた。あれほどの戦いの直後とは考えがたい、静かな気持ちが、自分の胸を満たしていた。

　しかし、

「……おいおい、そりゃあ喋りすぎだろ」

　裁きの声は、高みから降ってきた。

「協定違反じゃないか、クルドリス」

3

　鷹であった。

　こんな濃密な──しかも魔術の霧の中を、ただの鷹が迷い込むはずもない。まして、自分たちは、以前もこの鷹に遭遇していた。

　つまり、前触れもなく、エルゴの頭部を破砕されたときのことだ。

　宝船のマストへと降り立ち、鷹は半壊した甲板を見下ろす。

「順番は守るつもりだったがね。神喰いの内容については、妾あたしたち共通の秘密だろう？」

　弄いらうように、その鷹が声をかけたのだ。

「またか、ムシキ」

　今回の異変は、それにとどまらなかった。

　ごお、と風が唸ったのだ。

　それは局地的な嵐となり、幽霊船を押し包んだ。

　風速にすれば、一体どれだけの数値になったか、想像もできない。

　幽霊船は天地がひっくりかえったかと思うほどに揺さぶられ、悲鳴をあげた。アトラス院の骨で補強されていたはずのマストはめきめきと音を立てて、あるいは軋み、あるいは傾き、あるいはへし折れていった。

「な、何これ……！」

　途轍もない風を前に、船べりにしがみついた凛が、それでも吹き飛ばされそうになって、慌ててエルゴの幻手が摑み戻した。師匠は自分がかばって、死神の鎌グリム・リーパーを甲板に食い込ませる

ことで、かろうじて堪える。

　しかし、停止していた骨の使い魔たちは耐えられず、甲板から引き剝がされて、嵐に呑み込まれてしまったのである。

「シンガポールに、嵐だと……！」

　暴風の中で、師匠が顔を上げる。

　長い黒髪をひきちぎらんとするかのような、凄まじい風であった。

「コリオリ力を無視してるぞ！　赤道付近で、こんな巨船を飲み込むほどの台風が起こるものか！」

「じゃあ、これは……」

「純然たる神秘だ！　信じがたい規模の！」

　師匠が怒鳴り返して十数秒ほども経たず、ほぼすべての骨の使い魔たちが甲板から消え失せ、それとともに風は嘘のように吹きやんだ。

　いまだ周囲は霧に包まれていたが、幽霊船の上空だけがぽっかりと蒼い。

　その青空を背に、鷹は悠々と舞い降りてきたのだ。

「いい掃除になったな。ああ、感謝してくれていいぞ」

　言葉とともに、猛禽はヒトガタへと変じた。

　白い女だった。

　まるで、純白の炎のよう。

　輝くような肌には、痣とも入れ墨ともつかない蒼い模様が走り、それも女をヒトガタの炎のごとく演出している。両手首には鎖のつながった無骨な手枷をはめられており、右耳には対照的に美しい金鈴をつけていた。

「エルゴに神を喰らわせた、三人の魔術師」

師匠が、言う。

「お前が、ふたりめか」

「まあ、そりゃ言わずとも分かるだろ。時計塔の君主ロード」

　女が肩をすくめる。

　対して、

「まだ、ラティオの順番のはずです」

　と、アトラス院の錬金術師が顔をあげた。

　こちらは体内の骨を、楔のごとく甲板に打ち付けることで、耐え抜いたらしい。

　白い女は、うんうんと二度うなずいた。

「だからさ、お前は終わってるだろ？　ちょっとでも恥を知るならここでさがっておけ。そう、これは哀れみってやつだ。かつて一度は腕を認め、ともに研究した同胞の子孫がこんな惨めな有様だなんて、直視したいものじゃないしな」

「ムシキ」

　それ以上喋るな、というラティオの威圧に、ムシキが肩をすくめる。

「いくら、クルドリスが滅びるだけの家系だからってさ」

「お前……っ！」

　ラティオの身体が、弾かれるように跳んだ。

　足から飛び出た骨を利用した跳躍だった。途轍もない速度で伸びた骨の反動で、彼女の身体を打ち出したのだ。

　その手のひらから飛び出したのは骨の剣。

　弾丸にも紛う突きを、しかし軽々と女は手枷で弾いた。

「はは、愚かしい。これがアトラスの六源──六賢のなれのはてだっ

て？」

　続けて、五度、骨の剣が振るわれた。

　自分たちとの戦いでもまだ余力を残していたのかと思われる、稲妻のごとき連撃。おそらくは身体の内側の骨を直接操り、限界以上の性能を絞り出したのだろう。

　さらに高速思考と分割思考もあわせて、相手の回避行動も演算してたはずだ。

　なのに、女──ムシキはそのすべてを手枷で受け切ったのだ。

「つまりさ、計算に頼ってる段階で、致命的に遅いんだ。いちいち演算して行動に移してなんて手間踏むくらいなら、最初から骨に考えさせておけよ。……で、時計塔の君主ロードも見たよな。手を出したのはこいつら。なら、順番はご破算だ」

　後半は、わざとらしく師匠を見て言った。

　その手が、攻撃に移るより早く、

「内的干渉ハッキング除去……クリア！」

　すでに停止していた凛の術式から自己修復して、タンゲレが立ち上がったのだ。

「ラティオお嬢さん！」

　骨の巨人が、横合いから割り込む。

　ムシキと呼ばれた女と、両手をつかみ合う組打ちとなった。

　女もかなりの長身だが、二メートルを優に上回るタンゲレが相手となれば、つかみ合った段階で姿が隠れてしまう。

　だが、それもほんの一瞬。

　女のたおやかな腕が、ぐいと巨人を圧したのだ。

「つ、あ……！」

　今度こそ、自分は目を剝いた。

痛みなど知るはずもない骨の巨人が、苦悶の声をあげたのだ。

「項羽の剛力はこの程度ではなかったぞ。虞ならば、もっと興趣をそそるいなしかたをしただろうさ。二千年以上を経て、お前はどちらにも至ってないのか」

　前者の名前は、自分も知っていた。

　古代中国に名高い、楚国の武将。

　ならば、虞とは、その妻であった虞美人のことだろうか。「虞や虞や、汝をいかんせん」とうたわれた女人が戦に長けていたなどという逸話は聞いたことがないが、ムシキが見てきた歴史とはいかなるものだったろう。

　めきり、と音があがった。

　骨の巨人の腕が、紙粘土のように、二本とも肘からもぎ取られたのだ。

「ははは！　いくらなんでも軽すぎるだろう！」

　手枷から鎖が伸びた。

　元の長さの何倍にもなった鎖が、たちまち巨人とラティオの体をもろともに拘束し、扇風機のように振り回した。甲板の上空へと振り回し、思い切り加速をつけて逆ベクトルで振り落とす。

　落下の先に、折れたマストの残骸が突き出ていた。

「ラティオ……お嬢さん……！」

　直前に、骨の巨人がかろうじて動いた。

　鈍い音がした。

　ゆっくりと鎖が外された後、ラティオが甲板にずり下がった。抵抗の結果、巨人の体だけがマストに貫かれていたのであった。

「タンゲレ！」

「はは、ご無事で何より。しかし、これは動けねえな……！」

貫かれたまま、巨人が言う。

　以前頭部を吹き飛ばされた時もすぐさま修復したのに、今の巨人はもぎ取られた腕が回復する様子すらなかった。

「おいおい冗談だろう？」

　と、白い女は眉をひそめた。

「ずいぶん久しぶりにじゃれただけだぞ。いくら神秘が弱っていようが、お前ら、これはないだろう。鬱憤を晴らせるかと思った妾あたしの身にもなってくれ」

　うそぶいて、ラティオの方に歩み寄ろうとしたときだった。

　凛が、その前に立ちはだかったのだ。

「あなたたち、同胞じゃないの？」

「聞いてわからなかったかな？　先祖とはいささかの縁があったが、今は協定の名残で縛られているだけでね」

「そう。でも、彼女はあなたに敬意を払っているように見えたわ。それをあなたが挑発して、娯楽まじりに踏み潰したように。わたしだってそういうことはするけれど、ちょっと悪辣に過ぎないかしら」

「だったら、なんだ」

「気に入らないって言ってるのよ！」

　凛の手から、赤い光が放たれた。

「Anfangセット！」

　薔薇のごとく広がった宝石が、それぞれが螺旋を描いて、女へと殺到する。

　込められた魔力と呪いは、今までの幾層倍。ラティオに向けて準備していた切り札のひとつだっただろうか。

「Sechs,六番、fünf,五番、vier,四番、Verzehren Sie den Schatz全財投下！

Vernichten Sie den Schatten des Feindes我が敵の影ひとつ残さず！」

　目の前で、数個の紅玉ルビーがまとめて炸裂した。

　今の一幕を見て、凛は初撃に最大限の威力を注ぎ込んだと言えるだろう。魔力込みの評価であれば、先の海賊たちが使っていたロケットランチャーを遥かに凌駕する威力だった。小さな家の一軒ぐらいは十分に吹き飛ばし、アトラス院の技術で補強された宝船だろうと、この宝石魔術ならば傷つけられたはずだ。

　女は、虫でも払うように手を振っただけであった。

「ああ、雪合戦のつもりか？　嫌いじゃないぜ。なんたって害がない」

　握り込んだ拳から、親指を弾き出した。

　おそらく、圧縮した空気をぶつけただけだ。魔術でもなんでもない。

　一撃で、凛の身体が吹き飛んだ。

　傾いだマストに直撃して、小さな呻きとともに倒れ込む。

「凛さん！」

　うつむいたまま、彼女は起き上がらない。もちろん魔術刻印は主人の異常を感知して、即座に治療を行うはずだが、すぐに復帰できるとは思えなかった。

　圧倒的な、暴力だった。

　さきほどの師匠とラティオは、盤外をも捉えて智慧を尽くした戦いをしていた。

　しばしば時計塔でも言われるように、魔術師同士の戦いは始まる前に終わっている、という在り方そのものだ。高速思考と分割思考、そのリソースを潰す聖槍、甲板に引き込んでの集団戦法、海賊たちも使って仕掛けた内的干渉ハッキングと、裏の裏のそのまた裏を取り合った。

なのに、この女はそんな不文律などものともせず、魔術も錬金術も踏み散らすように暴虐の限りを尽くしているのだ。

「どう、して……」

　喘ぐように呟いた自分に、ムシキは首を傾げた。

「何か不思議か？　神秘はより強い神秘の前に無効化される。こいつは、神代だろうが現代だろうが変わらぬ理だろう。アトラス院のエグゾフォルムも、さっきの嬢ちゃんのガンドも、妾あたしの肌ほどの神秘はない。そりゃあ当然だろうよ」

「……まさか、と思っていたが……」

　わなわなと震えた師匠の唇が、続く言葉を漏らした。

「仙人、か……」

「どういうことです？」

「大陸東方に根ざした思想魔術は、現代ではほぼ螺旋館に属している。だが、ごく一部、神代からの『盤』への接続権を残したものたちが、山さん嶺れい法廷と呼ばれる組織に属しており、十官と呼ばれる幹部たちは正真正銘の仙人なのだと」

　そうだ。

　ルクスカルタを使う前、師匠はそんな話をしていた。もうひとつの組織が人界に関わることはまずないとか。あれは仙人の領域だからとか。

「そして、もしも、仙人にまつわる数々の噂が真実なら、それは生きながらにして神秘そのものの体現だと……その身はおろか、こぼれた吐息ひとつ、涙の一粒まで例外なく強大な神秘を纏うのだと」

「いいやあ、妾あたしはとっくに法廷を追放されてるんでね？　十官には数えられないさ」

　困ったように、女は白い髪をかいた。

　身動きが取れない。

まるで、桁が違う。

さきほどのラティオも無論強敵であった。

しかし、このムシキは根底からして異なっている。岩と山脈を比べるようなものだ。岩を拳で砕くのは極めて困難だろうが、山脈を相手に砕くことを考える者はいまい。それほどの圧倒的な違い。

動けなくなった自分たちをよそに、ムシキは身を翻し、赤毛の若者へ歩み寄った。

エルゴの頬に、そっと指先を滑らせた。

「よお」

ラフな言葉に似合わず、女の顔に浮かんだのはあまりにも艶美な笑みだった。

そんな情動には疎い自分ですら、命のかかった状況を忘れて見惚れかけてしまったほどだ。傾けい城せいとはまさにこういう女性を表現するための言葉だろう。

赤い唇を耳元に寄せ、女は囁いた。

「ずうっと腹が減ってたんだろう？　目覚めてから本当に満足したことなんて、一度もなかったんじゃないか」

「あ……あ……」

頬に触れられたまま、エルゴが呻く。

彼の内側の何かを、ムシキが揺り動かしたことだけは間違いなかった。あたかも、蝶を誘う食虫植物のようでもあった。捕まれば最後と分かっていても逆らい難い、そんな魔性が女の横顔には潜んでいた。

ちら、と女の瞳がこちらを見やった。

異様な目であった。

虹彩は黄金色で、眼球は真紅。

炎の中で、金の円環が浮いているかのようにも見えた。

「その娘を喰えよ」

　と、彼女は促したのだ。

「まったく、妾あたしともあろうものが寝ぼけていたかね。あの宝具を見るまでは気づかなかった。──こんな娘がそばにいるなら、お前、ずいぶん苦しかっただろ。我慢して、ずうっと溜めっぱなし、それはよろしくない。これでも妾あたしはお前の母親みたいなものなんだからな。息子が苦しんでいたら、解放してやりたいと思うのは自然なことだろう？」

（……母親？）

　衝撃的とも思える告白だが、それよりもうひとつの言葉が、自分の心臓に刺さった。

（……苦しかった？）

　その意味が分からない。──いいや、分かっている。

　その意図が分からない。──いいや、分かっていた。

　自分の中で、ヨモツヘグイという言葉が繰り返された。ヨモツヘグイとは神の肉であったという師匠の仮説。ならば、彼の飢えを満たせる食物とは何なのか。

　黄泉の国に通じた墓守である自分は、とっくに知っていたのではないか。

「喰らえよ、エルゴ」

　ぎこちなく、エルゴの顔がこちらを向いた。

　何もかもに絶望した、そんな表情をしていた。けっして解放されたなどという悦楽ではなく、抱えていた衝動について、ただ答えだけを示されてしまったという虚無。

　……ああ、そうだ。

　神を喰らったこの若者は、ずっと喰らいたかったのだ。

　自分の中の、英雄を。

私たちは似た者同士なんかではなかった。

　むしろ、その逆。喰おうおもかのみと、喰われるものひつじの関係。

「グレイ！　おい、てめえしっかりしろ！　いいから逃げろ！」

　アッドの声さえ、遠い。

　ムシキと呼ばれた女の瞳のせいだ。見つめられてから、自分はぴくりとも動けなくなっている。あれもまた魔眼の一種だったろうか。

（……火か眼がん金きん睛せい）

　不意に、そんな名前が脳裏に浮かび上がった。

　以前師匠の講座で聞いたことのある、大陸東方の伝承にあらわれる眼球だった。言われてみれば、あの話にも仙人や仙境という単語が出ていた。できたら凛やエルゴも一緒に、師匠の講義を受けたかったなどと、益体もない想いが胸をついた。

　ゆっくりと、エルゴがこちらに歩いてくる。

「エルゴ！」

　師匠の叫び。

　それさえ、今の自分には届かない。

　ごめんなさい。守れなかった。許してください。

「グ……レイ……さん……」

　どうしようもなく、若者の顎が開く。粘度の高いよだれが、だらだらと歯を垂れて、形の良い顎に流れた。野獣とは案外と綺麗なものだったんだ、と不思議な感想を自分は抱いていた。

　泣いていた。

　こんな危地にありながら、その涙だけは美しい。

　目の前が、真っ赤に染まった。

＊

　真っ赤に染まった視界。

　生温かいものが顔にあたった。

　しかし、いつまでも痛みは訪れなかった。

　おそるおそる、手を持ち上げる。顔にかかったものをぐっと拭うと、目の前には信じられない光景が広がっていた。

　己の、生身の腕に、エルゴが噛み付いていたのだ。

　大きく開いた顎から、ぞっとするほど赤い血がこぼれていく。ぎりぎりと肉を噛み潰していく歯には、骨まで砕けよとばかりに、力がこもっていた。

「エルゴさん！」

　若者の口元は、ピエロのように真っ赤。

　なのに、瞳だけは今にも泣き出しそうな子供のようで。

「おい、エルゴ！　てめえ！」

　ムシキが叫んだ直後、ぐちっ、と音がした。

　若者の腕から、肉が削げ落ちた音だった。赤黒い肉の間に、白い骨が剝き出しとなり、驚くほどの血が嵐で洗われたばかりの甲板を汚した。

　そのまま、エルゴの体が横倒しになる。

　刹那、金縛りが解けたのを感じた。

　同じく拘束から解放されたものか、自分と同時に、師匠がエルゴのそばへ駆け寄った。

「よく耐えた、エルゴ」

「……先生の……生徒ですから」

　赤毛の若者の弱々しい声が、今はひときわ胸をついた。

「先生は……知ってたんですよね……僕の……飢えの……正体……」

「ヨモツヘグイを喰らった者が黄泉から出られなくなるのは、その食材以外喰えなくなるからだ、という説がある。だとすれば、神喰らいをなした君が、同様の現象に襲われてもおかしくあるまい。いうなれば、喰しょく神しん衝動ともいうべきだが……」

　師匠の言葉に、エルゴは儚げに笑った。

「はは……恥ずかしいなあ……グレイ……さんには……前も……恥ずかしいところを……見られたのに……」

　屋根でのことを、思い出した。

　ひとりぼっちで歌っていたエルゴ。恥ずかしいと顔を押さえていたエルゴ。

　──ゆうれいなんて　こわくない

　幽霊が、神様のことだって自分は思っていた。

　知らない誰かが、エルゴの内側にいるからだろうと。

　でも、それは……ひょっとしたら飢えの別名ではなかったか。ほかの誰とも共有できない、神様を食べたいという衝動を、必死でエルゴは堪えていたのではなかったろうか。気づいたらいつも寝てるのよ、と凛が話していたのも、起きている間常に襲ってくる飢えに、耐えるためだったのでは。

　だからこそ、師匠はよく耐えたと言い、エルゴはあなたの生徒だからと答えた。

　ここまで自分が目をそむけていたことに、ふたりは最初から向か

い合っていた。

「先生……このままだと……また……僕の手が暴走を……」

「私がさせない」

　と、師匠が断言した。

「だから、君は……月を想っていたまえ」

　観月法。

　一瞬、エルゴの動きが鈍くなる。

　血まみれの若者は、師匠が教示した瞑想法によって、眠るように瞼を閉じた。

「おいおい、なんだよこれ」

　と、白い女が大げさにため息をつく。

「結構期待して来たんだぜ。なのに、どいつもこいつも肩透かしだ。最近の極東だと、のれんに腕押しとか言うんだっけか？　くだらない愁嘆場でお茶を濁すなよ」

「……あなたは」

　立ち上がった師匠が、ムシキを見やった。

　ただし、その瞳からは視線をそらしている。彼女の眼の恐ろしさは、たった今味わったばかりだ。

「目的はなんだ」

「ん、目的？」

　と、女が首を傾げた。

「アトラス院の錬金術師も君も、エルゴを引き渡せという。だが、わざわざエルゴを襲う順番を決めているということは、それぞれの目的は異なっているんだろう？」

「ああ、なるほど」

ぽん、とムシキが手をうった。

「まあ、他のやつらに比べると、妾あたしはずいぶんシンプルなんだが……いや、恥ずかしいものだな。この歳になって、また恥じらいを味わえるとは、長生きにもたまには意味があるらしい」

　同じような言葉を使いながら、エルゴに対したときとはまるで異なる印象だった。

　女の唇が、ぐいと歪んだ。

「喰いたいんだ」

　雪のような牙が、剝き出しになっていた。

　虎よりも白く、狼よりも鋭く、悍おぞましい。

「喰う、だと」

「ほら、お前たち流でいえば食物連鎖ってやつだよ」

　人差し指をくるりと回して、ムシキはとくとくと話す。

「神をエルゴが喰らう。そのエルゴを妾あたしが喰らう。なかなか乙だと思わないか。百年ものの美酒どころじゃない。何千年と時間をかけて、醸造した神秘の結晶だ。蟠ばん桃とうですらこうはいかんだろう。こりゃあ食われる方も誇りに思うべきじゃないかね」

「ふざけないで！」

　その叫びは、自分の喉から発されていた。

　自分でも驚いてしまったけれど、それでも死神の鎌グリム・リーパーを握りしめ、一歩踏み出した。吐き出した言葉を飲み込むつもりなど、毛頭なかった。

「そのとおりだ、グレイ」

　と、師匠が追随して、肩に手をおいてくれた。

「私の生徒だ。ならば君の後輩でもある。こんなふざけた言い分を通せるか」

「やれやれ。師匠も弟子も、目が腐ってるのか？」

　うんざりという感じに、ムシキは舌打ちする。

　風が吹いて、彼女の白い髪を煽った。

「今更、何をやるっていうんだ。現代に詳しいわけじゃないが、魔術の腕ぐらいは見たら分かる。ラティオとの戦いで、別に手を抜いていたんじゃないだろ？　内弟子はともかく、あんたに何ができるっていうんだ、君主ロード」

「私にできることだよ」

　言って、師匠は微苦笑した。

　あらためて息を吸い、今度こそはっきりと告げる。

「ラティオとも似たことを話したがね。どうやら、私は教師なんだ。何度も否定しようとしたが、どうもやめられないらしい。だから、教師としてフーダニットを解くだけだ。ひょっとしたら、その逆かもしれないが」

「はあん」

　師匠の言葉の意味が分かったのか、かすかに女の声が弾んだのだ。

「なるほどなるほど。そういうつもりか。だけど、そんなのを妾あたしがぼーっと見てやってる義理もないぜ」

「……手伝え、ラティオ・クルドリス・ハイラム」

　マストに貫かれた骨の巨人のそばで、ラティオが視線をあげた。

「お前の目的がどうにせよ、こいつにエルゴを奪われるわけにいかないんだろう！」

「分かりません、君主ロード」

　アトラス院の錬金術師が、かぶりを振る。

「どうして、そんな発想をするんですか。ラティオはあなたと戦ったばかりですが」

「あるものを使おうとしているだけだ！　どれだけ惨めだろうが！　無様だろうが！　私に力がないなら、他人に頼るしかないだろう！」

　師匠の言い分は、まともな人間なら噴飯ものの言い訳かもしれない。

　それでも、弱者のあらがいとはこのようなものだろう。膝を抱えて、部屋の隅に蹲うずくまっているのが嫌ならば、どんな方法だろうが手を伸ばすしかない。

　しばし押し黙ってから、ラティオは立ち上がった。

「……この鄭和の船にいる間、だけです」

「十分だ」

「ふうん。即席の連合軍か」

　女が顎を持ち上げる。

　首の下の蒼い入れ墨を露わにしつつ、じゃらりと手枷の鎖を鳴らす。

「いいね。それぐらいじゃないと歯ごたえがない。せいぜい頑張ってみせろよ」

　心臓が、どくどくと高鳴った。

　こんな恐怖を抱くのは初めてであった。己より強大な相手と向かい合うのは何度もあったが、この女の底知れなさは別格だ。『強化』によって統制しているはずの神経は大いに乱れ、死神の鎌グリム・リーパーを握る手には、汗が滲んだ。

　だけど、そんな自分の背後から、

「聞いているか、エルゴ」

　と、声がしたのだ。

「……私と君の、個人授業をはじめよう」

　横たわった若者へ、ひどく穏やかに師匠が話しかけたのであっ

た。

＊

　水の中に、彼は潜っていた。

　水の中に、彼は揺蕩っていた。

　苦しくはない。

　ただ、眠い。

　眠気に逆らおうという気持ちはなかった。もしもこの眠気が去ってしまえば、もっと恐るべきものが己を満たしてしまうだろうという確信があったから。

　だから、永遠にこのままでもよかった。

　あなたは海を漂流していたのだ、と凛は言った。

　再び海に戻るだけのこと。

　きっと、その方がみんな幸せだ。

　傷つくものはいない。誰かを傷つけてしまう恐れもない。ただまるまって、蒼く清浄な流れに身を任せていればいい。

　なのに。

　どうして、眠ってしまうのを拒んでいるのだろう。

（……どうしてだろう）

　彼が、思う。

　正しい答えを選べない。

　どう考えても、他の選択肢なんかないのに。

海月くらげみたいに漂いながら、彼はぼんやりと悩んでいる。意識が途切れてしまう限界を待って、水の中を流れている。

　ついに意識を手放そうとした寸前、声が届いたのだ。

「……私と君の、個人授業をはじめよう」

（……あ）

　約束が、脳裏に浮かび上がった。

　期間限定の生徒になると。教師と生徒ならば、当然そのつながりは授業であるべきだろう。そして、教師が諦めてないのなら、生徒は教室に戻らねばならない。

　ほのかな光が、海中に灯った。

　きっと、月明かりだろうと思った。

　観月法。心に想った月が反映されたのだろうと、なんの根拠もなく考えた。

　そして、

「エルゴ」

　と、落ち着いた声が響いたのだ。

「これより、私は、神を問う」

＊

　まるで、戦艦の砲撃だった。

　一撃ごとに、衝撃波が甲板を蹂躙する。

　幽霊船が、大きく揺れるのを感じた。優に百メートルを超える大型船舶が、甲板のたったひとりの暴虐によって揺り動かされている。

「十一時方向に二歩！」

　ラティオの声に従うと、後頭部の一センチ先を女の裏拳が通過するのを感じた。風圧だけでフードどころか身体を全部持っていかれて、甲板に転がる。そこから立て直したところで、次の指示が来た。

「六時に一歩！　鎌を薙ぎ払う！　二時に一歩で跳躍！」

　声は、魔力による念話ではない。

　錬金術師が付与した何かで、自分の頭蓋骨から内耳が直接振動させられているのだ。骨伝導イヤホンなんかと同じ理屈。

　どうしても間に合わない瞬間には、ラティオ自身の骨剣が差し込まれる。

　そのおかげで、かろうじて抵抗できていた。

　だが、防戦一方には違いない。

　そもそも、相手が嵐のようなものなのだ。数秒後に暴風雨が来ると知って、一体何になるだろう。ムシキにしてみれば軽い一撃でも、こちらにとっては必殺。

　━仙人。

　その言葉の恐ろしさを、自分は思い知っていた。

　同時に、その仙人に抵抗できているラティオの凄まじさも肌で感じた。彼女の指示がなければ、自分は一体何度死んでいたことだろう。

　だが、これは綱渡りどころか、蜘蛛の糸を渡っているようなものだ。いつ切れてもおかしくないのではなく、まだ続いていること自体が物理法則への反逆に等しい。

「はは、ひとりだと難しくても、ふたりならなんとか凌げるか？　その鎌娘の動きは悪くないが、だったら体力比べといくかね？」

　体力比べ、というほど保つとは思えない。

たった一秒が、一時間ほどにも長かった。この女の暴力から生き残るには━命をもぎとるには、刹那の思考にさえ死力を要求される。必死に考え、必死に動き、必死に戦い、それでやっと一秒を生き抜ける。

　その繰り返しの中で、後ろから師匠の声が聞こえてきた。

「まず、君エルゴに喰われた神は、けして無作為に選ばれたというわけではあるまい。この理由は単純だ。神とはさまざまな属性の集合体であり、でたらめにかき集めれば、間違いなく反発し合うからだ」

　似た理屈は、以前も話していた。

　複数の神をひとつの器におさめていることが信じられないのだから、なにか理屈はあるはずだと。

「今回の場合、ふたつほどの共通点は明らかだった」

　傾いだマストを蹴って、ムシキの掌しょう打だをかわす。

　掌打の余波だけで折れたマストを視界の端に入れつつ、次は斜めに跳ぶ。

　ラティオの指示に従うだけではなく、その場に応じた創意工夫も必要とされる。ひょっとしたら、それも彼女の予測に組み込まれているのかもしれないが、脳の加熱でおかしくなりそうだった。

「ひとつは、水か海にまつわる神ということ。君の夢はもちろんのこと、海で漂流しているところを発見されたというなら、これは偶然ではありえない。なぜならば、多くの神話において、海における漂流とはそれ自体が神の属性だからだ」

　それでも、静せい謐ひつな教壇に立っているかのように、朗々と師匠の声は響く。

「たとえば、極東のヒルコや、北欧神話のニョルズなんかがこの代表格だろう。マレビトや漂着したものを神の依代と見る信仰は世界各地にある。さきほどの夢の話も合わせれば、君の内包する神が、海か水の属性を持つだろうことは想像がついた」

（━鎖！）

ムシキの手枷から、鎖が伸びたのだ。

　死神の鎌グリム・リーパーで打ち払い、搦め捕られる前に、一瞬だけ匣の状態へ戻す。それだけは、絶対に回避せねばならなかった。捕まった場合どんな目に遭うかは、骨の巨人タンゲレが拘束され、串刺しにされたことからも明らかだ。

「イッヒヒヒヒ！　やばいなこれは！」

　アッドの声にも、常ならぬ緊張が滲んでいた。

　師匠の声が、また届く。

「もうひとつは、手」

　かすかな震えを抑えながら、師匠が手をあげる。

「君の操る幻手は、これ以上なく分かりやすい。そして、手とは進化だと、私は君に言った。手に受けた情報圧こそが、人を猿から押し上げたのだから」

　本当に、それは個人授業のようだ。

（……ああ）

　こんな時なのに、少しだけ泣きたくなった。

　やはり、この人にはこの姿が似合う。たとえば、探偵が事件を解明するように。たとえば、外科医が手術を執刀するように。

　師匠には、講義の姿こそがふさわしい。

「神において、手があらわす表象はおおよそ『くまなく届く』ということだ。アジア圏の千手観音ならばくまなく救うという象徴シンボルとして、多くの腕を持つ。逆に、阿修羅などの戦神にとっては破壊の象徴だ。ゆえに、神の手を持つのならば、本来人には接続アクセスできない情報にまで届くこととなる。つまり、人類にありえない進化まで届くと。だから、君は記憶飽和を起こしたが……これは、君をつくった者たちにとって想像のついていた現象だったんじゃないか。だから、あのとき、言ったんだろう。まだ、覚えていられたかと」

──『はは、まだ覚えていられたか。いや、忘れられなかったか？』

確かに、あの鷹はそんな思念を飛ばした。

あれは、エルゴが当然記憶を失っているはずだという前提の台詞ではなかったか。

「ならば、さきほどの共通点も同様となる。君に喰われた三柱の神は、何らかの形で進化にまつわるものなのではないか」

「はは、面白い講義だな！」

美しい片目をつむり、ムシキが笑う。

無論、こちらと高速で戦闘を行いながらだ。向こうにしてみれば、子供をあやしながら、会話しているぐらいの気分かもしれない。

「褒めてやる。戦の最中にそんなもったいぶった講義を始めた連中は、妾あたしの時代にもほとんどいなかった。だが、それでどうする？　世界中に星の数ほどもいる神を、その程度の縛りで絞りきれるっていうのか？　いやいや、地球から認識できる数に限定するなら、星の数よりもよっぽど多いだろうにさ」

彼女の言葉も、分かる。

世界中にどれだけの神話と、それにまつわる神がいるのか。

北極星ひとつをとっても、それぞれの文化圏で異なる名前で呼ばれ、異なる神を紐付けられている。師匠が言っていることは、血液型と髪の色だけを頼りに、ひとつの国から犯人を絞り込もうとするようなものだ。

実際、師匠もうなずいたのだ。

「無理だとも。今の推測は、エルゴの現状を整理しただけだ。だが、神のうち一柱は、事実上知らされていたようなものなんだ。考

査で紛れ込ませるボーナス問題さ。難問のとっかかりとして、まずこれから解いてもらおうというやつだ」

　師匠が自分の部屋で唸りながら、テスト問題をつくっているところは、何度か目撃したことがある。

　もちろん自分も受ける試験なので、そういうときはなるべく距離をおいているのだが、徹夜明けの師匠はいささかバツが悪そうに、苦労してつくっているのだから、君たちは試験を作ったものの気持ちを考えてくれたまえ、などと話していたものだった。

「今回の場合、あなたがムシキと呼ばれたから」

「へえ」

　女の眉が、ぴくりと動いた。

「中国古代において、三皇五帝のひとりともされる禹う王おうの治世下、強大なること極まりなしと恐れられた妖怪がいた。その姿は猿えん形ぎょうにして、剛力は九頭の象にも勝る。雪のような頭に白い牙を持ち、火眼金睛であったという。淮わい水すいにて雷雨を起こし、怪異の軍団をつくりあげて暴れていたこの妖怪に、禹王は大いに悩んでいたが、ついには神群と龍を差し向けて捕縛した。ようやく捕まえた妖怪に、禹王は特別な鎖を巻きつけ、金鈴を取り付けたそうだ」

「ぁ……！」

　寸瞬、息を止めてしまった。

　師匠の言った妖怪の姿が、女の特徴と一致していたからだ。猿形というのはともかく、火眼金睛や金鈴、腕に巻き付いた鎖までそのままであった。

　荒れ狂う波の中、師匠はその名を告げる。

「妖怪の名を、無む支し奇きという」

「…………」

　かすかな苦笑が、女の唇に滲んだ気がした。

「ムシキは無支奇。この妖怪は、現代においても有名な、とある神性の原型であるとも言われている。だからね、エルゴに眠る神の中で、これだけは予測がついていた。あれこれ前置きをしたのも、この問いが名をあてるだけではなく、エルゴが知って、体験してきたことから納得してもらうべきだからでね」

　師匠が、さらに続ける。

「花か果か山ざん水すい簾れん洞どう美び猴こう王おう──ああ、この名前にしてからがすでに水が入っている。かの石猿は天然自然の気を受けて練り上がり、滝壺に潜って、さまざまな妖怪たちを従えた。天竺への取経がクローズアップされて忘れられがちだが、あれが水神の一種だということは海運都市シンガポールにおいて、とりわけ尊崇される神であることからも証明できるだろう」

「ほざくな、エルメロイII世！」

　初めて、女が吼えた。

　その身体が、滑るように間合いを盗む。

　文字通り、瞬きひとつで師匠のすぐ近くへと歩を進め──横合いから飛び出した自分と、ぴたりのタイミングでかちあう。

「そこだ、グレイ！」

　予測したラティオが、自分に指示していたのだ。

「アッド！　第一段階応用限定解除！」

「ああくそ！　さすがにこの怪物をまともに受けきれる気はしねえぞ！」

　死神の鎌グリム・リーパーが、大盾へと変形する。

　無理やり割り込むようにして、女の一撃をその盾が防いだ。

　大盾にくわえて、限界まで『強化』したはずの自分の身体が、それでも砕けるかと錯覚するほどの衝撃であった。物理と魔力を重ね合わせた一撃、というだけではなく、骨と肉の間を突き通すかのような衝撃。

「反転リバース！」

　自分の叫びと同時に、魔力が炎となって反転する。

「浸しん透とう勁けいにも耐えやがるか！」

　舌打ちした女が、炎を打ち払いながら、たたらを踏んだ。

　驚いたのはこちらだ。アッドが受け止めた魔力の八割がたを反射したはずなのに、やっと女をひるませただけ。

　師匠は、変わらず目の前。

　ムシキが指一本でも触れれば、たちまち命を奪われる距離。

「師匠──！」

　叫んだ瞬間、女の横合いに緑の石が投げ込まれたのだ。

「Ich werde Sie gehen lassen.解放Sturm,嵐 der umstürzt撃──！」

　翠玉エメラルドによる、宝石魔術。

　その宝石から発せられた暴風が、体勢を崩していたムシキを吹き飛ばした。

「凛さん！」

「仙人だろうがなんだろうが……なめられてばかりでいられますかっての……」

　マストに直撃していた凛が、血の気の引いた顔をあげたのだ。

　けして、ムシキを傷つけられたわけではない。

　それでも、時は稼げた。

　凄絶な戦いの中で、ムシキが肉薄した先ほどですら、変わらずに師匠は佇んでいた。

「……ここまできても、私は場違いで、役立たずの頭でっかちだ。時計塔の君主ロードなんて称号をいただいたところで、私自身が何か変わるわけじゃない。だが、それでもやれることがあるらしい」

　自嘲気味に、師匠が笑う。

　震えているのは最初から。恐ろしいのはもっと以前から。

　ああ、自分がこの場で戦っていられる理由を、ひとつ再確認した。

　この人は、自分よりも怖がりだからだ。けして英雄なんて器ではない。弱くて、ずるくて、わがままで、時々馬鹿みたいに優しい人。それでも一緒に立ってくれるから、それならいいだろうと、思わされてしまったんだ。

　あなたが抗うのなら、自分もそうしようと。

「審さ神に者わとして、エルメロイII世が神の名を審つまびらかにする」

　宣言し、師匠は言葉を続ける。

　フーダニット。誰がやったのか。もしくはその逆。

　誰が、喰われたのか。

「汝、エルゴの喰らいし神の名は──」

4

「やっと人の声を聞いたかよ」

　不意に呼びかけられて、彼は自分の居場所に気づいた。

　海の上だった。

　いや、

（……これは、海じゃない？）

　と、彼は瞬きした。

　不思議な光景だった。

　青空のただなかのようでもあり、同時に湖の上のようでもあった。ラナに見せられた海外の写真で似た風景を見た気もしたし、まったく異なっている気もする、ひたすらに蒼い世界だった。

「海と湖の区別？　はは、塩っ辛いかどうかか？　そいつは俺には関係ねえな」

　それは、水に突き立った柱の上に座っていた。

　実際に柱なのかどうかは分からない。それほどに大きな棒である、ということだけがはっきりしている。

　興味深そうに、こちらを見つめている。

　猿の顔をしていた。

　比喩ではない。人懐っこそうな猿の顔がそこにあった。

「要は水神のゆりかごってこった。外で、あの五月蝿い先生がぴいちく言ってやがることのまんまだ」

（……外、で？）

若者の思考は、ぼんやりしている。

　今、己がいる場所について、きちんと認識できていない。

　ただ、目の前の相手が途轍もなく巨大な何かを抱えている……ということだけは理解できた。自分より一回り小さいぐらいなのに、感じる圧力は、巨大な山脈を仰ぎ見ているのではと錯覚するほどだった。

「おお、外でさ。妙な審神者ではあるが、やり方はまっとうだ」

　と、猿えん形ぎょうは答えた。

　それで、思考が直接読まれていることに、彼は気づいた。

「審神者は、ただ神の名をあてればいいというものじゃない。お前に喰われてしまった俺たちは、言ってしまえば、とっくに消化された食事だからな。そいつに名付けるためには、手順が必要だ。エルゴお前が体験し、その目と耳で知ったことからでなければ、正しい答えであろうと通らない」

　つらつらと話し、こちらを改めて見やる。

「そして、今、答えは通った。お前はどうしたいんだ。俺を喰らった男」

「僕は……」

　一瞬だけ、彼は口ごもった。

「言われた。……そう、言われたんです。自分の教室にいるからには、なすべきことを、やりたいことを考えてもらうって。……僕は、それが、とても嬉しかったんです……だから……」

　何度も詰まりながら、それでも最後まで言葉を紡ぐ。

「だから……あの問いに、答えたいんです」

「だったら願え。俺たちはそのためにつくられた」

　猿えん形ぎょうが、言う。

「神なんてのは、結局、人の願いを受け止めるための器だ。実際の

ところ、それが人の救いになるかどうかは別としてな。まして、お前の内側にいるんだから」

（僕の……内側……に……？）

　彼が、思う。

　ぼんやりしていた焦点が、不意に合った。

　急激に、意識が鮮明になり、それと同時に腹腔から力が湧き上がってきた。内臓が燃えているのかと錯覚するほどの、異常な熱であった。

　猿形の神が、言う。

「オレの名を呼べ、小童！」

「あなたの名は──」

## 5

　エルゴの、眼が開いた。

　ふわ、と浮き上がるように立ち上がったとき、今までの若者とはまるで違う色に、その瞳は輝いていた。

　ムシキと同じ、火眼金睛に。

「あれ、って……」

　茫然と振り仰いだ自分に、たたらを踏んだ師匠が呟く。

「火眼金睛を持つ大陸の神格はいくつもあるが、最も有名なものとなると、おおよその答えは一致するだろう。七十二般の変化の術を修め、筋斗雲なる雲に乗る石猿。太たい上じょう老ろう君くんの八はっ卦け炉ろで四十九日燻いぶされた瞳は、火眼金睛に変じていたという」

　もちろん、知っている。覚えている。

　あのホーカーセンターで、師匠と鑑賞したワヤンの役がそれであった。

「……孫悟空」

「もしくは孫行者とも呼ばれる。ムシキは何千年と言っていたのだから、三さん蔵ぞう法ほう師しとともに旅した西遊記の内容に準ずるなら、それより以前、いずれ孫行者となる石猿から、何らかの部位を採取していたことになるな。もっとも、神霊と同様に、神もまた単純な時系列からは切り離された存在だが」

　師匠の視線は、数メートルの距離をおいて向かい合うふたりへと据えられていた。

　エルゴとムシキ。

「起きたか、孫行者」

自分たちと刃を交わし合っていた女の顔から、不思議と険が取れている。

　今のふたりは誰も邪魔できないように思われた。

「ムシキ……さん」

「む」

　上ずった若者の声に、ムシキが小さく唸った。

「お前、意識はエルゴのままなのか」

　と、目を見張る。

　ムシキだけではない。

　ラティオも、信じられないというように、自分の隣で硬直していた。

「はは、大したものだ！　初めての成功例だ！　クルドリスの執念が、彷徨海の怨念が、妾あたしの好奇心が、ついに実を結んだか！」

　女が呵か々か大たい笑しょうし、ふたりの火眼金睛が互いを映しあった。

「ならば、参ろう」

　これまでのどこかふざけた態度とは異なり、はっきりと構えをとった。

「我が名は無支奇。山嶺法廷は十官の番外なり！」

　間合いを盗み、彼女の手が弧を描いた。

　三手、打ち合った。

　女の手刀を、エルゴの半透明の幻手が阻む。

　その一撃ごとに、空気に衝撃が走った。

　まるで、凄まじく巨大な鐘を打っているかのようだ。並の魔術師

であれば余波だけで気絶する域に達しており、それこそ師匠は今にも倒れそうに胸を押さえていた。

　驚愕すべきは、エルゴがその手刀を受けたことだった。

　避けるのではなく、受けた。

　アッドの大盾ですら、一撃で粉砕されるかと危惧した攻撃である。けして破壊力が衰えたのではない証明に、防御したエルゴの足元で、幽霊船の甲板は蜘蛛の巣のようにひび割れたのだ。ロケットランチャーの直撃にも無傷で耐え抜いた船体が！

　どっ、とエルゴが地面を蹴った。

　ムシキも同時に。

　中空で、ふたつの影がもつれあった。

　雷鳴にも等しい轟音が、鳴り響く。その手足が動くたび、稲妻のごとく濃霧を切り裂いていく。海には高波が立ち、鄭和の幽霊船は儚い小舟のごとくに揺れた。

　神話の戦いとは、これだ。

　一挙手一投足に、自然の摂理が捻れ狂う。

　その狭間に、エルゴの幻手が変じていくのを、『強化』された自分の視覚は捉えた。

　六本の幻手が、エルゴ本来の腕に重なり、合一する。

「神核装填・斉天大聖」

＊

　──装填／神という名の弾丸。

*

　合一された腕に、何かが宿るのを感じた。
「ああ……ようやくだ」
　嬉しそうに、女が笑う。
　美しい花が、開くかのようにも見えた。
「だが、ありがたくくらってやるほど、根が素直にできてなくてね」
　その手枷から、金属の蛇のごとく鎖が伸びた。
　エルゴは、ただ呟く。
「神格展開・孫行者」

*

　──展開／周辺部位バレルの置換。

*

　女の鎖が、エルゴの幻手に巻き付いたのだ。
「エルゴ！」
　思わず、声が出た。
　しかし、変わらずに若者は囁き続ける。

鎖の下で、何かが腕の表面に展開していった。

「神殻纏てん繞じょう・如意金箍棒」

*

　──纏繞 / 我が手は神を象かたどる──！

*

　一気に、『力』がカタチを取った。

　バキリ、と鎖が砕けた。あのタンゲレでも振りほどけず、自分の死神の鎌グリム・リーパーでも切り裂けなかった鎖が、こんなにもあっけなく。

　純白で巨大な腕が、そこに屹立していた。

　ある種機械的なフォルムで、なめらかな表面には幾筋も光が流れていた。魔術刻印にも似たその紋様の美しさに、自分は息を呑んだ。

　もはや、その腕は幻手にあらず、人の手にもあらず。

　すなわち、神腕。

「妾あたしの、鎖が?!」

「僕は思う」

　囁きは、神の威勢をもって轟いた。

「ゆえに、我あり」

　ぐい、と神腕が振りかぶられた。

その範囲から、凄まじい速度で女が撤退する。追った巨大な神腕が虚空を切り、女の髪の一房をもぎとり、その向こう側の波間に大穴を開けた。

（──避けられた?!）

そう思ったが、女の顔はしまった、というように歪んだ。

「悪手だったな……うっかり避けちまった」

その意味は、すぐに知れた。

不自然に、空中で女の動きは止まっていた。

あたかも、彼女を取り囲む空気が、突然剛体と化したかのようだった。

「伝説で孫悟空が振るう如意金箍棒は、本来武器ではなく、海の底を突き固めたとされる品だ。曖昧なものに形を与えるといってもいい。ある意味で、世界を繋ぎ止めていた宝具のひとつだろう」

師匠が言う。

その言葉に、どきりとした。

世界を繋ぎ止めるというのは、自分が振るう聖槍にも該当する事項だったからだ。

「周辺の空間が突き固められたんだ。ああ、仮にも神に達した孫行者ならば、それぐらいの権能は振るうだろう」

停止した女を前に、ギュルリ、と神腕が唸る。

まるで穿せん孔こう器きのように、手首から肘にかけての部分が何層かに分割・展開し、螺旋状に回転しているのであった。そのひと廻りごとに、数量ではかることも愚かしいほどの魔力が、壮絶なスパークを散らしていく。

如意──持ち主の意おもいのごとくに変じるということは、その宝具にはひとつの世界が内包されていたのではないかと、そんな考えが去来した。

もう一度振り上げられた神腕を中心に、空間が裂けていく。

破れ目から、星が見えた。

古代の海を突き固められたなら、蒼そう穹きゅうを破ることもできるだろう。

一撃目は空間を固定して敵を封じ、二撃目は身動きのとれぬ相手を確実に穿つ──

「なるほど、これが現代か」

と、女は笑った。

構えられた神腕が、砲弾のように撃ち出される。

まるで、それは地上に生まれたブラックホール。色も音も消え失せて、ただ虚無だけを撒き散らす、神話の残り香。

「悪くない。悪くない。神代からかろうじて残った、乏しい資源を可哀想なぐらい必死にかきあつめて、よせあつめて、たかが百年足らず生き延びるために、その片端から消費して。ははは、そいつはまるで──」

そこで、言葉が途絶えた。

神腕の巻き起こした空間の裂け目が、彼女の姿を呑み込んだのだ。

捩よじれる虚無が、すべてを引き裂き、崩壊させる。神秘的な強度も耐性も、この虚無の前には意味をもたぬ。引き裂かれた空間は、すでにひとつの物理現象だ。

老いた巨星の終焉にも似て、周辺の空気はおろか幽霊船の一部も喰らいながら、なおも虚無は拡大し──やがて夢から覚めるように、本来の状態に復していった。

後には、波の音だけが残っていた。

語り部が、話を終えたかのようでもあった。

　エルゴの神腕が消滅し、元の姿に戻った若者が、後ろに倒れ込む。

　あわてて駆け込んだ自分が支えると、彼はひどく衰弱していた。神腕の影響か、己で喰いちぎった部分だけは治っていたが、困こん憊ぱいぶりはただごとではない。無理もあるまい。あれだけの魔力がどこから生まれたのかさえ、自分には分からないのだ。しかし、不相応な魔力を使えば、その反動に襲われるのは間違いなかった。

　かつての自分も、聖槍の反動には耐えられなかったように。

「大丈夫です……少し、疲れただけですから……」

　淡く、若者が微笑をつくる。

　痛々しさを感じながら、ゆっくり近くに背をもたせかける。

　その隣で、師匠はムシキの消えた地点にしゃがみこみ、眉をひそめていた。

「やはり、陽神か。仙人の伝承通りだな」

「陽神？」

「実体を持つ分身、といったところでね。いわゆる幽体離脱が陰神ならば、陽神は魔力を集めてかりそめの肉体とした代物だ。中国の古典にも似た話がある」

「歴れき世せい眞しん仙せん體たい道どう通つう鑑かんですね。陰神を使った僧侶は花を持てなかったけれど、陽神を使った仙人は花を持ち帰ることができたっていう」

　最後は、凛の言葉であった。

このあたりの細かな用語は、さすがにさっぱり分からない。しかし、あれがムシキの本体でなかったのだ、という事実だけは理解できた。

「じゃあ、本物のムシキは」

「分身からいささかのフィードバックはあるにせよ、無傷だろうな」

　忌々しそうに、師匠が呟く。

「最初の変化と嵐以外、魔術らしい魔術を使わなかったことからも、おそらくそうだろうとは思っていたんだ。十官の番外とかいうなら、まず間違いなく特権領域にまで接続できるだろう、思想鍵紋の使用もなし。……簡単にいえば、さっきのムシキは魔術刻印もなく、基礎以外の魔術もなしの魔術師みたいなもんだ」

　なんだ、それは。

　どう形容したらいいかも分からない。

　あれほどの暴力を振るいながら、本気を出せる状態ですらなかったというのか。自分もエルゴも呆気にとられたまま、ひたひたと冷たいものが背筋をよぎるのを感じていた。

「だが、本人も次の分身もすぐには来るまいよ」

　ラティオが、言い添えた。

「あれはそういう状態だ。手枷を見ただろう？」

「無支奇といえば、古代の禹王に鎖と金鈴で鎮められたと聞きますが、彼女はいまだ封印されている状態なのですか」

「…………」

　ラティオは返事をしなかった。

　かすかな緊張が、再び船上に張り詰めた。

　師匠の前に、自分は立ちはだかった。

「手を、出さないでください」

「分かってるとも。この船にいる間は休戦という契約だ。すぐに終わる休戦だが」

　うなずいたラティオの後ろで、のっそりと小山のような姿が動いた。

　骨の巨人──タンゲレがようやくマストを抜き取り、もぎとられた腕も再生させていたのであった。

「あーあー、ひどいめにあったぜ」

「役立たず」

「それはあんまりだ。ラティオお嬢さん」

「肩を寄越せ」

　慨がい嘆たんする巨人がしゃがみこみ、その肩にラティオが乗った。潮風でなびく蒼い髪は、骨の巨人の色合いとよく似合っていた。

「いずれ、また」

　ふたりの姿が、甲板から背中越しに倒れ込む。

　あっという間に海中に没して、波間にも見えなくなってしまった。

「行きましたね……」

　甲板から見下ろして、自分はなんとなく息をついた。

「これから、どうするんですか？」

「エルゴの喰らった神を、還す……だろうな」

　ラティオの言ったことだった。

　──『エルゴの記憶飽和を止めたいならば、神を還すしかないだろう』

「そんなこと、できるんですか？　先生」

　顔をあげたエルゴに、師匠は少し考えてから答える。

「実は、考えている方法はある。……もともと、シンガポールへ講義に来たのも、その研究の足しになるだろうと思っていたからだ。だが先に、残る二柱の神も明らかにする必要があるだろう」

　フーダニット。もしくはその逆の、フームダニットwhom dunit。

　誰が、彼に喰われたのか。

　長い旅になる気がした。このシンガポールから始まる、神を問うための旅。

　間をおいて、師匠は懐から葉巻を取り出した。こちらも耐水の魔術のかかったケースからマッチを取り出し、火を擦りつけるようにしてから、咥える。

　一服して、煙をくゆらせてから、ふと話題を変えた。

「ところで凛、もう海賊たちは再招集したか」

「ええ、今連絡しました。安全は確認できましたし、あのラティオも脅威にならない海賊に手を出すようなタイプじゃないでしょう」

「そうか。なら、間に合うな」

「間に合う？」

　首を傾げた凛に、ひょいと師匠は指を動かした。

「この幽霊船が崩壊してるからだよ。……なるほど、休戦は船にいる間だけ、と念をおしたのはこういうわけか。アトラス院らしいといえばらしい」

　すぐ、自分も師匠の指先を視線で追った。

　幽霊船の半ばを覆っていた骨が、その延長上でみるみる縮小していたのだ。無論、本来は海に浮かぶような状態ではない。

濃霧もどんどんと薄れていく。

　おそらく、どちらも彼女がいなければ維持できないものだったのだろう。

「な──！」

　凛の表情の変化は壮絶だった。

「ちょ、ちょっと！　ちょっと待って！　まだお宝の物色もしてないのよ！　だって鄭和の船よ！　そんなの、全部わたしのものに決まってるでしょう！」

　全速力で、船の中へ駆け込んでいく。

　船が崩壊していくなら、内側は明らかに危険だと思うのだが、止める間もなかった。

　茫然とした自分を見やり、

「ふふっ」

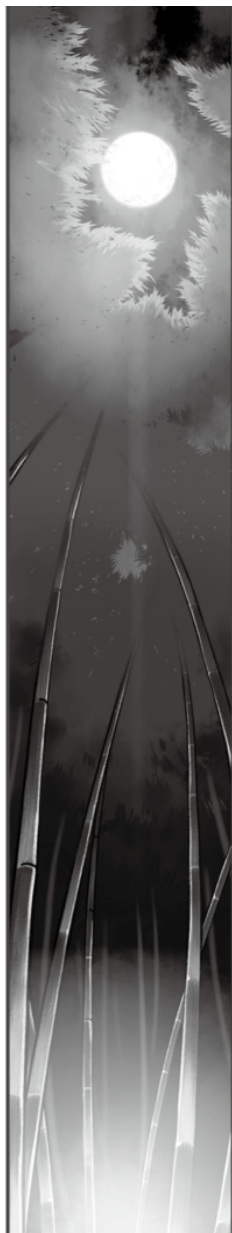
　エルゴが吹き出したのだ。

　そんな風に、この若者が笑うのを初めて見た気がした。

「……はは」

　今度は師匠が続き、それでたまらなくなって、ついに自分も吹き出してしまった。

　凛の悲鳴と、自分たちの密やかな笑い声と、やがて集まってきた海賊たちのボートのエンジン音が、幽霊船の崩壊に重なったのであった。

# ✦終章✦

遠く、ジェット機の発着音が聞こえた。

いっそ寒いぐらいの勢いで冷房がガンガンかかり、たくさんの免税店が立ち並ぶ中を、賑々しく人々が闊歩している。楽しげな会話とともに、色とりどりのスーツケースがリノリウムの床を滑っていった。

地下鉄にあたるＭＲＴで、おおよそ三十分。シンガポールの商業地から北東に位置する、チャンギ国際空港であった。

あれから数日後、自分たちはその空港で飛行機の到着を待っていた。

師匠と自分と、エルゴと凛の、四人である。

（前に、来たときとは……）

不思議な気持ちがあった。

自分にとって、シンガポールはまったくの異国で、単に師匠が行くからというだけの理由で派遣された土地であった。ロンドンからこの空港に到着したときはぴりぴりと緊張して、周辺の物事に気を配る余裕なんてなかった。

でも、今は。

やたら強い冷房にも、独特なスパイスの香りにも、笑いさざめく人々にも、丁寧に四ヶ国語で書かれた看板にも、それぞれの背景が感じられた。マーライオンのぬいぐるみを見れば、シェントン・ウェイからの海の眺めを思い出し、ビーチのポスターを見れば、あの海賊島でのひとときを思い出してしまう。

旅とは、こういうことなのかもしれない。

知らないことに触れて、知らない文化を味わって、いつのまにか新しい引き出しが自分の中にできあがっている。

当たり前かもしれないけれど、自分がいままで気づかなかったこと。

この身体で、やっと実感できたこと。

「楽しかった、気がします」

　呟いた自分に、師匠が振り返った。

「何がだね？」

「このシンガポールでのことが。何もかも大変だったけれど、きっと楽しかった。今になって、そんな気がしてきました」

「そんなものだよ。楽しかったことほど、過ぎてから気づくものだ」

　少しだけ優しい声で、師匠が肯定してくれた。

「レクリエーションには程遠いが、いい国だった。次は厄介事抜きで訪れたいものだ」

「はい！」

　強く、うなずいた。

　それから、師匠がひとつ咳払いして、付け加える。

「もっとも、後始末が大変なのは変わらんがね。時計塔シンガポール支部にはずいぶん引き止められたが、あの幽霊船のこともどこまで勘付かれたやら」

「どうせ、言えることなんて何もないでしょう、先生」

　凛が、片目をつむった。

　まったく、その通りである。

　事情を説明すれば、ルクスカルタを使った際の詐欺行為についても、触れねばならないことになる。そうでなくても、アトラス院や山嶺法廷の仙人、神を喰らったエルゴの説明が、どれほどの騒動を巻き起こしてしまうか、想像もつかないからだ。

　自分たちが巻き込まれた嵐が、どれほどの規模なのか、まだ何も分からない。

　なんだか途方のない話で、頭がくらくらしてしまった。

助けを求めたくなって、もうひとりに話しかける。

「エルゴさんは、もう身体は大丈夫ですか」

「あ、いや、僕は」

　もごもごと言って、若者は右手を押さえた。

　幽霊船の崩壊した後、エルゴは気絶したのだった。しかし神腕を起動させた際に右腕は治癒しており、残りの外傷も凛が用意していた回復用の宝石魔術を受けると、一両日で全快してしまった。この場合、エルゴの体力と凛の魔術のどちらを褒め称えるべきかは分からないが、おそらく両方なのだろう。

　自分も、すでに平時と変わらない。

　ちなみに一番ダメージを引きずっていたのは師匠で、船酔いの気持ち悪さが抜けきらなかったらしく、昨晩遅くまで胸元をさすって唸っていたものだ。これは飛行機も無理ではと心配していたが、なんとか今朝には立ち直り、皆がほっと安堵したものだった。

「む。私がどうかしたのかね」

「あ……いえ」

　考え事をそのまま話すのに気がひけてしまって、かぶりを振ったところで、大量の免税店が目に入った。

「そう……ほかの生徒のみんなにはお土産を用意したんですが、スヴィンさんにもあったほうがいいかなって」

　エルメロイ教室を卒業した生徒の名前である。

　卒業後もちょくちょく顔を出しては、自分や後輩たちを手伝ってくれている。とりわけフラットとは縁が深く、いまでも教室にやってきてはかなりの頻度でトラブルも起こしていた。凛とルヴィアに劣らぬ、エルメロイ教室の元祖核弾頭と言ったところだろうか。

　自分はどうも嫌われてるみたいで、よく睨みつけられてしまうのだけど。

「あれなら、香りが良いものを喜ぶだろう。ふむ、シンガポールら

しいお土産といえば、たとえばお茶なんかいいんじゃないか。ロンドンでは出会えない味だからね。君が紅茶の代わりに淹れてやれば、さぞ感涙に咽ぶだろうとも」

「そう、でしょうか」

　大袈裟な表現だと思うけれど、師匠のオススメなら安心はできる。

「じゃあ、ちょっと行ってきます」

「あー、待ちなさい。グレイひとりで行ったら、どこでカモられるか知れたもんじゃないでしょ！　両手いっぱい、お土産だらけになったらどうするのよ！」

　仕方ないわねといった感じで、凛がついてくる。

　その気遣いが嬉しくて、つい唇をほころばせてしまったのであった。

＊

「……いいんですか」

　グレイと凛の去った後、残されたエルゴは口を開いた。

　明るい空港のトランジットエリアで、若者はひどく陰鬱な面持ちをしていた。

「なんのことだね？」

「あのとき、僕は、グレイさんを食べたかったんです」

　それが比喩ではないと、今のII世は知っている。

「君のホワイダニット、か。食人衝動……とは違うな。あの幽霊船でも話したが、君の場合は喰神衝動とでもいうべき代物だ」

「喰神……衝動……」

慎重に、言葉自体が恐ろしい怪物であるかのように、繰り返す。

　そんな若者に、II世は続けた。

「グレイの内側にいるのは神とは違うが……ある意味では似ている。大いなるものと言ってもいいだろう。本来、人の器にはあまるだけの代物だ。少なくとも現代においてはね」

　聖槍を振るうに足る素質。

　つまりそれは、彼女が過去の英雄と同じ顔を持ち、成長を停止させてしまった理由そのものである。

「君の感覚はそれを察して、彼女を喰いたいと思ったんだろう」

　羊と狼、とII世は言った。

　つまり、被食者と捕食者の関係である。

　神喰いの本能として、エルゴがグレイを喰らおうとすることを、あのときからII世は予期していた。

「……元には戻りましたが、あの神腕も、僕にはまるで制御できてなかったです。先生が神を問うてくれなければ、あの場でまた暴走していたかもしれません。いいえ、今度こそ、グレイさんを襲ってしまう可能性だって……」

「耐えたまえ」

　と、II世はきっぱり言う。

「誰もが何らかの我慢をしている。私もグレイも、おそらくはあれだけ才能に満ち溢れたミス遠坂も……君は、そのタイプがいささか独特なだけだ」

　ある意味、独善的な物言いだったろう。

　他人の苦しみは分からない。その程度を測ることは不可能だ。耐えられるものだなんて決めつけは、傲慢以外の何物でもあるまい。

　それでも、言われたエルゴはかすかに表情を和らげた。

「そう、考えていいんですか」

「いいとは言えない。そんなことは誰にも決められない。だから、君が決めるんだ」

「……そうですね」

　沈痛な面持ちのエルゴの頬が、不意に引っ張られた。

「ふぁ」

「いいから、もう少し気をゆるめたまえ。時々生真面目になりすぎるあたり、確かに君はグレイと似てるな。見かけの年齢は逆だが、姉弟のように見える」

「ふぁ、ふぁい」

　引っ張られたままで、エルゴがうなずく。

　意外と頬の伸びがよく、なんだか風船のようであった。元の顔立ちが良いだけに、妙にユーモラスな雰囲気が生まれて、空港を行き交う人々の視線がチラチラと集まった。

　こほん、とII世が咳払いする。

　周囲の注目が散ったのを確認してから、

「──解決のための手がかりは、いくつかある」

　と、人差し指をあげた。

「ひとつは、あの海賊島に、私を誘導したワヤンの役者だ」

「チャイニーズオペラ、でしたっけ。ホーカーセンターで孫悟空を演じて、先生とグレイさんにこっそり手紙を渡したっていう」

　孫悟空はシンガポールでも人気の題材だ。

　だから、偶然ということはありえるが……ここに魔術が絡む以上、そんな可能性は消え失せるだろう。あれは露骨すぎるほどのヒントだった。そして、ラティオとムシキと接触しても、あの役者についてだけは正体が分からなかった。

「伝手を頼って、調査を依頼してるがね。まあこちらはしばらく時間がかかるだろう。……もうひとつは」

言いかけたところで、ジャケットの胸元から軽妙な音楽が鳴った。エルゴは知らぬ、有名なゲーム音楽の一フレーズであった。

　II世が携帯端末を取り出してボタンを押し、

「君に電話だ」

　と、差し出したのだ。

　怪訝そうな様子で受け取ったエルゴの顔が、数秒ほどでにわかに輝いた。

「ラナ！」

「あ、エルゴだ！」

　舌っ足らずな声が、電話機の向こうから響いたのである。

「良かった。この時間なら多分電話に出られるって、凛から聞いてたから！」

「あ、あの……あれからみんなは……」

「それは直接聞きなさいよ！　ほら、ヤオ、次はあんた！」

　何人も交代しながら、海賊たちはエルゴに話しかけた。

　あの後ボートの修理で大変だったとか、新しい拠点で早速フルーツを収穫したとか、初めて嵐を見てビックリしたとか、合流した際のリンが幽霊船の宝を逃した話をずっとしてたとか、ワイワイガヤガヤと集まりつつも、他愛無い話ばかりであった。

「エルゴ」

　と、最後に戻ってきたラナが言う。

「どこに行っても、あなたはあたしたちの仲間。忘れないように！」

「絶対、忘れない」

　うなずいて、そっと目尻を指で拭いながら、エルゴが言った。

「よろしい。元気でやるように。後、待ってるんだから、ちゃんと帰ってきなさい」

　代表としてラナが命令し、通話が終わる。

　そのときには、エルゴは生まれ変わったような顔をしていた。静かな決意が、表情の底に湛えられていた。

　ちょうど空港に流れた放送が、新たな飛行機の到着を伝えた。

「僕たちの飛行機の行き先は、日本でしたね」

「ああ、因縁深いミス遠坂の故郷とは異なるが、先ほど話したもうひとつの手がかりのためにね」

　携帯端末をジャケットの胸元に戻して、II世は言う。

「じゃあ、日本のどこに？」

「東京だ」

　と、エルメロイII世は口にしたのであった。

「君の神を還す方法を、見つけるために」

＊

　──舞台は、移る。

　夜空に、月が出ていた。

　丸い月である。

　下部に薄く雲がかかっていて、この国では喜ばれる風情を醸し出していた。

　月に叢むら雲くも。

花札カードにも使われるほど、親しまれた構図である。

　屋敷の縁側で、その月を見上げる瞳があった。

　片目がうっすらと髪で隠れた、茫洋とした表情の青年だ。おおよその年齢は二十代後半といったところだろうか。どこの国にいても、ひっそりと埋没してしまいそうなのに、どこかしら人を惹きつける空気を纏っていた。

　空気、としか言いようがない。

　パーツのひとつひとつは平凡そのものである。総体としても特筆すべき点は見当たらない。なのに、近くにいれば、ほっと肩の力を抜いてしまいそうな穏やかな気配が、その青年にはあった。

　近くには竹が群生していて、風が吹く度に音を立てている。ザザザザ、と擦れる音は昼の蟬と変わらず騒がしい。

　月と、竹と、雲と。

　かの国最古の物語のひとつ、かぐや姫もかくあらん。

　青年がもっと年老いていれば、そこに去った恋人を追い求めているように映ったかもしれない。そして十年でも二十年でも、あるいは百年の時が過ぎても、きっと彼の纏う気配だけは変わらないだろう。

　屋敷の奥から、幼い声がかかった。

「ずっと座り込んでるけど、どうしたの、コクトー？」

「古い知り合いから手紙が届いたんだ。ところで、その呼び方はやめるように、何度も言ってるだろう？」

「はあい。体冷やさないでね、パパ」

　やんわりとたしなめられて、娘はすごすごと戻っていく。

　空は高く、月は蒼く。

　しかし、青年の表情はかすかな憂いを帯びていた。

　片手で、古びた封筒を持っている。価値のありそうな古さではな

く、単に昭和あたりから出し忘れて、そのままボロボロになってしまった、という風情だった。

「橙とう子こさんからの手紙は久しぶりだけれど」

　呟いて、表面を撫でた。

　書かれた名前の後に、『行』も『様』もない。

　ただ、

『両儀幹也』

　住所とその名前だけが、くっきりと書かれていたのだった。

〈一巻・了〉

# あとがき

　━神を問う。

　━神を答える。

　それは、宙ソラにあるもの。

　それは、岳ツチにわだかまるもの。

　それは、海ミズを流れるもの。

　そして。

　それは、あなたの手のカタチ。

＊

　この物語を手にしてくださったあなたは、どんな方でしょう。

　Ｆａｔｅシリーズに代表されるTYPE-MOONの諸作品で、この小説が初めての出会いでしょうか。それとも、前作にあたる『ロード・エルメロイII世の事件簿』もしっかり読んでらっしゃる方でしょうか。どんな場合でも最大限楽しんでいただけるよう、作者としては全力を尽くしたつもりです。

　その上で、少しだけ、古いファン向けの前提を説明させてください。

　コアファンの方はご存知かと思いますが、前作『ロード・エルメ

ロイII世の事件簿』はゲーム『Fate Stay night』と世界観を同一にする物語です。選択肢を持つゲームである『Fate Stay night』の前日譚として、細かく分岐するセイバールート、凛ルート、桜ルートのいずれの可能性も包括したものでした。

しかし、『事件簿』の未来を描くということは、こうしたルートを決定してしまうことになります。いずれ来たる冬木市の聖杯解体──『stay night』の最後の名残となる、解体戦争のカタチにも少なからず影響を与えてしまいます。

このため、原作の奈須きのこさんと相談し、いずれ解体戦争につながるであろう『独自のルート』を想定した書き方になっています。直接『冒険』の物語と関係するところではありませんが、作中に登場する遠坂凛などがどういうルートを経ているかを想像するときは、こうした前提をふまえていただければ。（このほか『hollow ataraxia』はもちろん、番外編『アーネンエルベの一日』内での発言をどこまで実際に採用すべきかという細かい相談にも、奈須さんは根気強く付き合ってくださいました。本当にありがとうございます）。

*

ロンドンを出て、舞台は世界へと開きました。

魔術師に傾注していた物語もそれにふさわしく、神という言葉を中心に、再構築されました。この場合、神とは上位者であり、人々の歴史であり、文化そのものであり、現代においてさえ意識の中心近くを占めている──それ以上のものとなります。

エルメロイII世は、その神にどう対するのか。

相棒ワトソンであるグレイは、どう向き合うのか。

また、今回のキーキャラクターとして創造されたエルゴは？

今回は、そういう物語です。

ジャンルに分類すれば、文字通りの冒険ものに、広義のミステリ

要素を加えたものとなるでしょう。

　豊穣なTYPE-MOON世界を使って、三つの変則的なフーダニットを求める冒険です。フーダニットとは、通常「犯人は誰か」を指す言葉ですが、ここでは異なる意味で用いています。TYPE-MOONらしい趣向になったのではと考えていますが、どうか、あなたに喜んでいただけますように。

　最後になりましたが、たくさんの監修と編集をつとめていただいた奈須きのこ氏やＯＫＳＧ氏をはじめとしたTYPE-MOONのスタッフさん、ロンドンの外に出ることもありいつも以上に綿密な考証資料をまとめていただいた三輪清宗さん、新シリーズ開始に文庫版のイラストも重なってご苦労をおかけした坂本みねぢさん、フラットの台詞をまるっと起こしてくださった成田良悟さんに改めての感謝を。

　もちろん、この本を手にとってくださったあなたにも。

　次は二○二一年の夏頃にお会いできると思います。

二○二○年十月末日

『ブルー・マン　神を食った男』を読みながら

（本書のサブタイトルに快く使用許可をくださった菊地秀行先生、ありがとうございます）

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

『レンタルマギカ』

『ロード・エルメロイII世の事件簿』

『魔法使いの嫁 詩篇．１０８ 魔術師の青』

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

『Fate / Grand Order』サーヴァントデザイン

（牛若丸、マルタほか）

『ロード・エルメロイII世の事件簿』

イラスト／坂本みねぢ

装丁／ＷＩＮＦＡＮＷＯＲＫＳ